

601
35

復刻
木實方秘傳書

雲藩植樹植林製蠟手記

稻塚和右衛門著

アチック ミューゼウム刊

アチック ミューゼウム彙報 第十



0053508-000

601-35

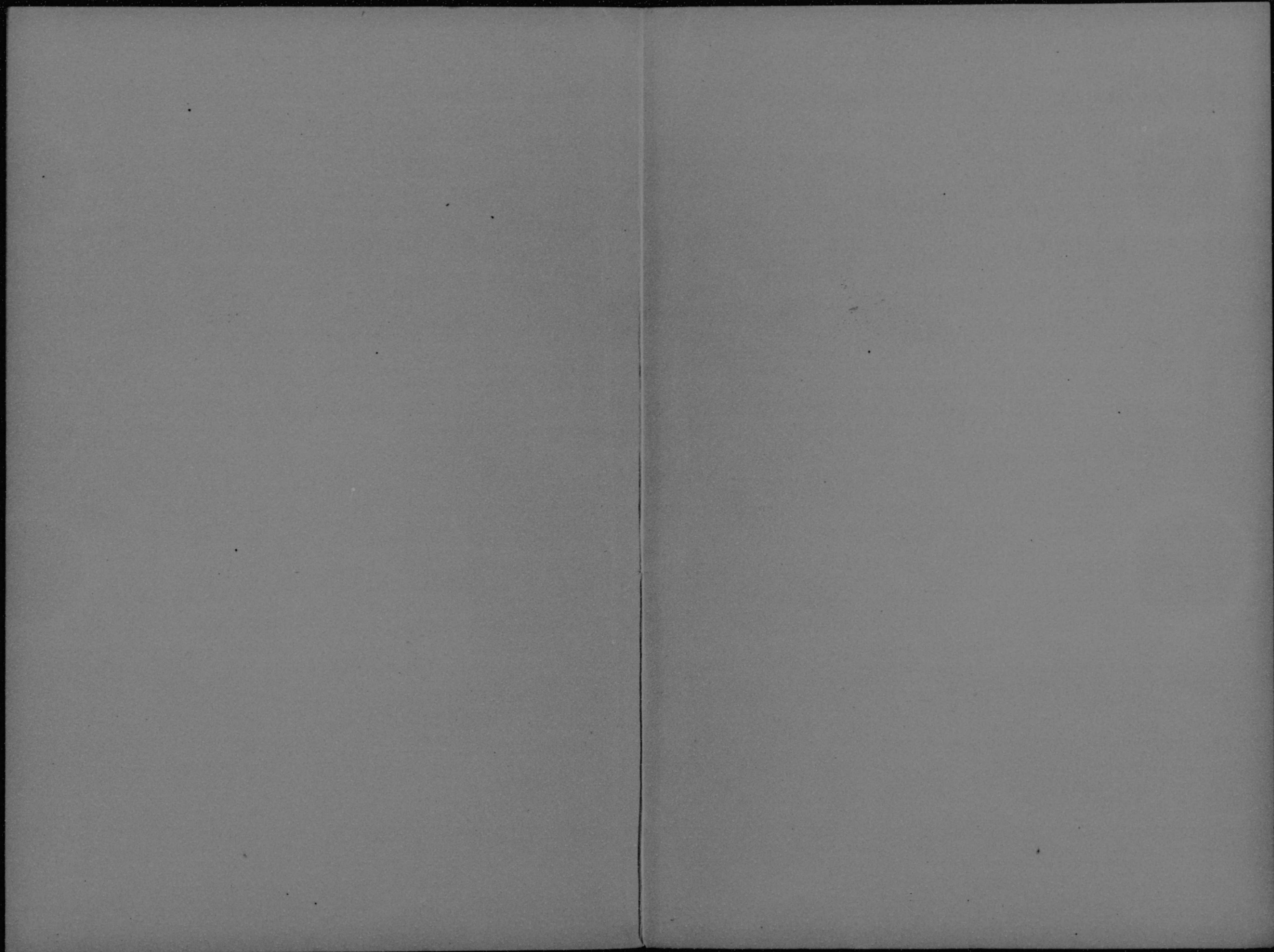
アチックミューゼウム彙報

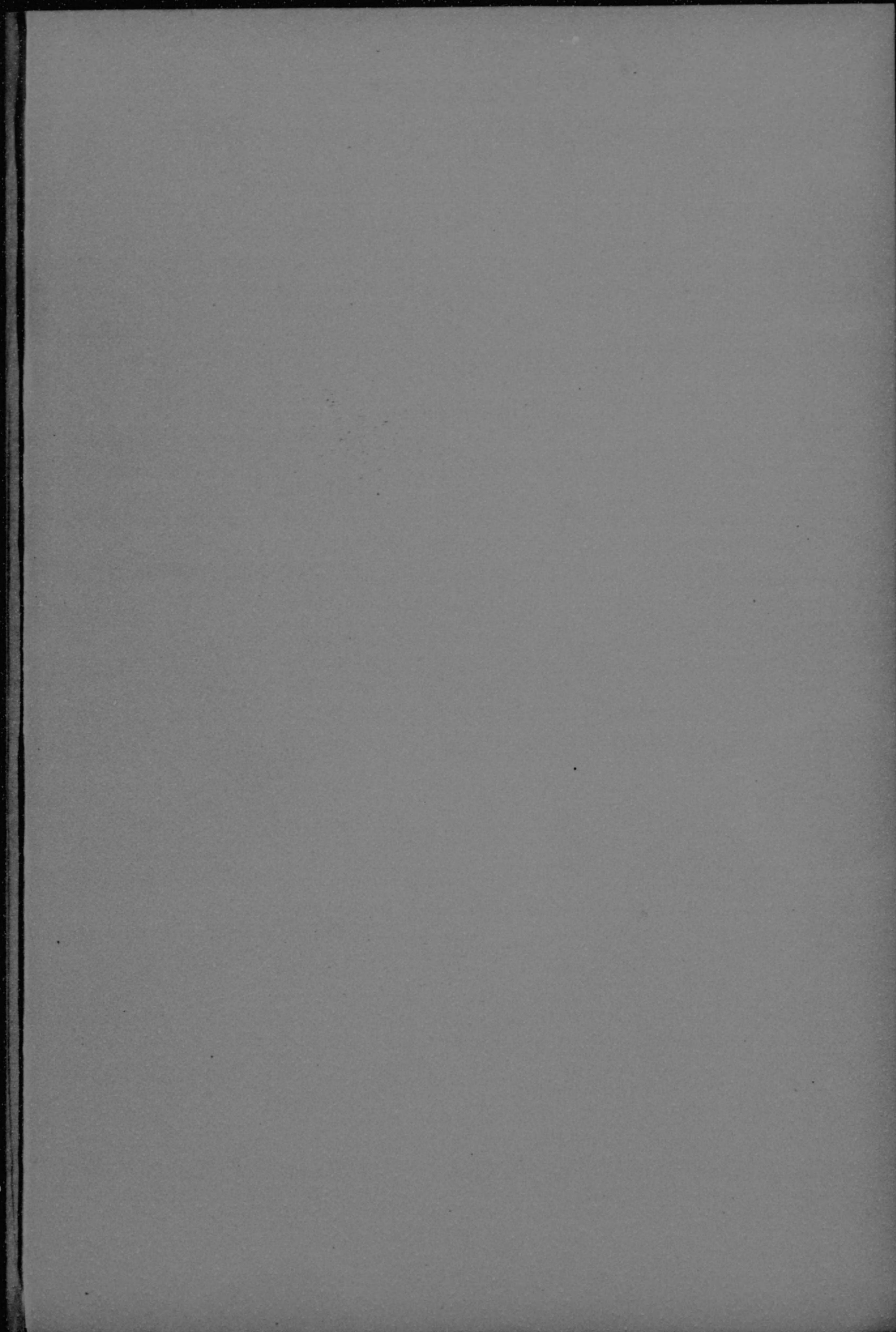
アチックミューゼウム

第10

昭11

AIA





アチツク ミューゼウム彙報 第十

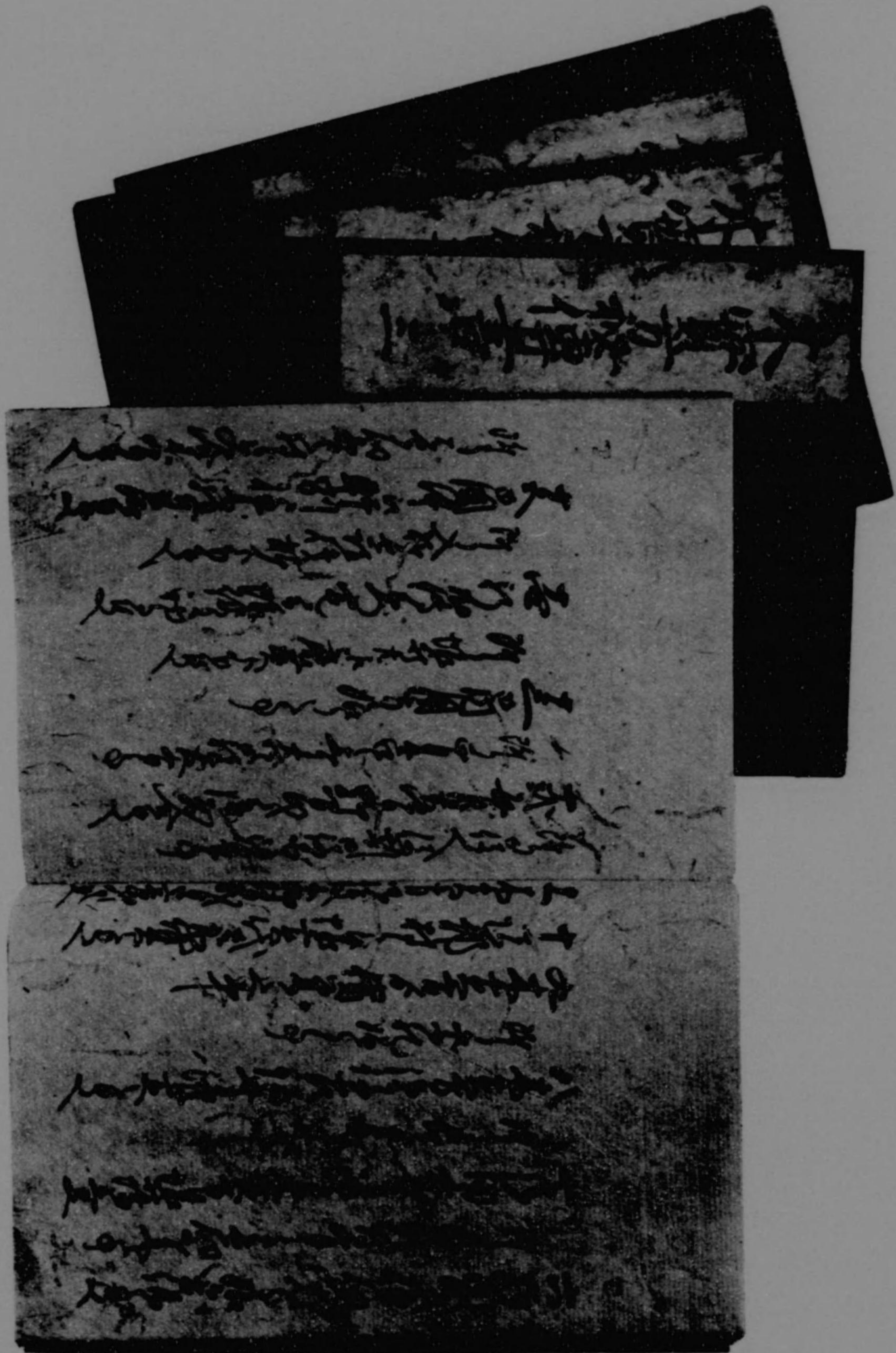
復刻 木實方祕傳書

雲藩櫛樹植林製蠟手記

稻塚和右衛門著

アチツク ミューゼウム刊

木川半之丞氏作

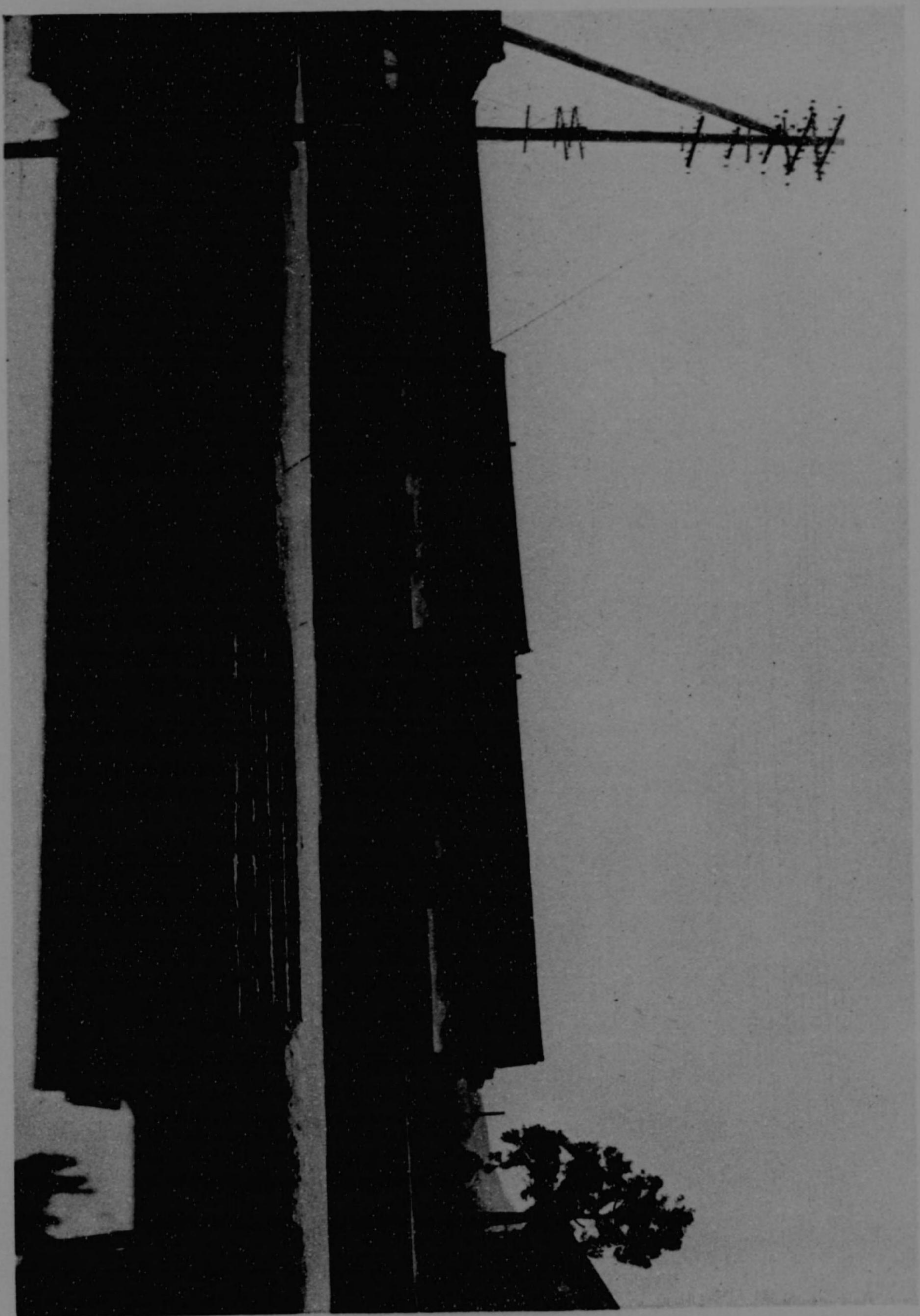


第一圖 木實方秘傳書 五卷 (稻塚和右衛門自筆)

601
35



1093923



第二圖 木實方役所表門

村田耕作氏作



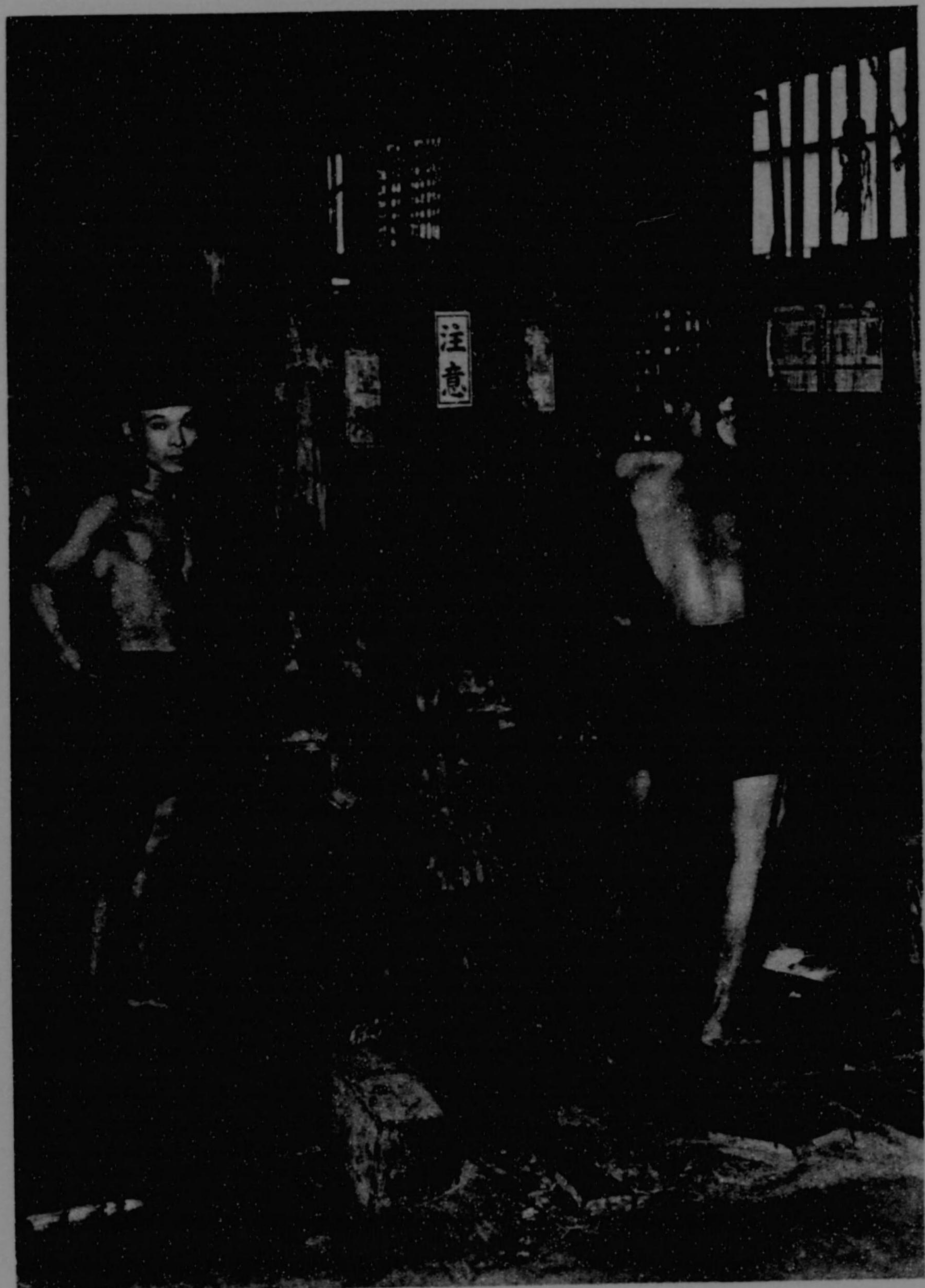
第三圖 禮知の一例〔八東郡講武村字名分〕

來問寫眞館作



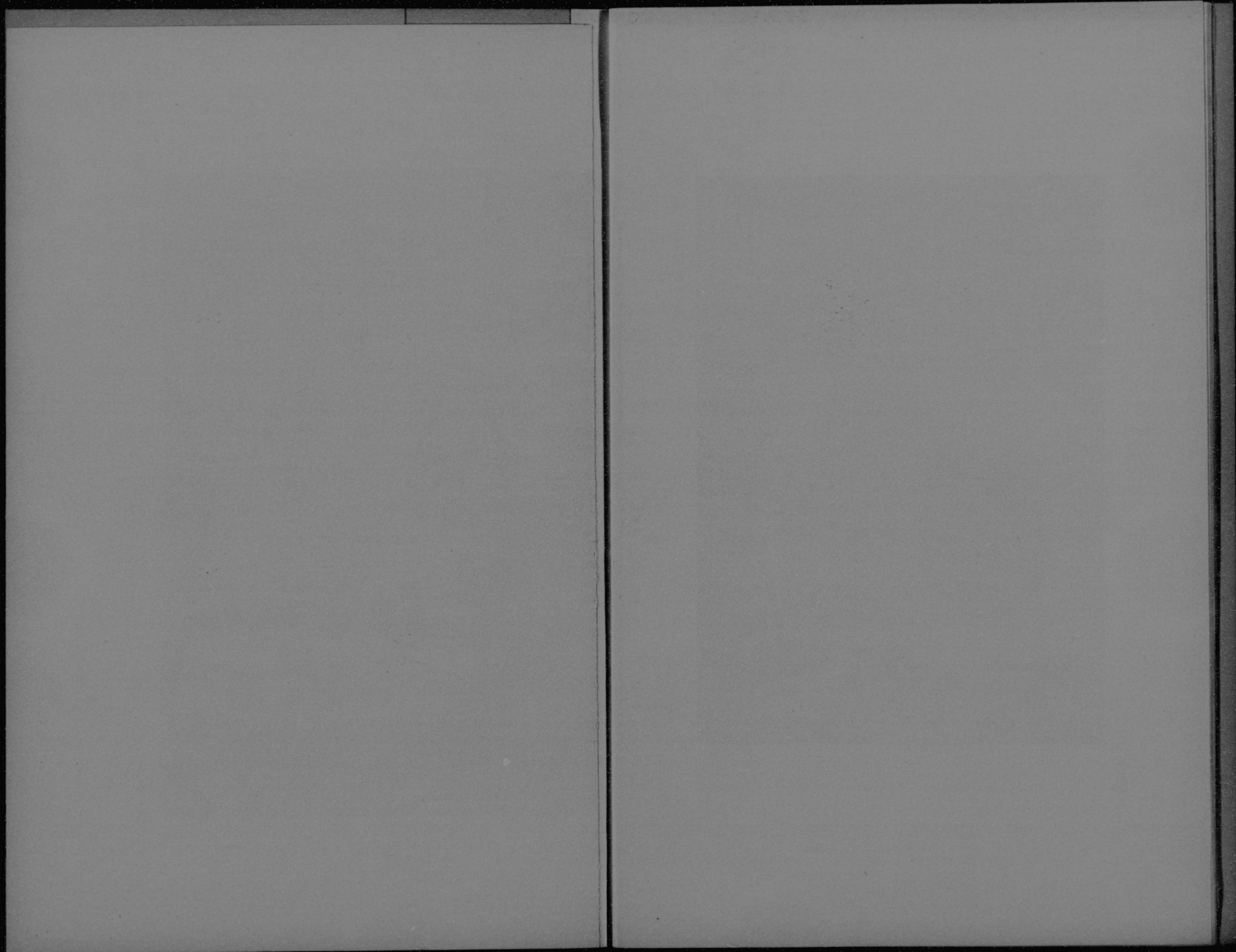
第四圖 土手植の一例（八東郡講武村字南講武。多久川土手）

來問寫眞館作



第五圖 蠟竝桐油絞り工場

來間寫真館作



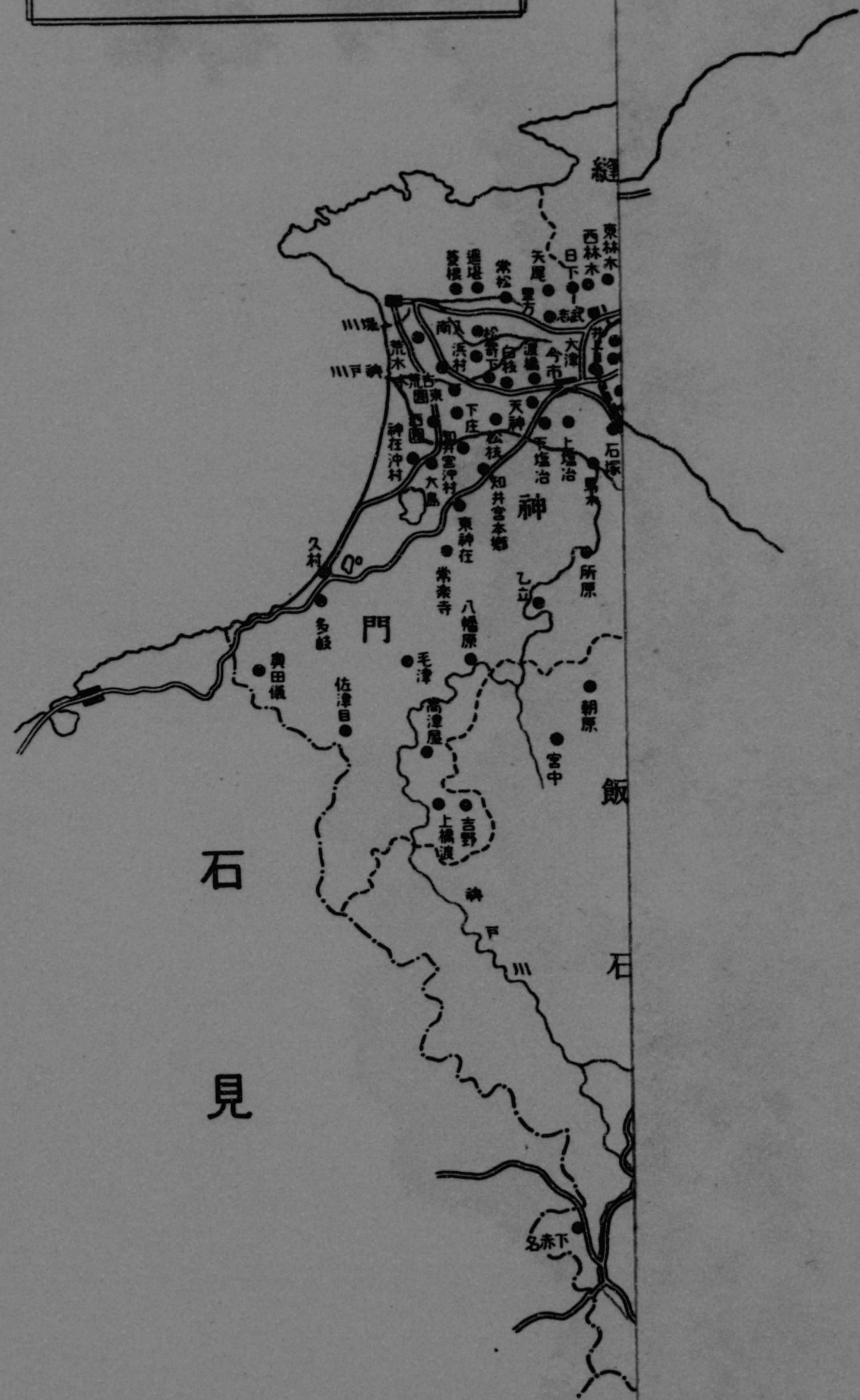
第六圖 雲藩士族屋敷之圖



(雲藩職制所載)

出雲國全圖

第七圖



石見

飯

石

名赤下

出雲國全圖



まへがき

出雲藩で楡の實の利益ある事に留意して、其栽培を奨励した最初は餘程古い事であつたらしい。その正確なる記傳は更に學者の考究に俟つ外ないが、不昧公傳所載の言ひ傳へでは、松江大橋の架橋の爲めに美濃國の大工三右衛門と云ふ者が松江に来て瀧川傳右衛門方に滞留した節楡の實から蠟を採る法を傳受したので、傳右衛門は藩廳に注進して楡の實を美濃から取り寄せたのに始まると云はれて居る。又元祿四年の頃神門郡の山中に楡の大木の夥しくあるを發見し且つ隣國石見には其木が多いので其處に近い一久保田村に生蠟方役所を設けて蠟を絞る事を創めたと云ふ。次で寶永二年には御勘定所役人勝田理右衛門の父次郎左衛門が自分の工面を以て琉球楡の實を取寄せて居屋敷内へ播種して苗に仕立て上げ藩に申出たので其苗を意宇郡西津田村へ移植し其後島根橋西尾村の御立山縁りへ植ゑ直しを仰付られた。後追々に楡苗が夥しく出來て來たので同村竝に東津田村御立山其外へも移植されたと云ふ。更に、寶永五年には松江に御細工所を設置して藩命によつて領内の諸山

竝に川堤に植木を植ゑることを奨励して漆の實、烏臼の實などから生蠟を製したと云はれ此時既に相當多數の植木が植樹され又それに依つて生蠟及蠟燭の製造も行はれたと思はれるが何等かの理由で特に隆昌には發展しなかつたものであるらしい。此時から四十年餘りを経て延享二年野間忠大夫が御細工所奉行の節會々御用蠟燭の入用について領内を調査の結果植の實の減少に驚き第二次の植木植樹の奨励と生蠟製造が始まり、之が木實方役所創設の根元となつたのである。茲に覆刻した『木實方秘傳書』は即ち之の當時の苦心談であり又その経過の實際的記録なのである。之の原本は昭和八年春、偶然巖松堂から入手したもので一讀非常に興味深く覺えたのであつた。然るに其後、植考書屋圖書目錄を見るに及び、同書三八頁の條に

木實方秘傳書

寫五冊

北嶺舎

二二〇號

寶曆三壬手記述著者北嶺舎、不詳

とあるを見、何れかゝ原本で何れかゝ寫本であらうと思ひ是非一度披見し度く念じて居た處會々植考書屋本は大阪の武田長兵衛氏の文庫に移された由を聞き、下阪の機を得た際寸暇を得て同氏の文庫に訪れたのであつた。然るに同文庫では植考書屋本の内本草關係のもの、みを選ばれたのであつて、之の木實方秘傳書は除外されし部分に屬するを知り校合の

不能を知ると同時に本書は即ち元植考書屋本そのものであることを悟たのであつた。然し、今回本書の覆刻を思ひ立つたのは何も本書が孤本であるからではないので、之には他に理由があつたのである。それは大藏永常との關係から來る。永常に關し最初に幾多の意味深き話をされ自分の蒙を啓いて下さつたのは石黒忠篤氏で可成以前のことには屬するが爾來多少とも注意して居た所、會々小野武夫氏と三河へ旅行の途次永常に關する話が出たのが動機となつて遂に永常研究の集りが出來てしまつた。前記兩氏の外に永常の出生地關係から井上準之助、後藤文夫の兩氏、及び新渡戸稻造、小出滿二、谷口熊之助の諸先生がその仲間となられ自分も驥尾に附し、早川孝太郎君を傳記資料蒐集の主任としてその勞作を願たのであつたが其後數年を閲みし、傳記の完成も今や間近になつて居るのである。所で、數多き永常の著書の中最も力作と思はるものは農家益三篇七卷であり前篇三卷は享和二年の出版で、後篇二卷は文化七年に同續篇は文政元年に夫々上梓され、何れも植樹の栽培竝に製蠟に關し詳述した本邦最初の大著であるが之の前篇三卷の出版は野間忠大夫の木實方役所設置に後れること殆ど六十年に近い。而も永常が非常な熱心さを以つて植の栽培を鼓吹し事實上三河田原迄は植ゑたことは確かであるが、永常以前に於て出雲が美濃から之の技術を傳搬した形跡あり、又、永常が初めて之を主張し初めた遙か以前出雲では既に第二次

的の勃興を見たのであつて此の點は永常研究上にも注意を要するし又本邦製蠟史上にも興味のある問題であると思はれる。楡の木が徳川中期以後に於て各地に盛んに植ゑられ又漆の實が採取された所以は蓋し燈火問題を主として居るのであらうと思ふ。松の根をシデ鉢の上に燃したアカシ、魚油、種油等と昔の人の燈火に費した苦心は想像以上のものがあつたであらうが茲に蠟燭の出現普及は、その燭光力の上から見て、後年ランプが電燈に代つたと同様の驚異的な文明進展の一つであつたであらう。雲藩に就いて見ても、蠟燭普及による需用の激増、之が楡栽培奨励の動機となり、その成功を見るに及び、更に進んで過剰蠟燭を國外に移出することによつて、藩の經濟を助けることを發見し、他の特殊な産物と共に之が國家經營を試みたことと思はれる。即ち其當時に於て楡を植ゑることは現今電氣會社を興し發電所を設けるに等しく又一面製蠟技術の方面から見ても後年鯨蠟を入れ更にパラフィン蠟に代替さるゝまで楡の蠟は本邦一般燈火光源として王座を占めて居たので、鬚付油を副産する之の製蠟は又徳川時代に於ける硬化油工業の一つでもあつたのである。即ち、農産製造學者としての永常の著眼と親切な努力に敬意を拂ふと同時に之を實地に苦心經營した野間忠大夫の努力に對しても同じ心持ちを忘れ度くない、之れ即ち本書覆刻の動機であつたのである。其處で本書の複寫は藤木喜久麿君を煩はし、次で同君に出雲

へ出張し親しく野間翁の遺業の一部を觀て來て貰つたのであつた。偶然の事ではあるが野間氏の設けた木の實方役所が毀される時に記念にとて寫して置いた寫眞が見付かり本書の挿圖に加へ得たことは望外の喜びであり之の寫眞を撮て置かれた村田耕作氏の御注意に特に感謝したい。又其他既に衰滅したとは云へ多少當時の楡栽培及製蠟を偲び得たことは幸であつた。此の間に於ける藤木君の努力は勿論、同君が出雲へ出懸けた際同地方の朝山皓氏其他各位の御助力に對しては衷心から感謝を捧たいと思ふ。尙ほ、終りに本書が將來發展すべき徳川中期以後の農産製造の研究に對して此の方面に興味を有たれる學者諸賢に數多き資料の内の一つとして取り上げて頂ければ野間忠大夫稻塚和右衛門も嘸かし地下に満足することと思ふのである。

昭和十一年七月二十日

澁澤敬三記

凡例

- 一本書は著者稻塚和右衛門自筆の原本に據れり
- 一原本は句讀點無く書かれたれ共、假名の連續或は漢文體の爲め紛はしき場合、其他便宜上編者に於て適宜に句點を附せり
- 一書中に常用せらるゝ宛字、漢字竝に假名書の文字は出來得る限り原本に準じて書寫し、其初見の文字の傍に括弧して正字と推定さるゝ文字を記入せり
- 一脱字も其儘に書寫し、脱せりと推定さるゝ文字を括弧して其位置に挿入せり
- 一原本蟲喰ひの爲不明の箇所は其字數に相當する□を以て埋め、傍に括弧して相當と推定せる文字を記入せり
- 一原本に振假名ある場合、本字の誤り又は難易に關らず原本に準じ、故らに増減を加へず
- 一濁點の有無も専ら原本に據れり
- 一語彙索引共すべて口語音に従ひ五十音順に排列したれ共、語彙に於ては其文字の下に括弧して正しき音を附したり
- 一地名索引に於ても右に準じ、其下に現行の郡村名を記せり

圖版目錄略解

- 第一圖 稻塚和右衛門自筆の「木實方秘傳書」五卷。(木下半之丞氏作)
- 第二圖 木實方役所表門。(松江市、村田耕作氏作)
本圖は昭和四年八月木實方役所跡を取壊す由を聞きて村田氏が記念の爲めとして撮影し置かれしものを先般調査の爲め松江市に出張の際發見譲り受けたるもの。
- 第三圖 櫛畑の一例。(惠曇村、來間寫眞館作)
八東郡講武村字名分、佐陀前。櫛畑の下作は茶畑。
- 第四圖 土手櫛の一例。(惠曇村、來間寫眞館作)
八東郡講武村字南講武、多久川土手
- 第五圖 蠟竝桐油絞り工場。(惠曇村、來間寫眞館作)
松江市榮町、北垣文市商店の工場内部
- 第六圖 雲藩士族屋敷之圖、文久頃。
本圖は「雲藩職制」所載の附圖により必要と認むる一部を縮寫したるもの。
- 第七圖 出雲國全圖。(藤木喜久磨作)
本圖は地形の正確を期せずして大略其村の位置を示すに止め、且つ本文に記載されたる町村のみを現して他は之を省きたり。

木實方秘傳書 目次

序…………… 澁澤敬三(卷頭)

凡例……………

圖版目錄略解……………

圖版

第一圖 稻塚和右衛門自筆「木實方秘傳書」…………… 木川半之丞作

第二圖 木實方役所表門…………… 村田耕作作

第三圖 櫛畑の一例…………… 來間寫眞館作

第四圖 土手櫛の一例…………… 來間寫眞館作

第五圖 蠟竝桐油絞り工場…………… 來間寫眞館作

第六圖 雲藩士族屋敷之圖(文久頃)…………… 「雲藩職制」所載

第七圖 出雲國全圖…………… 藤木喜久磨作

目次…………… 一

木實方秘傳書 壹

秘傳書序 一

秘傳書目錄 三

一、木實方始りの次第 七

二、稻塚景山趣向書出ス事 一三
附り、新御立山に燼畑出來之事

三、御細工所ニ而蠟實御買上之事 一七

四、生蠟打場無之ニ付町家を借、始而蠟絞り候事 一七
附り、町家ニ而蠟實積置事

五、木實方役人始而被仰付事 一八
附り、御細工所に蠟打場御藏立事

六、野間氏燼畑爲見分始而出郷之事 二二
附り、追々順村有之燼畑出來之事

木實方秘傳書 貳

七、御細工所々唯今之木實方クワシヨクの蠟打場建事 三二
附り、追々御藏立事

八、木實方役所に鎮守クワシヨク灌定之事 三三
附り、祭禮始る事

九、木實方クワシヨクの償米之事 三六

十、十郡の村々の蠟實代御前貸之事 三七

十一、木實方御役所に野間氏クワシヨクの御書出有之事 三八
附り、御役人役割次第御役所正面出置事

十二、毎月廿四日野間氏ニ而御寄合之事 四〇
附り、正月廿四日、十二月廿四日御祝儀有事

十三、御内用方始りの事 四七
附り、蠟打共の御褒美被下事

十四、新屋傳右衛門宅ニ而蠟絞り初る事 四八
附り、入料、世話焼料被下之事

木實方秘傳書 參

十五、御國中に軒別に櫨木植付被仰付事 一五二
附り、はせ畑無之村ニ受合木有之事

十六、十郡、土手櫨植付の事 一六三
附り、義田目附之事

十七、蠟紋り方の次第并碎之事 一八〇
附り、蠟紋り道具寸方繪圖に印事

木實方秘傳書 四

十八、定渡小吏、久治、小八、斤梁取被仰付事 一八九
附り、兩人御役所筋日々見繕事

十九、櫨畑并苗拵様、櫨木之次第 一九〇
附り、見積りの事

廿、御買上場所之事 一九三
附り、藏敷、舟賃、丁持定りの次第

廿一、御手船初る事 一九七

廿二、三好屋喜兵衛木實方附ニ被仰付事 一九八

廿三、鬘付油屋四人木實方支配被仰付事 二〇一
附り、御觸之次第

廿四、乗馬、臥賃、木實方公儀に成事 二〇四
附り、御役人小吏晝飯代之事

廿五、諸方公儀趣向願出る事 二〇五
附り、目安并奥屋善右衛門か事

木實方秘傳書 五

廿六、御用所并木實方御役所公諸郡に御觸次第 二二一

廿七、木實方御勘定之次第 二二六
廿八、木實方に蠟紋り面木八挺立と定る事 二二八
附り、諸郡に琉球種被遣事

廿九、野間氏自分山屋舖に櫨畑を開試ミ給ふ事 二二九

附り、見積稽古之事

卅、野間氏記州伊祁曾大神の御社參之事

附り、所々之寺社の御初尾被指上事

卅一、木實方御奉行并御役人立身御加増有事

語彙

地名索引

木實方資料調査目錄

一三九
一六三
一七四

覆刻木實方祕傳書目次終

復刻木實方祕傳書

木實方秘傳書 壹

秘傳書序

大車重しといへとも下るに輕し、小車輕しといへとも
登るに重し、爰に雲陽の住野間の何某、木實方建立し
給ふ事、晝夜十郡を枕とし役所を寢卷にして、民百姓
等に櫛畑の徳ある事をおしへ、役人小吏日傭等に至迄
役所の控を定て政道をなし、或はにぶき者には言葉に
帆を掛て洩らし、はやきものには胸の碇を以テ引とめ、

十六年の春秋をへて工傳秘密を明らかに極メ給ふ事、
誠に木實方の祖神とも敬ふへし尊むへし

北嶺舎

雲水

書

秘傳書目録

- 一、木實方始りの次第
- 二、稻塚、景山趣向書出ス事
附り、新御立山植畑出来之事
- 三、御細工(所脱)ニ而蠟實御買上之事
- 四、蠟打場無之ニ付町家を借り始而蠟絞ハ事
附り、町家にて藏に蠟實積置事
- 五、木實方御役人被仰付事
附り、御細工所ニ蠟打場并御藏立事
- 六、野間氏植畑爲見分始而出郷之事
附り、追々順村有之はセ畑出来之事
- 七、御細工所ハ唯今之木實方ハ蠟打場立事
附り、追々御藏建事
- 八、木實方御役所に鎮守(勸請)灌定之事

木實方秘傳書

附り、祭禮始る事

九、木實方_の償米之事

十、諸郡村々_の蠟實代御前貸之事

十一、木實方御役_(所脱)に野間氏_の御書出し有之事

附り、御役人役割御役所ニ張置事

十二、毎月廿四日野間氏ニ而御寄合事

附り、正月廿四日、十二月廿四日御祝儀有事

十三、御内用方始り之事

附り、蠟打共_の御褒美被下事

十四、新屋傳右衛門宅ニ而蠟絞リ初る事

附り、入料世話料被下事

十五、御國中_の軒別ニ植木植付被仰付事

附り、は七畑無之村々受合木有事

十六、十郡土手植植付之事

附り、義田目附之事

十七、蠟絞り方の次第并碎之事

附り、蠟絞リ道具寸法繪圖ニ記事

十八、定渡小吏、久治、小八斤量取之事

附り、兩人御役所筋日々見繕之事

十九、植畑并苗拵様繼木之事

附り、見積りの事

廿、御買上場所之事

附り、藏敷、舟賃、丁持定り之事

廿一、御手船初る事

廿二、三好屋喜兵衛木實方附ニ被仰付事

廿三、鬢付油屋四人木實方支配ニ被仰付事

附り、御觸之次第

廿四、乗馬、臥賃、木實方_の償ニ成事

附り、御役人小吏晝飯代之事

廿五、諸方より蠟趣向願出ル事

附り、目安并奥屋善右門衛か事

廿六、御用所并木實方諸郡の御觸之事

廿七、木實方御勘定之次第

廿八、木實方、蠟絞リ面木八挺立と定ル事

附り、諸郡へ琉球種被遣事

廿九、野間氏山屋敷に楯畑を開キ試ミ之事

附り、見積稽古之事

卅、野間氏(紀)伊弉伊祢曾大神の御社參事

附り、所々之神社の御初尾被仰付事

卅一、木實方御奉行并御役人立身御加増有事

一、木實方始りの次第

抑、木實方はしまりは、御細工奉行野間彦右衛門、後忠大夫殿と號ス、此時に至趣向し給ひし根元を委しく尋見るに、延享四丁卯四月熊野三十郎殿御檢役方元御勤之節、御細工所立合役景山惣七を御檢役方に招キ、御用之御蠟燭大分之儀ニ付、蠟實御調として御用蠟燭屋喜兵衛を郷中へ御買上として被指出といへとも、御買上の蠟實貳千貫目御入用之高程御國中へ不出之、漸く七百貫目計も有之ニ付他國蠟實御買上に相成、殊外御蠟燭も高直に相當り御不益不安、御細工所には先年生蠟打立蠟燭出來の事も有之ゆへは、御蠟燭直段も下直ニ相成手段も有之は工面可致旨御申ニ付、惣七承之、古來御細工所ニ而蠟打し事有之といへとも、年久敷絶て無之、様子もしかく不存、乍去稻塚和右衛門に及相談、御返答可申由にて歸り、其頃は稻塚は御細工所元役相勤罷有ニ付而右之あらましを物語る、稻塚承之此趣至極可然事は、五年以前御國中の蠟實を御買上、生蠟にして大坂へ御登あらは、御益の筋も可有事書付指出スといへとも、時いたらさるか是を用ひ給ふかたなし、幸なるかな先白鳥蠟を以生 燭積書可致とて、左之通

一白鳥白壹斗貳升

一絞リ分

代錢貳百拾六文

但、實壹升ニ付拾八文充

一日備賃錢并薪共ニ

代錢拾六文

一胡麻油壹合五夕

代六拾文

×貳百九拾貳文

右之正味生蠟百五拾目

但、貳番蠟共ニ

此蠟燭正味貳拾目掛ニして七挺半

但、蠟燭に掛ハ入料五文、但、燈心上包紙
下卷反古薪代共

入料合貳百九拾七文余

但、蠟燭壹挺ニ付三拾九文七步余

正ニ拾八匁掛ニしてハ八挺三步三三

但、燈心上包紙并
下卷反古薪代共

入料右同斷

但、蠟燭壹挺ニ付三拾五文七步余

右之通書付、大積を以御檢役所ハ指出ス、其後琉球烏白實を以、蠟燭積書可指出旨野間氏ハ被仰付、

左之通

一琉球實拾貳掛ケ 但、一日絞リ之積

此蠟實七拾三貫貳百目 但、壹掛六貫百目充

代錢拾八貫百四拾文 但、壹×目貳百貳拾文充

一碎夫七人

賃錢七百元 但、壹人百文充

一絞リ夫六人 内壹番絞リ夫 貳人
貳番絞リ夫 貳人
核絞リ夫 貳人

賃錢六百元

一胡麻油三升壹合五夕

代錢壹貫百六拾五文 但、手前絞りを以
壹升ニ付三百七十文充

一新

代錢百貳拾文

一燈心

代錢百拾文

一下卷反古

木實方秘傳書

代錢貳拾文

一上卷紙

代錢百文

入料合貳拾貫七百六拾九文

右入料を以生蠟并ニ蠟燭出來

右生蠟正味九貫五百拾六文

但、蠟實壹目ニ付百三拾文溜

此蠟燭拾八匁掛五百貳拾五挺半

但、壹挺ニ付三拾九文八步充

右之通大積を以、御用所野間氏より被指出、依之琉球檯實相調、絞りし而こゝろミいたし様被仰付、則大原郡琉球檯實拾壹目三百目相調、石橋町塩冶屋源兵衛と申もの、油木を借り請ひ而、蠟絞り夫平七、六兵衛と申者を展、是を絞り拾五匁掛蠟燭に拵立指出し處、御用所御添役所御見分相濟、御儉役所にて三好屋喜兵衛蠟燭と燈し競へ有之處、御細工所蠟燭少し燈しあまり、三好屋蠟燭少し先に燈りしニ付、此段御用所被仰達し處、追而御相談も可有之旨野間氏に被仰渡、其後御細工所ニ而蠟實相調、生蠟絞り蠟燭仕立可指出旨被仰付、依之白烏白六拾石、琉球實、漆實共ニ千貳百貫目、御

細工所へ指出し様、同年五月十郡へ御觸有之、野間氏稻塚、景山申出しは、蠟實他國出し并下ニ而賣買一切御停止に被仰付、尤唯今迄御免之鬢付油屋とも手絞り御指留、生蠟之分は御直段を以届次第被遣之、六月中旬御國中の村々漆實、琉球實、御細工所ニ而御買上御手絞り被仰付、御蠟燭御用之残り生蠟は、大坂に御運送あらは、御益之筋にも可相成哉と、御物語申し得は、此儀可然とて早束御用所御申出有之し、依之御國中蠟實高何程可有哉と御尋ニ付、兩人申出しは、御國中村々漆實、琉球實見積被仰付、當錢ニ相場を以御買上しハ、凡七千貫目之實高は可出由申出る、然らば兩人郷中の蠟實見積に罷出し様御申付有之、兩人申上しは、たとへ見積仕し而茂御買上之節代銀少茂滞しは下の存付悪敷、蠟實出高も存る程御坐有間布し得は、御銀之手合難相成しハ、銘々共出郷ニおよハす由野間氏願ひ得は、何分青沼六郎左衛門殿へ參、様子承合し様被仰付、其節は青沼氏ハ御勝手方奉行御勤し、早束兩人罷出右之あらましを御咄申、銀子何程之心當にやと御尋有之、銀札三拾貫目計ニ而可相濟旨申、然らば右之銀高可出旨被仰しニ付、同年六月中旬過り出郷可仕と議定して罷歸り、始メ而稻塚、景山、蠟實見積として出郷におよふ、尤其頃御用油の趣向被仰付、油木實茂一所に見積被仰付、然共油木實はしまり合悪布、其年一ヶ年にて相止ニ成し故爰に略ス、秋鹿郡、楯縫郡、神門郡、北方順郷いたし盆前に罷歸る、盆後飯石郡、大原郡、出雲郡、意宇郡、嶋根、能儀郡之分見積可申處、御細工所御用多ク、其上蠟實少々宛出しニ付而、其年之見積残り之郡々相止ニ成

二、稻塚景山趣向書出ス事
附り、新御立山に植畑出來之事

覺

一 琉球植木と申物は、植付し而より三四年過し得は少々宛實成申、夫々五六年も仕し而は三四貫目充實成、追々木生立次第拾ヶ年ニも相成し得は、拾貫目或は拾五貫目充も實成、至極調法成物し故、只今ニ而は村々の石畑に植置、餘程實成木御坐し、尤障ニは不相成といへとも、石畑計に植し而は民の養ひ少ク可相成哉、何とそ此後御立山之端く、或は野山の端く、に植畑を開キ、壹畝に三本充植し様ニ被仰付しは、凡御國中に七拾万本植付可成場所出來可仕し、野山之儀はこやし草蒔場又は駄飼場、村ニより夫くに入用高を殘し、餘は植畑に開かせ度ものに御坐し、左ハハ、植畑之分は御年貢なしニ下を作らせ、植實成し節見積を以半分上納被仰付、下へ半分被下置しハ、莫太^(大)ニ出來可申様奉存候、右ニ付積書左之通

一 植木七拾万本

但内

三拾五万本

男木

是ハ不實成木

殘三拾五万本 實成木

此實高百五万貫目

内 但、壹本ニ付三貫目實成ニ

五拾万貳千五百貫目半分上納

此生蠟六万五千三百貳拾五貫目

但、實百貫目ニ付拾三貫目溜ニ

代銀貳千七百七拾七貫貳百八拾貳匁貳分五厘

但、生蠟百匁ニ付三匁三分三厘三毛

是ハ京大坂生蠟直段開合を以

五拾万貳千五百貫目

此半分下へ被下しを御買上ニ

代錢九万四百五拾貫文

但、實壹ノ目ニ付百八拾文充ニ

此生蠟六万五千三百貳拾五貫目

木實方秘傳書

但、實百貫ニ付拾三貫目溜ニ

代銀貳千七百七拾七貫貳百八拾貳匁貳分五厘
此錢拾五万貳千四百九貫七百六拾文

但、壹匁ニ付七十文かヘニ

内

蠟實代九万四百五拾貫文

入料錢壹万七千五百八拾七貫五百文

但、實百貫目ニ付三貫五百文充

二口合錢拾万八千三拾七貫五百文

指引錢四万四千三百七拾貳貫貳百六拾文

但、此分出目銀

此銀六百三拾三貫八百八拾九匁四分貳厘八毛

*上納高
出目銀 高二口合

銀貳千八百拾壹貫百七拾壹匁六分七厘八毛

但、此分御益

前文之通被仰付ハ、追々御益之筋ニも可相成ハ、尤唯今迄大谷源藏蠟實方ニ而、御國中^{*}之蠟實吟味仕、御買上有之といへとも、代錢當分ニ不被下ハ故しまり合茂無御坐、御買上之蠟實高も出兼候、唯今ニ而茂郡々村々有木之分見積被仰付、當銀を以御買上ハ、漆、琉球實、七千貫目は御國中ニ可有御坐ハ、此等之趣被仰上ハ而は如何可有御坐ハ哉

延享四卯五月

景山
稻塚

野間 忠 大夫 様

右趣向書早東御用所へ被指出ハ處、御添役所、御仕置所ニ茂御一覽有之、宜敷趣向之由御左太有之、^(沙汰)同年六月嶋根郡新御立山へ稻塚、景山、白鳥白實を取ニ罷越ハ砌、御山中見廻リハ處土地宜敷、其上木村又助殿御役儀之節、御拵被置ハ木苗畑八ヶ所計有之、植木少々植付、油木等茂有之其外小松生茂^(然)リ、指而當前御用ニ茂難立ハ御山と見請、野間氏ハ此趣物語、能ハセ畑ニハ得ハ御願可然哉と申ニ付而、野間氏茂御見分有之、其後口上書を以御願有之、左之通

一 新山之儀先日罷越見分仕ハ處、餘程之木苗畑御坐ハ、然共近年伐取或ハ枯ハ而、打捨リ居申ハ場所八ヶ所計御坐ハ、其上野^{*}テ所又ハ谷々數ヶ所、小松之類も立兼ハ能開地多く御坐ハ、其外少々充

之御年貢畑も三四ヶ所相見申し、此御年貢畑は御取揚し而、只今迄之木苗畑と一所に、當年を烏白木、漆木等其土地を見立植しハ、貳千本も被植可申し、尤數ヶ所之場所ニ而しハは、手寄ノ之方角之者右之場所ノ御預、開畑を致させ木苗を植置し様被仰付、蠟實出來立之節は年ノ立見を以、半分ハ御上ノ上納、半分は作主へ被下し様御下知御坐しハ、何れも作主共出情可仕し、左ハ木苗畑功者之もの壹人遣置、隨分木苗を作り日々ニ場所ノ相改、僉末無御坐し様吟味致させ、こやし等も捨り御馬ニ而も被下しハ、如何様ニも可相成、其上一ヶ月ニ一度宛役人罷越、帳面を以木苗數并開キ畑之多少を相改申様ニハ、自然と開キ畑餘慶に相成、御當手御物入も無之近年之内ニ數万本植し様相成、莫太御益も可有御座哉、唯今之通ニ而は能小松も無御坐、追々打捨り幾年ニ而も御用木立申儀御座有間布し、此御山壹ヶ所先はセ畑に御仕立御覽しハ、外之木苗仕立之場所見合ニも相成可申様奉存し以上

卯六月十三日

御細工所

右之通書付を以、野間氏ノ御用所へ御願有之、新山壹ヶ所はセ畑に被仰付、小松之分は入札ニ相成、土地は在町共ニ植畑に願出し様被仰付し故、追々願出二三ヶ年之内ニ不殘はセ畑に相成凡貳拾丁之畝數出來、只今之新山はセ畑是也

三、御細工所ニ而蠟實御買上之事

一 同年卯七月、鬢付油屋四人ノ者とも、生蠟手絞り御停止ニ被仰付、生蠟は御細工所ノ申出ハ、大坂御拂直段を以可被下旨ニ而御取揚ニ成、御國中ハは當秋ハ御細工所ニ而蠟實御買上ハ間、郡々、村々漆、琉球實運送可致し、下ニ而賣買一切御停止之旨御觸有之ニ付、追々漆實、白烏白實、琉球實運送いたす、直段之儀は他國開合を以、漆實は壹貫目ニ付百八拾文ハ貳百五拾文迄、琉球實ハ百六拾文ハ貳百貳三拾文、上中下見合を以御調、白ハセ實は壹升貳拾文ハ三拾文迄ニ極、七月末ハ追々ニ指出し、十一月迄ニは壹万貫目餘御買上ニ成

四、生蠟打場無之ニ付町家を借、始而蠟絞リハ事

附リ、町家ニ而藏に蠟實積置事

一 於御細工所追々蠟實御買上ニ相成といへとも、入置ハ藏無之ニ付、鍛冶町ニ而藏貳軒藏敷を以借受、日々ニ御買上之蠟實是へ遣し入置、并石橋町塩冶屋源兵衛と申もの、藏をも借受入置、扱右之蠟實塩冶屋方油木貳挺有之しを借受、生蠟打平七、六兵衛并碎夫善七、利七と申者を雇毎日絞之、小吏御小人に藤兵衛と申者を目附に付置、毎日の生蠟打立稻塚、景山替りノ罷越、改之、帳面ニ印、打立之生蠟は塩冶屋方へ預ケ置、五七日茂たまりハ節御細工所へ取寄、鬢付油屋ともより届次第に追々に

造ス、御蠟燭御入用之生蠟は三好屋喜兵衛に相渡ス、残り生蠟之分、大坂に御登セニ相成、大坂御藏屋敷にて入札ニ相成御拂、いまた其節迄は蠟のしかたよろしからず、色合も悪敷い得共、壹斤ニ付而銀四匁三分の四匁四五分位に御拂ニ相成、御勘定は翌辰ノ春有之、御元入皆濟、藏敷、宿代、諸道具借貸、雜用等速に相濟、少々出目銀有之、委細は御勘定帳面ニ有之、略之

五、木實方役人始而被仰付事

附リ、御細工所に蠟打場并御藏立事

一 寛延元戊辰二月廿九日熊野三十郎殿木實方立合役被仰付、同三月十八日稻塚、景山木實方元被仰付、同五月二日須山斧右衛門木實方郷方萬事穿鑿役被仰付、同九月日田邊十左衛門木實方元請拂役被仰付、同十九日稻塚、景山、田邊、須山於御勘定所誓紙相濟、扱又蠟打場無之ニ付、延享四卯八月頃御願有之は、先年御細工所にて蠟打し節は新藏と申所ニ打場有之い得共、唯今ニ而は絶て無御座、此場所は向新藏とて御舟屋脇也、當夏少々宛蠟絞りいは、石橋町塩冶屋方を貸請、宿代、藏敷、道具代等賃錢を出し、御役人を遣しし而蠟實絞らせし、追々莫太之蠟實絞りい得は、場所無之御不益に相成し、幸イ御細工所内に空地有之い得は、蠟打場小屋掛被仰付し様、野間氏御願有之に付而、打場并御藏御入用高積書被指出し之様被仰付し故、則積高、打場并御藏共寶札三貫九百八拾匁之書付出

ル、此入料ニ新山はセ畑内に、松木大小四百本程相見へ申し、是を御細工所へ被下置いハ、色々工面を以、御足し銀無之、御普請御受合可申由、御願有之といへとも、大松之分は御免無之、漸く小松計御普請之足しに被仰付、右ニ付小松之分入札に相成し處、纒八百目餘に相成、是を以翌辰ノ二月廿九日地行相濟、貳間半に七間の御藏壹ヶ所、三間に五間の蠟打場壹ヶ所建給ふ也、然共御上御普請入料壹錢も御合力無之ニ付、野間氏色々工面を以御普請相濟、打場内に壹間に三間の所會所と定メ、壹間の所ニは生蠟入戸棚を置、残り壹間に貳間の所に細キ燵(爐カ)を拵、野間氏其外役人相詰い得は、居ならひい所も至而せまく不自由なる事共也、しまり合の大戸口に錠前無之、火はし、たはこ盆のやう成ものも調い事を厭(イヤ)て銘々當分持寄、或は古物方(イ)もらひひて償之、蠟蒸釜(燵カ)の工土ぬりい事も日用夫の賃錢をいとる、稻塚、景山是をぬりなんとして漸く出來立、則蠟絞り面木貳挺并蒸釜迄常(備カ)住仕、依之同五月十一日、蠟打場御祈禱被仰付、氏神明なればとて、末治町權現之社司諸衛に被仰付し、依之下司采女兩人罷越、抽丹誠御祈禱相濟、右ニ付而野間氏、熊野氏、稻塚、景山、田邊、須山、御蠟燭屋喜兵衛、蠟打平七、六兵衛、御造酒頂戴、御祝儀首尾能相濟、同五月廿一日御細工所蠟打場御見分として、御用人高木丈左衛門殿、高橋九郎左衛門殿、小泉彌一右衛門殿、早川太兵衛殿、高畑太郎兵衛殿、前田彌五右衛門殿、御勝手方御奉行樋口官八殿御出有之、同八月廿五日貳間半七間御藏之分御棟上有之、同壬子十月廿六日於稻荷神社、御藏御祈禱有之、右ニ付而野間氏、熊野氏、稻

塚、景山、田邊社參仕、扱又御役所追々御用多キニ付、御役人増し御願有之、寛延貳巳四月晦日松林與三左衛門御役所勤被仰付、同六月十二日村岡傳次御役所出勤被仰付、同三午四月十四日横山唯六御役所勤被仰付、同十八日村岡儀田邊手傳、尤手形帳面等に名印出し様被仰付、横山、松林儀は小買物方役被仰付、同四未とし林文野右衛門木實方山方留附被仰付、寶曆貳申六月二日、山田新十郎木實方元々役被仰付、早束誓紙被仰付、同十六日松林儀は故有而木實方勤御免、右代りとして同日原田喜右衛門被仰付、小買物方役被仰付、翌十九日野間氏宅にて誓紙仕、同三酉三月廿一日村岡儀田邊添役被仰付、同四戌四月二日田邊儀元方并御役所勤兩役相勤、御長屋に有之、而は別而御用多ニ付御長屋御免、同日須山に被仰付早束引移ル、御道具方兼勤被仰付、須山六兵衛儀郷方勤被仰付、野間氏宅ニ而誓紙濟、同十二月十二日加納又藏儀御取立小買物方并蠟實請拂、大坂御登壇表拵等改被仰付、同亥五月二日勝田定治郎木實方見習被仰付、御普代格須山次座被仰付、同六月九日於御勘定所誓紙仕、須山六兵衛儀病死ニ付、同十一日原定四郎郷町穿鑿役被仰付、同寅二月四日原田喜右衛門儀、内々願よつて御役所勤御免、同五日石原宇助原田跡役として被仰付、同十二日誓紙濟、御作事方、御道具方、斤目改、碎夫絞り夫、大坂表拵改、日記方被仰付、同三月廿六日田邊儀木實方勤御免、隠脇方元々被仰付旨、於御勘定所被仰渡、同四月六日加納儀小買物方御免、元方金銀受拂役、村岡同役被仰付、同日金津庄藏御役所勤被仰付、又藏後役小買物方被仰付、同八日誓紙仕、同七月九日山田儀大坂詰被仰

付、仍而山田勤掛之役御蠟燭方、御銀方、廻舟方勝田に被仰付、同九月廿一日勝田儀元々役被仰付、同十辰五月廿四日小村之惣木實方山方兼役被仰付、同十一巳四月廿九日熊野氏願ニよつて御役所勤御免、同九月十二日角五左衛門木實方山方内改被仰付、同九月廿九日山崎孫平治殿木實方御奉行被仰付、同十二年正月廿三日石富久治御取立木實方吟味役被仰付、御役人立身御加増之事は先づ出ヌ故爰ニ除ク

六、野間氏榼畑爲見分始而出郷之事

附リ、追々順村有之榼畑出來之事

一 寛延戊辰の春、野間氏は熊野、稻塚、田邊を被召連、榼畑土地見分として意宇郡乃木村より順村有之、大庭、佐草、熊野、岩坂、揖屋、意東、其外村々打廻り給ひ、榼畑に徳有事を申しへ、庄屋、年寄共々催足し給ふといへとも、障勝なる事を申て、榼畑開發の事は存もよらず請合不申、少々切畑壹畝貳畝或は五步拾歩の場所を漸々見出し榼畑に御申付、十日餘り順村ニ而歸宅有之、榼畑趣向之儀は新規成事に侍れとて、於村々物入等茂無之様にと思召、一夜泊りの宿をも一軒にして上下打込、人足をも五人は貳人として、貳人入用之ものは壹人充ニ而事を濟し、駕等の様成事并乘馬なども堅く相止メ、何れも歩行にて順村有之、草鞋なんとも村方より出すを不用、手前々調ひ而濟し、晝飯なとし

た、めの節、酒茶なんと出ス、是には木賃^{*}を五錢七錢或は拾錢程充遣し、何等によらず村方の少も役介にならざる様に控をさため給ひて、唯少分の植畑も有之様^{*}と思召より外他事なし、夫も毎度十二三日或は廿日程宛逗留にて、稻塚、景山を替りく、召連られ、毎年一ヶ年には五度七度充順村有之、朝夕には星を戴て旅宿を出、夕へには露をふみ、馬はなけれと鈴蟲の聲もろともに旅宿へ入、いぶせき賤か住家、竹の簀のこに薙敷もいと給ハす、春は野山の氣色もうるハしく、花も盛りを見せて面白キ姿、世の人は野遊ひなんととて行違ふ中に、唯爰の谷には能開地有か、あちらの平は土地いか、哉と、尋もとめ給ふより外なし、春過夏たけ秋さひて、月もさへ行、日はかさなり、ひま行こまのととまらて跡ははるかに遠くなり、またくる春にむかひ給ふといへとも、はセ畑は菟角^(兔)出来兼御心遣は彌増しになりぬ、扱又飯石郡、神門郡、南山中など、申は、山高ふして山又山をかさね、谷深ふして道せまく、草木おひしけりて蟬の聲耳をつらぬき、夕立の照り上りなんとには草むしニ而たへかたき暑サ、汗は流る、瀧のことく、坂へのそミ峠へ登りて見れば一重の袖袂も水につけて上るかとし、誠や地獄の罪人の消熱^(焦)のくるしミを這り出、此世の風に當るもかくやらんかと覺る、ケ様の苦敷中にもかしこよ爰よと土地をゑらミ、五歩三步之はセ畑を御申付有之、坂をくたりて流に口を漱^(漱)キ一息をつき、火打のほくニ而たはこをたのしミ給ふ斗也、有時杵築の高濱を通り給ひて、砂の夥敷を詠メ給ひ、楯、漆實を粉にして高濱程ほしきもの也、蠟にして大坂に登セなば能かねになりぬへきなんと

御たわむれ、跡は笑ひとなりて上下つかれを晴しぬ、また生馬村^{*}と申所に、七手山とて七ヶ村入相之^(會)草刈山有、此所はセ畑に願出るもの有而、七ヶ村と出入ニなり、六ヶ敷場所なり、見分有之七ヶ村と願主へ半分充分てはセ畑に御申付、其夜は同村法忍寺といふ寺に一宿し給ふ、折節八月十五日薄曇なる夜なりけるに、何と思召けん

旅つかれ浮世の曇り晴ねとも

法忍しやとくの月を見る哉

と遊しけり、我も又

幕切て出ぬや桂の大男

なと申て其夜はきやふに入給ふなり、扱、稻塚、須山を召連られ嶋根郡の順村之節、大井村と申所に宿をもとめ給ふに、頭煩といふ病におかされ一日逗留有之、主は村の年寄役動もの也、須山亭主に近寄、植畑と申物は野山を開キ随分上畑に仕立、四季相應に作付をいたし、はセ苗を五間七間程充間を置植付、實成は節ハ半分上納ニ而下の土地は御年貢なしニ作取也、惣し而切畑をいたし、能土地なれば等請^{*}なくて不叶、さある時は末に荒畑になりても、御年貢は、債^(債)申事至而下の障成、植畑は實成時は見積を以半分上納、不實成時は上納なし、末々下の煩なく至極よろしき事也、もし開キ畑扱是あらは被申出可然など、ひねもす物語侍る、主承知して四五年以前分の切畑五反斗はセ畑に願出る、翌

日御見分有之植畑に御申付、頭煩の事は御忘御悦はかきりなし、(或)有時神門郡大津町に一宿し給ふ、其夜は御山方御役人も次の間に相詰らるゝ、主の嫌至て美し、男はミめ惡布見苦し、次ニ而若キ輩達のとりにの咄に、あの男にはおしき女なりなんとさ、やくと、稻塚聞て老の身も心はとしのよらざるにや、から紙を押明て目かねにてのそき見るに、勝手ニは賑々布火を燒キ晝のことし、目かねに火の影うつりければ光る事狼の眼のことし、家内はきもをつふす、御役人中は何事やらんととふ、稻塚小聲に成、主の姫の美しささ、やき咄しのうらやましく見る也といへば、皆々腹筋をよらしけり、旅の苦敷中にもケ様おかしき事侍るは夢の中の榮花なるへし、明る日は同村之松苗山見分、土地能場所植畑に被仰付、扱嶋根郡西川津村ニ而高平はセ畑、石場皿、大内谷奥、市成御立山はセ畑、下川津村ニ而崎の奥、市成越し、堤尻、長池、晩木谷、上川津村ニ而は才の神、燒山、樋尻越し、高丸、まき谷、はセ畑、三川津取集メ凡六七百ヶ所出來、西尾村ないヶ谷、五助廻、桑の子廻、朝酌村大廻、大海崎村ニ而大藪、上宇部尾村ニ而燒田、平林、くらミ谷、下宇尾村ニ而和名御立山、村上、森山村ニ而女男岩、長濱、三保關ニ而さい谷、かるひ谷、かい崎、諸喰浦水口、福原村ニ而毛頭原、東持田村白瀧、鐘つき堂、赤松谷、西持田村ニ而中山はセ畑、南講武村もやの奥、成竹、扱又意字郡乃木村には西ヶ原、芝床、あんはセ、東津田村はセ岡山、山代村ニはいて平、佐草村林原御立山、矢田村うたせ、竹矢村大谷はセ畑、出雲郡村ニは須田、うちらま、楯屋村宮後御立山、下意東村ニはかね築、は

セ畑、後山、西忌部村ニハこも澤御立山、宍道村ニは宮田、御立山之内、扱又大原郡には延野村うねし、神原村ニ草枕、御立山之内、新庄村山尾谷のはセ畑、苅畑村ニ竹代、宇谷村後山、能儀郡ニは上吉田村ニ池平、島木奥、嶋田村ニ赤崎御立山、飯石郡ニは下熊谷村向原、はセ畑、楯縫郡ニは園村相ヶ谷御立山、布崎御立山、多久村ニは成竹、湯の平、多久谷村ニ遠所谷はセ畑、枕廻、岡田村ニ大平、今井、御崎谷、東福村ニは明川、西林木村ニ古川はセ畑、出雲郡ニは學頭村すろ床、大經師御立山之内、下阿宮村ニ伊田御立山之内、神庭村ニ大谷はセ畑、氷室村ニとろ谷、神門郡ニは上ノ郷村宮ノ後、野尻村ニ梅田御立藪はセ畑、右様之はセ畑は、少々充實成上納も有之、其外十郡村々ニおゐて、少々宛はセ畑出來立といへとも、趣向之百歩一ニもおよハす、仍而寶曆元未ノ春より御國中ニ山有村々に、壹ヶ所貳ヶ所充はセ畑を申付度由御願有之、依之稻塚、景山を被仰付、十郡を打廻り、山有村々に壹ヶ所貳ヶ所充土地を見合はセ畑申付、年々折檻故追々開發いたし、はセ苗植付以得共、家居程遠キ場所は鹿喰荒シ、作付も難成打捨る場所多し、左様之村々ニは石畑縁りに植付以而御用地之替りに可指出旨申付、村により三拾本、五拾本或は百本程充御用地替り木有之半分上納也、是は此後はセ畑も出來以得は引替遣ス御議定也、扱又はセ畑に小屋掛いたし住居のものへは、御立山内よりゆかミ木の惡木拾本程つゝに、銀札五匁充繩代として被下之、或ははセ畑出情のものへは御見分(五)のうへ、爲御褒美銀札三匁、五匁又は七八匁程充被下之、隨分出情いたし少し餘慶開發以様御申付有之、漆

琉球見積之節は御役人と一所ニ出郷有之、手譯(分)ニ而友(共)ニ是を見積り給ひてころミ、冬ニ至り御買上之節は、出郷之序に其場所ノ御立寄、御役人の取引、小吏の取アツカイ暖迄見給ひ、十五ヶ年以來之御艱難、一ツとして十ヲとゆひを折にかそへかたし、餘は筆紙につくしかたき故書もらし待る、ケ様に色ノ心をくばり給ふといへとも、目立はセ畑は出來兼、漸ク御國中村々少々宛之はセ畑迄取集、寶曆十一巳秋迄左之通

畑高合百六拾三町七反七畝四步

内譯ケ

畑反×九町七反六步

同拾四町五反壹畝貳拾壹步

同貳町五反六畝八步

同八町貳反九畝貳拾壹步

同三拾七町九反八畝四步

同三町三反

同拾壹町五反六畝貳步

出雲郡

能儀郡

秋鹿郡

楯縫郡

意宇郡

神門郡

飯石郡

同貳拾町九反六步

大原郡

同五拾四町九反四畝貳拾壹步

嶋根郡

但、内貳拾町は新御立山分

右之外、土手植、軒前植と申事は先へ出ス、村々こまノの反畝は、はセ畑帳面ニくハシ、木數はいまた定メかたし、然とも壹畝三本平シには出來立可申、さある時は凡木數四萬九千百三拾貳本也

木實方秘傳書

貳

七、御細工所の唯今之木實方の蠟打場建事

附り、追々御藏立事

一 蠟打場、御細工所ニ而は土地せましくはニ付、可然場所被仰付は様野間氏の御願ニ付、寛延三庚午ノ九月二日新藏屋布^(敷)、木實方御役所に被仰付、中長^(屋)や貳ヶ所御取上ケ、表長や之分木實方の被遣、右御長や内ニ住居仕し者、十月中に明渡は様被仰付、明渡はハ、早東木實方の受取は様被仰付、同四日野間氏新藏屋敷御見分、間敷改有之、米子町裏借家後東西貳拾貳間、南北拾八間半、表長や西妻ハ甲部橋塀覆内迄十六間、南北四間有之、新藏御門番人御作事所定渡小吏志太平と申者只今迄勤來は處此度御免、嶋根郡西持田村市平此度木實方定渡御門番被仰付、依之御門引渡として御作事所^{*}御徒横目本田和大夫、御大工内藤傳四郎兩人立合ニ而、木實方御役人松林與三左衛門請取、則市平即刻ハ相勤、右ニ付而同十二月五日御門前雪掻キ之儀、御小人小屋^ハ致し御議定、且又御紋付御燈挑^(提燈)貳張、御用人高木丈左衛門殿御指紙を以、御武具方御役所^{*}受取、張替之節は御用所^ハ窺ニ而、御武具方へ遣し引替受取は筈、同十二日同所御門之外松飭り之分、御小人方^ハ御門番受取は而、手前ニ而飭りは様御議定、其外内飭り裏門飭り共ニ木實方ニ而相調不殘飭之、同廿六日大工小屋三間ニ九間御普請被仰付出來、翌未ノ正月七日より表長屋御修覆ニ御取掛り、同十八日地祭り御祈禱として長岡諸衛罷出相勤、

野間氏、熊野氏、稻塚、景山、田邊、須山、村岡、横山、松林相詰ル、御新初メ大工棟梁作右衛門、相墨大工平兵衛、木挽肝煎權八、佐次右衛門、鍛冶藤兵衛、石功吏右衛門何れも相詰、夫々追々地突初リ、野間氏を被仰渡しは、惣して請取普請と申物は、麗末にして末に至惡敷もの也、木實方御普請は請負を相止、日雇に可致旨被仰付、日傭等之様成ものも、上の御普請に雇ひ得は、上日傭一日六拾文充ニ以得共、木實方には撰人にして一日八拾文充にして雇、早朝極晩迄役人立廻り、猶又稻塚、景山、田邊、須山、村岡、横山等小吏共迄、自ラ手をあらし日傭夫同然に相勤、人夫之手配善惡を撰て、惡布人を翌日不雇之、すぐつて働有之者へは御褒美被遣ひ故、自然ニはかく布出來立申ス、諸職人之儀は猶以如此也、毎日職人并日傭等百人程充入込、節旬日、祝日といへとも休日なしニノ片時之たるミもなく、令出情以様掛引被仰付ニ付而、同三月廿四日三間に拾貳間之蠟打場并三間ニ九間之御藏御棟上有之、引續キ貳間半ニ五間之御藏建ツ、面長屋御修覆迄出來ニ付而、同四月十一日田邊十左衛門御用長屋へ引移ル、扱又御細工所之蠟打場并蠟絞り面木貳挺、只今之木實方引越立直しに成、則打場は今の計也、^(屋)同二申三月十四日大坂流儀蠟絞り面木壹挺建ツ、新屋を手代源七并蠟打三右衛門參、好之通出來

面木長サ九尺三寸、幅壹尺七寸、厚サ壹尺四寸、貫穴横六寸、高サ鉢之底迄貳尺五寸、底貫下端迄壹尺六寸、上ヶ穴貳寸、惣穴長サ四尺三寸、座板厚サ壹尺三寸、長サ内ノり貳尺、ほぞ長サ六寸充左右へ出ス、底貫長サ七尺、厚壹尺、幅壹尺六寸也、蠟輪

三枚重ネ、立機、敷機、荏胡袋等三右衛門望ニまかせ不殘出來、諸道具くわしき事へ、諸道具寸方定リノ事と申所ニ出故、爰に略ス

右ニ付而新屋の大坂流儀蠟絞り佐平次、長兵衛と申者、外ニ碎キ夫貳人參、毎日本實方ニ而絞リ以也、御國流儀之面木貳挺も平七、六兵衛、長兵衛、八兵衛、與右衛門絞リ夫ニ而外ニ利七、善七、梶平、吉三郎など申者罷出相勤ル、追々大坂流を見習、蠟のすへやう、貳番精を以薪にいたす事ともになりぬ、其後大坂流面木また壹挺立給ひ御國の蠟絞り共打習ひ以様被仰付、八兵衛、利七、平七打習ひて是を絞る、扱又蠟實餘慶に相成、御藏建増し無之而不相成以得共、土地せまき故、幸御役所西に森脇屋富右衛門借屋并紺屋治右衛門と申者居宅有之、是を御願有之、則申八月七日右之屋敷可相渡旨、町奉行津川六郎右衛門殿申來ル、尤大目代善右衛門、小目代九三郎、町年寄治兵衛罷出ル、元々山田新十郎、元方田邊十左衛門、小買物方原田喜右衛門立合、兩屋敷共受取、富右衛門借屋古家入札に相成、落札六百壹匁壹分壹厘ニ而材木屋久右衛門と申者へ被仰付、紺屋家敷古家は治右衛門に被下、其上同町並ニ拂屋敷有之を、右入札之銀に少し足し銀被下以而是を調被下、森脇屋分屋布代可被下旨以處、御上御用之儀ニ以得は指上度願、尤御用無之節は御返し被下度と申ニ付其通相濟、右ニ付而野間氏を被仰立、富右衛門儀は御目見被仰付、寶曆三酉二月廿九日町屋敷跡、石垣ニシテ堀覆并裏御門建、同千二月廿一日泉府方内之御藏、梁行三間、桁行拾間之御藏并計屋共代銀を以、木實方引被仰付

早束引取、拾間之御藏并西の裏門脇ニ計屋建、同四戌二月廿一日御細工所ニ有之ハ貳間半に七間の御藏引取、地清ノ有之、三月三日柱立有之、同五亥二月廿四日梁行三間、桁行八間繼足柱立相濟、則此所今之碎部(屋)ニ成、扱、吉村喜兵衛殿屋敷木實方北之方に有之、御役所せましく付此屋敷御願ハ得ハ、幸イ北堀に明屋敷出來ニ付、喜兵衛殿へは北堀に屋敷替被仰付跡上り屋敷ニ相成、同四戌十一月十九日木實方被下之、則御徒目附高木奥右衛門、屋敷方役人伊藤新吉、安藤和助、尤吉村氏も立合ニ而請取、木實方ハ野間氏、熊野氏、稻塚、景山、山田、須山立合、直ニ御小人四人爲番人御用所被仰付、吉村氏上り屋敷間敷、表口貳拾間四尺五寸、後貳拾間、南北共ニ入貳拾三間五尺、古家は御拂ニ成、表裏北之方境迄塀覆被仰付東之方裏門迄建、扱又、北之方に三間に七間之雜藏立、半分ハ材木入所、半分御道具方之諸道具、莚、疊表様成物入所ニなる、此御藏御入用ハ御内用方ハ出る、同八寅正月七日ハ釜屋御普請初る、同二月廿七日迄御普請出來、同三月二日諸衛罷出成執行仕ル、同十一月已九月御役所役人詰所手セまき故、北之方へ壹間に三間之付おろし被仰付手廣く相成、此御入料御内用方ハ出る、惣して木實方一ト役所に蠟絞り面木八榎建と、最初より御定メ有之といへとも、蠟實高も思召様ニ無之ニ付、漸々寶曆十二年春迄ニ建揃ひ、打場、碎屋共に事調相濟、然共御藏は今壹ヶ所も不足に有之、搥て御内用拂と申事、先に御内用始りの處に委細書顯す故除之

八、木實方役所に鎮守(勸請)灌定之事
附り、祭禮始る事

一 寶曆元未歲野間氏ハ長岡諸衛を招、木實方役所に鎮守なくて叶ふまし、何れの神可然哉と御尋有之、諸衛ハ申ハ伊(伊太)曾大神可然、是ハ木實守の神也、紀州名草郡に鎮座し給ふと申、しからは此神を守護神と仰へしとて、大工梁作右衛門(棟殿)に御申付、少(小)キ宮居を拵、是に灌定(灌定)し給ひ木實方繁榮を祈願有之、同貳申二月八日御祭禮初る、長岡諸衛已刻ハ罷出御祭事相勤る、依之野間氏并役人麻上下着用相詰、其外小吏、蠟打、碎夫共ニ罷出、於神前御造酒頂戴、何れも御料理被下賑々敷有之、猶又新屋傳右衛門、三好屋喜兵衛ハ御茶菓子并取肴臺物指出ス、蠟打共ハ一樽奉備ル、其一日ハ大工棟梁并蠟打夫、碎夫ともニ一日之賃錢被下之、追々御祭事賑々布相成、唯今ニ而ハ上下の仕出し八拾人計も賄有之、此入料ハ不殘御内用方ハ出ル、扱又九月十五日御祭事始る事は、寶曆十卯歲野間氏記州伊(伊太)曾大神に御社參之節、神主奥因幡守に御祭之事御尋ハ得ハ、九月十五日也と申ニ付、御役所ニ而ハ二月九月兩度之御祭事也、九月十五日ニハ神前御神酒被備、御奉行并元メ御役人中麻上下着用、小吏、蠟絞り夫、碎夫迄神拜仕、終て御吸物御酒御役人中に被下之、小遣、絞り夫、碎夫ともハ錢三拾文充御酒代被下之、大工新右衛門へハ一日分御扶持作料被下、猶又木實方御祈禱之ために、千手院、普門

院、末治權現神社、津田村吉祥寺之三尺坊權現、隱^{*}湯之燒火山、右之寺社の正五九月一ヶ年に三度充、御初尾と^(シテカ)鳥目貳百文充被指上、仁多郡佐白村に伊祁曾大神灌定有之ニ付、正月許御初尾百貳拾文被指上、何れも御札守來ル、其外伊勢の金貳百疋、記弔伊祁曾大神の金貳百疋、杵築大社の銀拾五匁、何れも一ヶ年に壹度充御初尾被指上、則御玉串來る也、扱又寶曆五亥とし凶年ニ付、翌子春^{コトク}悉飢人多キニ付、三月十五日より漆核に大麥、大豆、米なと煎交ひて、木實方御役所ニ而毎日千人亦は千壹貳百人程充、壹人ニ貳三合之積りを以、同四月十九日迄被下之、依之露命を助る者おひたし、ケ様ニ慈悲なし給ふ故、御役所を拜ムもの多し

追々御祭事賑々敷相成、唯今ニ而茂上下仕出し百人計も賄ひ有之、此入用は不殘御内方^(用脱)出る也

九、木實方債米之事

一 木實方御役所は始りより、野間氏の御任セ有之御役所なれば、諸御普請其外何等にかきらす、壹錢之御入用をも上之御物入無之、御役所之出目銀を以償之給ふ也、仍而寛延三年五月五日御願有之は、木實方役人郷中勤野扶持方、或は手前抱郡足輕御給扶持、并役人手前抱定渡り小吏御給扶持、共ニ償に可致由御申出有之ニ付、則午納御勝手方御役所一所務切ニ御償有之、右に付而役人乘馬賃錢、木賃銀共ニ御役所被下之、乗り馬は一日錢百五拾文充、木賃銀上下五分充、外に郷方替錢^(遣カ)とし

て四拾九文被下之御議定、御普代格以下は一日三拾五文充遣錢被下之

十、十郡の村々の蠟實代御前貸之事

一 植木、漆木所持之者へは、實高相應に大概半分の積を以、利なしニ御前貸有之、是は御役所いまた不初内は、蠟實持主ともより商人手前へ、實なり相應之心當ニ入置、前かり致來りし處、御役所御買上に相成ひ而は、一切下ニ而賣買不相成、下之障に相成、其上植畑、漆畑出情諸色しまり合、ために延享四巳秋御前貸被仰付、則借主、庄屋、年寄、證文左之通

拜借仕御前貸證文之事

一錢何拾文 但 利なし十月初 蠟實を以上納

内

何貫文	誰	判
何貫文	誰	判

右は何秋出來琉球植實爲御前貸、慥ニ拜借仕所實正御坐し、然上は來何之秋十月切、植實を以速ニ上納可仕し、若本人不埒仕しハ、證判より急度上納可仕し、爲後日證文仍如件

年號月日

何郡何村

年寄 誰判
右同斷 誰判
庄屋 誰判

村岡 傳次様

加納 又藏様

右之通之證文ニ而、年内より春へ掛て御前貸有之、秋に至りて一ヶ年切ニ上納、指引皆濟有之、年々如此御貸付有之ニ付、下之助と相成、木實方之御惠ミを難有存もの多し、只今ニ而は蠟實直段下直ニ以得は、猶以前貸無之而は下之存付悪しかるへし

十一、木實方御役所に野間氏御書出有之事

附り、御役人役割次第御役所正面張置事

一 寶曆元未春御役所内、野間氏御書出し文言左之通

覺

一 平日火元之儀彌以念入可申事

一 勤方上下親疎之無隔、相互に令一和、無底意遂相談、不可及爭論、若私之意趣を以、不和

之輩は全可爲不忠事

附り、無據及詰合申募いとも、於其所不申争、追而、如何様とも譯立可申事

一 下々ニ至迄於御益之筋は、雖爲少分不包可申出い、外に對し顯難申出儀茂有之は蜜々可申

出事

一 御藏之内取扱大切至極之事い、生蠟請拂諸事彌以念入可申事

一 御門より不限何等持出いものは、門番に相断い而可指出い、尤あやしき躰之者、たゝすみ

伺い氣色有之いハ、罷通い様可申付い之事

右之通隨分堅相守可申者也

正月

奉行

野間忠大夫

右之通毎年正月書直し有之、正面ニ張置事也

覺

一 蠟實辻見

稻塚和右衛門

景山惣七

一 此外は其時々奉行見合を以可申付事
蠟燭請拂

一 残方

斤目改

碎夫

絞り夫

大坂表拵(俵)

日記方

勝田定治郎
村岡傳治
加納又藏
原定四郎
右原宇助

山田新十郎
勝田定治郎

一 惣而上納物并蠟代銀

村岡傳治、加納又藏より

差出し節請込可申事

勝田定治郎

勝田定治郎
横山唯六

一 御藏鍵預御道具

請拂御役所内諸事吟味

須山斧右衛門

一 金銀錢寶札元請拂

一 生蠟請拂

但、拂之節代銀當分可令上納し

斤目改

碎夫

絞り夫

木實方秘傳書

大坂表拵
人夫方

村岡傳治
加納又藏

一 御藏方

小買物方

蠟實受込同渡方

斤目改

大坂俵拵

碎夫

綾り方

但、百貫目打切以上ニ而貫目相改、傳治、又藏に可相渡し、尤元々立合可申事

一 郷町穿鑿改

横山唯六
金津庄藏

原定四郎

一 御作事方

御道具方

斤目改

碎夫

綾り夫

大坂俵拵

日記方

石原宇助

一 御藏より諸事出入之節、役人壹人充相添可申事

一 郡中より蠟實持來し節、大分之儀故、役人不殘申合、相改請取可申事、尤受取書付相添、代銀相

渡可申事

一 烏臼畑并漆、琉球楮木爲見分、奉行出郷之節、役人出郷之儀は、其時々見合を以可申付事

一 元々役人之儀は一切受込し儀し條、議事扣帳面ニ留、尤毎日可致改判し、且請拂帳面之儀は一ヶ

月極ニ而、扣帳面引合奉行合點判取可申事

- 一 假ニ茂當分之儀たりとも、書付取遣可申事
- 一 惣而御調物之儀、一切奉行伺之上調可申事
- 一 生蠟、傳治、亦藏請取、御藏度々に奉行之内合點判取可申事
但、蠟御拂度々は又右同斷
- 一 蠟打立壹番貳番ともに帳面日々相改、元メ判月メニ而留付、奉行合點判取可申事
- 一 日雇夫帳面、右同斷
- 一 蠟御拂并御登蠟、共ニ右同斷
- 一 蠟實御買上帳面、右同斷
- 一 御銀元請右同斷
- 一 蠟實前貸證文、奉行合點判取、其上ニ而貸渡可申事
- 一 同取立古證文、奉行消判取可相渡事
- 一 小買物方、御銀元請通合を以たひく受取以節、元メ判取月々極手形引合、通消し判取可申事
- 一 布、核、芋、薪、墨、紙、筆、諸色元請帳面、右同斷
- 一 諸色拂帳面、右同斷
- 一 御道具諸色新出來帳面、右同斷

右之通御爲第一之儀以条、吳く令一和、雖爲少分之儀、無油斷心を合、諸事日拂と相心得、無滯様堅可申合以上

正月

木實方奉行

如此每正月書直し、新夕に張替に成

十貳、毎月廿四日野間氏ニ而御寄合之事

附り、正月廿四日、十二月廿四日御祝儀有事

一 寛延元辰春より、毎月廿四日野間氏於御宅、御役人罷越御用御寄合有之、是は御役人何れも小身成もの共ニ而、銘々宅ニ而御用寄合相成間布とて、一ヶ月に壹度充、御寄合日廿四日ニ定ル、依之十二月廿四日は御用備(満カ)テニ而、櫛實、漆實御成加御寄合有之、御役所を爲御祝儀、鴈壹わ、御酒壹斗、野間氏御宅に被仰付、其日は蠟絞り夫、碎夫ともに野間氏御臺所に罷出、晝御吸物御酒被下、銀壹兩宛御内々御目錄被下之、蠟絞り頭取七三郎に札銀貳兩、碎頭取善七の外ニ札銀三匁被下之、扱又御役人并新屋、三好屋、大工棟梁、小吏とも迄御料理被下、爲御内々元メ共へは銀壹枚充、其外御役人中の銀三拾匁充、大工棟梁へ銀貳兩、小吏共の銀五匁充被下之、銘々の御盃事有之、正月廿四日は御備餅開有之、晝御雜煮吸物終而御料理有之、御役人の不殘、小吏共迄御盃事有之、野間氏に被仰は、

各々一和故御役所無難、大慶不斜趣御挨拶有之、當年も此木モクロクシ櫛子が無理成事を可申由御戯れ有之、愚意に是を思ふニ木櫛子と申物は上の皮黄にして脂有り味ひにかし、内は金鉄より堅クして調法のもの有り、我らこときは七變化の括りマ、シ餉のことし、人に化て狐類ツラもおかし、恥しき事とも也、扱御役所は商賣役所なれば、正月は十一日か出初有之、十二月は廿四日迄年中休日なし也、但シ盆は十三日か十八日迄休日、其外祝日、節句日は時に至り休日被仰付、野間氏は毎日朝出、晝出兩度宛御出勤、役人は順番ニ而朝出有之、晝は直詰也、尤御役所内に須山、加納住居得は此者とも立合、朝の内御用は事濟、夫より御役人五つ半時皆々出揃なり、御役所内入ては座するといへとも膝ヒザをくずさず、物をあらそふ事なくしてともにしたしミ、誠に水魚の遊ぶことくにして御役所の掟を守り、御出入之町人共より御役人中折節に招くといへとも、野間氏か御免し無之内は、振舞等之儀會て無之、又は御門内免しなくして酒様のもの入事なし、仍而御心入を以、春は白魚、夏は小鱈などの御催し舟ニ而、御役人、小吏迄壹ヶ年ニ一度宛は御振舞有之、或は芝居有之節は木戸錢被下之、是又一ヶ年一度は御免有之なり、猶又御役人中へ麻上下なとおしなへ被下、小吏共へは、一ヶ年に壹度宛地布之かたひら被下之、常にあへれミを以御掛引故、御役人、小吏、日用夫等に至迄、御爲第一として身命を投打、野間氏の仰にしたかふ事、野分に本草のなひくかことし、我、若キ時佛説セツの咄ツに聞に、天竺ツクに金の山有り、此山の谷へ石瓦を投入れば則金子ゴカと成よし、是を思ふに今木實方の御役所は如此ならんか、御役

人、小吏迄は左も可有、荒くましき若者、大勢の碎夫、絞ツり夫共日々の入あいなるに、御門内入ては御役所の掟を專一にいたし、少分の損益をかつかへ、出情をいたす事は石瓦の金子のことし、偏に野間氏の御人徳(る脱)なへし

十三、御内用方始りの事

附り、蠟打共の御褒美被下事

一 寛延三午歳稻塚か景山申は、惣して米なと受取ニは、指米ササと申て少々宛取事有、楯漆も目見と申て少々宛取し而可然ものニし、此後直段等改ニ茂、殊外高下有之事に得は、目見を以何れも打寄、直段不同無之事專一可成、其上、少充ニ而も實高餘分に至時は、御役所の筆紙等之多足ニも可相成、野間氏に御咄申上し而はいか、可有哉と申、景山も尤と道心(同)いたすニ付、此段野間氏熊野氏に物語をしけるに、打寄趣評之上、少々宛目見取儀苦かるまし、然らば此分は御役所ニ内用と申事無之得は、此後内用方と申事をはしめ、是に納メ可然と議定有之、依之少々宛のつゝほをも掃ため、五貫目拾目ニ外に藏入帳を拵へ、毎日の改を以ため置、此分は不殘元方御買上相成、代銀御内用方納る、則御役人ニは横山を被仰付、拂帳ニは野間氏熊野氏御判有之、唯今ニ而は兩御奉行御判有之也、外ニ蠟掛出し或は煤蠟なと、申事有、掛出しと申は打立之蠟、横山、金津兩人に請取儀節、元

元ベ立合一日打之蠟に百匁充の掛入(を)して受取、是を追々ニ請取置ひ而、元方村岡、加納に相渡節、又元ベ立合掛入なしに相渡ス、依之横山、金津方ニ而ハ欠と申事なく拂切ニ相成、少々出目有之は得は御内用方の納る、是は横山、金津方ニ而欠立は得は、御勘定之時二重ニ欠出に付、紛敷故如此也、又煤蠟と申は、一ヶ月の晦日ノに碎屋内掃除いたし、塵芥取集メ蠟に絞りは得は四五拾匁充有之、其外御藏等掃除、御役所御用ニ不立捨る物を拾ひ上けて、皆々御内用方の納メ、御内用方元請ニ成、是を以御役所内臨時之御物入、又は蠟打共出情之者へは御褒美被下之、此又蠟打共の御褒美と申は、他國ニ而は蠟木五挺拾挺充立并へ有之、面木に毎日錢貳百文充掛置、其日一日の蠟絞り高を打勝ひ者取事也、御役所ニ而は實百貫目絞りに蠟拾六貫目餘打ひ者へは、壹人に錢百文充御褒美として被下之、尤年之豊凶により拾六貫貳百匁或は三百匁、五百匁以上と毎年御議定有之事也、實至極よろしきには拾六匁八九百匁、拾七貫目、又は拾七貫壹貳百匁位も御役所ニ而絞りは事有之、其外御役人、小吏等ニ至迄出情相勤ひ得は、御内用方より御褒美被下之事也

十四、新屋傳右衛門宅ニ而蠟絞り初る事

附り、入料、世話焼料被下之事

一 新屋傳右衛門儀は古來より家居よろしく、他國の御使者有之時は裏座敷を御宿に被仰付

殿様ニ茂度々御成有之ニ付、追々修覆の多足ニ茂可相成ために、蠟をも絞らせ度思召ニ付、幸イ御國蠟は田舎絞りに而色合も悪布、打方等よろしからす故、延享四卯秋傳右衛門大坂に登り山本屋九右衛門と申合、大坂流儀之蠟絞り面木貳組并諸道具ともニ相調來、辰ノ春迄ニ早々指下シは様手配置、蠟打之儀は大坂ニ而吟味をいたし上手を貳人やとい、外ニ蠟實碎キの者貳人、是も蠟絞り諸道具下り節、一所ニ參は様約束相定メ傳右衛門儀は罷歸る、依之翌辰ノ春蠟絞り面木貳挺諸道具并蠟打貳人、内壹人は三右衛門、壹人は八兵衛と申者、外ニ碎キ之もの貳人、以上四人大坂山本屋を新屋に指下ス、右ニ付而御細工所を新屋方へ、蠟實遣シ絞るといへとも、生蠟打かた生蠟之仕立殊外秘して、御細工所の者へは是を不見セ、生蠟出來至而よろし、依之同六月朔日御細工所と新屋方と、蠟實百貫目充絞り競へ有之

一 琉球實百貫目 但、上中下平シ實を以

此生蠟拾貫五百八拾匁

代銀ニノ三百九拾八匁六厘

但、百匁ニ付三匁四分三七五

同貳番生蠟九百五拾匁

代銀ニノ拾六匁壹分五厘

木實方秘傳書

但、百匁ニ付壹匁七分

一 漆實百貫目 但、上中下平シ實を以

此生蠟拾貳貫貳百五拾匁

代銀ニノ四百九拾五匁六分五厘

但、百匁ニ付四匁六厘貳毛五

一 同貳番蠟壹貫五拾匁

代銀ニノ貳拾九匁六分七厘

但、百匁ニ付壹匁七分

メ九百三拾九匁六分壹厘

内

七拾九匁四分實百貫分諸色入料引

残り銀八百六拾匁貳分壹厘出目銀

右之通新屋宅ニ而生蠟打立指引如此、生蠟直段は其頃大坂御登セ蠟御拂代積を以

一 琉球實百貫目

此生蠟拾貳貫六百六拾貳匁

但、貳番蠟共ニ

御細工所打は貳番を煮かへし、壹番に相成以故別に貳番蠟と不出

代銀ニノ四百三拾五匁貳分五厘

但、百匁ニ付三匁四分三七五

一 漆實百貫目

此生蠟拾貫六百貳拾六匁

但、貳番蠟共ニ

代銀ニノ四百四拾匁六分貳厘

但、百匁ニ付四匁六厘貳毛五

メ八百七拾五匁八分七厘

内

四拾五匁八分實百メ目諸色入用引

残り八百三拾匁七厘出目銀

尤、兩打場共ニ蠟實代錢除之

右之通御細工所生蠟打立指引如此、直段之儀は前ニ同し

但、御細工所打と新屋打と蠟代指引

銀三拾匁壹分四厘新屋打宜敷

如此之指引ニ付而此後入料は實百貫目ニ付三拾九匁七分宛、外に實百貫目ニ付銀拾五匁宛、世話焼料として可被下旨御議定、則野間氏御用所御詞(何カ)ニ而相濟、同月六日大坂を蠟打道具并蠟打様之仕形見分として野間氏、熊野氏、稻塚、景山、田邊、須山、新屋へ罷越、御祝儀として傳右衛門に御樽肴、蠟仕ともへ御目錄被下之、其後大坂綾り方に御細工所も被成度、野間氏思召あるといへとも、是を秘してゆるす事なし、自然に月日送り給ふ、尤琉球蠟ハ御細工所溜りよろし、漆蠟はいろ／＼工面いたしひても打まけ、其上綾り精を以薪にいたす事ならず不益多し、有時傳右衛門ハ三右衛門、八兵衛に申聞セハは、兩人共ニ大坂の流儀、當地のものに教る事なし、其方とも兩人ニ而事足儀ニ而もなし、此度兩人ともニ暇遣しハ間、大坂表へ罷歸りハ様申渡ス、三右衛門儀は幼少成娘壹人召連下り、兼而傳右衛門家内ニ而念頃(悲)にいたし、一兩年も馴染ハ得は、歸りハ事至極かなしミ申といへとも、八兵衛と一所に申合下る事ニ侍れば、無是悲暇(非)を取罷出る、傳右衛門家内のものハ手付し幼少之娘に名残りをおしミ、娘ハ傳右衛門家内の者ハ涙と共に暇乞して、兩人打連罷歸る、然に三右衛門道ハ腹を強くいたミ、一足も歩行事ならすして、漸くハ堅町新屋忠兵衛處迄參ル、忠兵衛申は其趣ニ而は道中心元なし、殊に足よわ連なれハ爰元に一兩日も逗留いたし、養生なんととして跡ハ登り可然、又八兵衛事

ハ一所に見合ハ而も逗留の程はかりかたし、先へ罷登り可然よし挨拶におよひぬれば、是悲なく八兵衛は先へ歸りぬ、扱三右衛門跡ニ而追々快氣ニ相成、三右衛門ハ忠兵衛ハ物語ハは、只今迄親方ニ而父子のもの御念頃に罷成、生々世々わすれかたし、何とそ今一度親方へ罷歸り、御心にも應しハ様に相勤申度ハ得は、御斷を御申被下かしと頼ニ付、傳右衛門ハ此趣を咄ス、然らハ戻りハ而相勤へきよし申渡ス、依之此かたの蠟打共ハ追々傳受(授)いたし、後木實方へも參ハ而指南いたすニ付、打方之儀は頭取に野間氏より被仰付、後壹人扶持充被下之、扱又傳右衛門手代に源七と申ものあり、是ハ新屋方ニ而生蠟一卷の世話焼成、三右衛門と心を合セ追々綾り方工面いたし、委しく相成ニ付、蠟綾り面木次第ニ増し被仰付、源七儀ハ丹命(短)にして死スおしきもの也、寛延三午七月廿三日傳右衛門ハ申出ハは、唯今迄雜用百貫目ニ付三拾九匁七分充被下之ハ得共、此後三拾三匁七分充被下置ハ様願出ル、其通ニ御申付有之、其後大坂蠟直段追々下直に相成ハニ付而、拾五匁宛之世話焼料拾匁宛被仰付、寶曆五亥十一月三右衛門儀病死仕、代りとして七三郎儀頭取ニ被仰付、寶曆九卯十一月十六日壹人扶持被下之、蠟實追々余分ニ相成ニ付、新屋方ニ蠟實入藏セまくハニ付而、同年七月白濁町和田見ニ拾貳間に三間之蠟實藏建ル、同十一巳五月廿五日同所ニ三間に拾貳間之蠟實藏建、是ハ當分木實方ハ拜借銀いたし、追々入料渡を以指引ニ成、寶曆十二午正月、蠟綾り面木貳挺立ル、以上新屋方に九挺有之なり、寛延三午七月廿二日中村仙左衛門儀新屋方へ御徒横目役被仰付、蠟實新屋に受取ハ節、又綾り立

之生蠟木實方へ持參之砌、立合判行有之、然に寶曆七丑三月十八日中村儀外御用有之ニ付、綿貫彌惣
替り役被仰付、寶曆十一已春綿貫外御用ニ付御免、其後代り役無之

木實方秘傳書

參

十五、御國中の軒別に楹木植付被仰付事

附リ、はセ畑無之村ニ受合木有之事

一 寶曆七丑五月廿三日御用所御觸之趣、郡中御用地楹畑之分、年數も余程に相成し得共出來立惡布、唯今におゐても何之御用ニ不相立村も多ク有之由に、左に而は木實方趣向成立不申し、依之村々軒別に壹本充、或は大錄(録カ)之者は貳本充も御用木として、實成はセ木、石畑縁か屋布廻りに植置可申し、實成し節は半分以上納之儀し得は下之難儀ニ茂無之事し、隨分生立し様令出情し様可被申渡し、委細之儀は木實方可承合し以上

如此御觸有之、木實方御役人手譯(分)ニ而御國中打廻り、壹本或貳本充土地を見合植付申付ル、夫々年々春壹度充軒別に植付楹相改、實成木所持之者へは有木を以、軒別御用木ニ申付し故、追々上納實も有之、尤寺社家御免地之場所除之、木數左之通

- 一 楹木三千貳百拾三本 意字郡
- 一 漆楹木貳千四百拾貳本 飯石郡
- 一 同木七千四百七拾八本 神門郡
- 一 楹木貳千貳百五拾本 出雲郡

木實方秘傳書

- 一 同木貳千九百七拾七本
- 一 榿木貳千四百貳拾壹本
- 一 同木千四百貳拾六本
- 一 同木千六百四本
- 一 同木三千四百五拾貳本

武萬七千貳百三拾三本

右之外、仁多郡之分いまた軒別木數難定メ、村別之儀は軒別帳面に有之除之、扱又受合木と申事は、は七畑出來兼い村々、貳拾本三拾本或は五拾本程充石畑縁りに植付、御用地代り木に出し様御申付有之、村々左之通

- 一 榿木貳百本
- 一 同木拾五本
- 一 同木三拾本
- 一 同木百貳拾四本
- 一 同木拾八本
- 一 同木拾五本

同 同 同 同 同 同
 郡 郡 郡 郡 郡 郡
 小* 野* 北* 長* 別* 本*
 波 井 浦 海 所 庄
 浦 浦 浦 村 村 村

嶋根郡
 榿縫郡
 能儀郡
 秋鹿郡
 大原郡

- 一 榿木拾壹本
- 一 同木五拾本
- 一 同木三拾本
- 一 同木貳拾貳本
- 一 同木三拾本
- 一 同木貳百六拾三本

但、此分は永不仕所振替畑

但、此分右同斷

- 一 漆木四拾本
- 一 同木貳拾壹本
- 一 同木拾本
- 一 同木三拾本
- 一 同木三拾本

木實方秘傳書

同
 郡
 瀨* 本* 上* 坂* 本* 東* 西* 八* 高* 吉* 上* 佐*
 崎 郷 伊 坂 庄 林 林 幡 津 野 橋 津
 浦 村 野 浦 浦 村 木 木 原 屋 野 波 目
 浦 村 村 浦 浦 村 村 村 村 村 村 村 村

一 同木三拾本
 一 同木四拾三本
 一 同木貳拾六本
 一 同木三拾壹本
 一 榿木貳百本
 一 同木五拾本
 一 漆木貳拾貳本
 一 同木貳拾本
 一 同木九拾三本
 一 同木六拾三本
 一 同木拾本
 一 同漆十三本
 一 同榿十七本
 一 同木三拾本
 一 榿木五拾本

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡 郡
 奥田儀村
 多岐村
 毛津村
 常樂寺村
 久村
 東神在村
 川手村
 上山村
 掛合村
 殿川內村
 加食田村
 朝原村
 宮中村
 大谷村

受合榿木合貳千三百九拾六本

一 同木四拾四本
 一 同木五拾本
 一 同木百六本
 一 同木九拾八本
 一 同木貳拾本
 一 同木五拾本
 一 同木六拾貳本
 一 同木三拾九本
 一 同木三拾本
 一 同木貳拾本
 一 同木五拾本
 一 同木百本

同 能 同
 郡 儀 郡
 伊志見村
 日白村
 九重村
 鳥木村
 清瀬村
 清水村
 嶋田村
 吉佐村
 細井村
 黒鳥村
 和田村
 荒嶋村

十六 十郡、土手植付の事

附り、義田目附之事

一 土手植付之事は、寛延元辰歲神門郡大嶋村善兵衛と申者、古志川兩土手不殘願ニ付、はせ植付被仰付、其外十郡土手筋の植付之儀、野間氏御願有之の處、川内に植付而は洪水之節、障に可成とて川の外へ植付被仰付、依之御田地持主共の被仰付、追々はせ植付有之といへとも、砂計の土手ニは生立不宜、年々野間氏并役人打廻り、折鑑(鑑)におよぶ、扱出雲郡の土手筋ニは、多ク植松并竹藪有之ニ付、此分ニハ先松の中、藪の中の植置、生立次第廻りの松藪等伐取の様御申付有之、然とも土地惡布川風當リ強ク故生立不申、依之寶曆六子歲十郡の義田目附の、加役ニ土手植并はせ畑共ニ改被仰付、此役料之御心當ニ銀壹枚充、毎年正月十二日野間氏於御宅被下之、寶曆十一已歲義田目附御止ニ付木實方ニも今は無之事、とかく大川土手は砂計之土地、其上川風強キ故出來立惡布ニ付、大嶋村善兵衛願之古志川土手御取上ケ、其外十郡土手筋御取上ケニ相成、義田目附の御預ケニ相成ぬ故、夫(持カ)に物主を付、出情申といへとも出來兼ぬ、依之出雲郡松藪有之所持のものへは、土手拾間にハセ壹本充の割合申付、石畑縁リ、植置、土手の替り木に指出ス議定也、扱又用水川土手分は土地よく川風も弱キ故、大原郡延野村、大竹村、神門郡入南、東林木村、犬谷川土手、馬木拾間川土手等少々充はせ木生立實成有之、出雲郡分土手間數并はせ木數左之通

一 土手九百間

坂田村受合

此木數百八拾本

但シ五間ニ壹本平シ人別帳面有

一 同五百八拾壹間

上鹿塚村受合

此木數百拾六本

人別帳面別有

一 同四百貳間

中原村受合

此木數八拾本

右同斷

一 同四百五十壹間

今在家村受合

此木數九拾壹本

右同斷

一 同四百七十八間

鳥屋村受合

此木數九拾五本

右同斷

一 同五百六拾七間

井上村受合

此木數百拾三本

右同斷

一 同百六拾貳間

別名村受合

此木數三拾三本

右同斷

一 同三百八十壹間

北嶋村受合

木實方秘傳書

- 此木數七拾六本
- 一 同五百三間
- 此木數百壹本
- 一 同四百六十八間
- 此木數百廿三本
- 一 同千三拾間
- 此木數貳百拾九本
- 一 同貳千六拾五間
- 此木數貳百七拾三本
- 一 同三百三拾八間
- 此木數六拾八本
- 土手間數合八千三百貳拾六間
- 此木數千五百六拾八本

右之土手は多ク松藪有之ニ付而、石畑縁りに植置、土手植替りに可指出受合、尤拾間に壹本之積り得共、不實成木も有之得は、五間に壹本充所持の様義田目附申付、扱又延享四卯歲御普請方

- 右同斷
- 神立村受合
- 右同斷
- 上阿宮村受合
- 右同斷
- 下阿宮村受合
- 右同斷
- 出西村受合
- 右同斷
- 求院村受合
- 右同斷

被仰付は、土手に松所持之者には、壹間ニ貳文充運上を指出の様御申付有之、依之土手所持之ものとも申は、土手之儀は先年はセ畑植付被仰付得は、貳文充之運上指上儀、八重ニ相見(申上)得は御免之筋願出ル、然とも土手植出情無之ニ付而、年來生立よろしからず、唯今ニ而も松藪伐取はセ植付ハ、免し可申由ニ付松を伐取儀も不相成、仍而兩役所共ニ斷不相立、木實方ニははセ木替り、此後とても半分上納可取事也、依之年々改をいたす事前之通り也、又神門郡土手植付左之通

- 大川土手
- 木數貳百貳拾本
- 一 拾間川土手
- 木數百貳拾七本
- 一 同土手
- 木數此分未定メかたし
- 一 保知石川筋土手
- 木數九拾四本
- 一 拾間川土手
- 木數貳百五拾九本
- 木實方秘傳書

- 大嶋村受合
- 人別帳面有
- 知井宮本郷
- 次郎右衛門
- 馬木村
- 知井宮沖村
- 神在沖村
- 甚左衛門
- 長兵衛

一 日下土手

此木數三拾四本

一 谷川土手五拾貳間

此木數八本

一 安田川土手百七拾間

此木數貳拾五本

一 岡田川西土手三百五十間

木數五拾三本

一 熊見川西土手廿壹間

木數三本

一 祭場川土手

此木數六十三本

一 同川筋土手

木數九本

一 安食川土手

日下村

人別帳面外ニ有

矢尾村

右同斷

同村

右同斷

同村

右同斷

同村

右同斷

祭場村

常松村

菱根村

右人

同村

木數貳拾四本

一 祭場川土手

木數百貳拾四本

一 犬谷川土手

木數三拾六本

一 大川土手千六拾壹間

木數百拾七本

一 同千三百貳拾九間

木數貳百貳拾貳本

一 内藤川土手

木數貳拾八本

一 高瀬川土手

木數七拾三本

一 大川土手千貳百四拾三間

木數百五拾貳本

木實方秘傳書

傳六

入南村

常松村 仲右衛門

里方村

武志村受合

右同斷

大津村受合

右同斷

石塚村

濱村

右同斷

古荒木村

右同斷

西蘭村

人別帳面外有

- 一 同三百九拾三間
- 木數七拾九本
- 一 同八拾間
- 木數拾六本
- 一 同七百六拾壹間
- 木數百五十三本
- 一 同五百五拾六間
- 木數百貳十三本
- 一 同三百九拾五間
- 本數七拾本
- 一 同貳百間
- 木數四拾本
- 一 同百貳拾八間
- 木數六拾五本
- 一 同六百四拾間

東 齒 村

右同斷

下 庄 村

右同斷

松 枝 村

右同斷

松 寄 下 村

右同斷

白 枝 村

右同斷

天 神 村

右同斷

渡 橋 村

右同斷

下 塩 冶 村

木數百貳拾八本

一 同五百貳拾七間

木數百三拾本

一 唯谷川土手六拾間

木數拾本

一 宇和佐土手百五拾間

木數五拾壹本

一 大川土手五百間

木數五拾五本

一 同土手

木數五十九本

一 貳千六百五拾壹本

飯石郡村々土手植左之通

一 大川土手

木數拾四本

木實方秘傳書

右同斷

上 塩 冶 村

右同斷

今 市 村

與 兵 衛

所 原 村

人別帳面別ニ有

舟 津 村

右同斷

上 郷 村

案 田 村

人別帳面別ニ有

一 宮脇土手

木數八拾壹本

一 大川土手

木數六拾五本

一 大川土手
中川土手

木數貳百八拾壹本

一 前土手

木數七拾六本

一 大川土手

木數六拾五本

〃五百八拾貳本

能儀郡土手樋左之通

一 植竹土手

木數八本

一 富田川土手

*三刀屋村

右同斷

*茅原村

右同斷

*給下村

人別帳別ニ有

*下熊谷村

右同斷

*伊萱村

右同斷

*西赤江村

右同斷

*中津村

木數七拾七本

一 富田川
田瀬川土手

木數百七拾九本

一 富田川土手

木數八拾本

一 吉田川土手

木數百六拾壹本

一 井尻川土手

木數九拾九本

一 井尻川土手*

木數拾八本

一 井尻川土手

木數四拾七本

一 吉田川土手

木數百貳拾五本

木實方秘傳書

右同斷

*上坂田村

右同斷

*上今津村

右同斷

*切川村

右同斷

*宮内村

人別帳別ニ有

*佐久保村

右同斷

*吉岡村

右同斷

*下吉田村

右同斷

- 一 くもさ川土手 木數拾壹本
- 一 下かしゃ川土手 木數拾壹本
- 一 吉田川土手 木數百拾五本
- 一 安田川土手 木數百三拾八本
- 一 井尻川土手 木數七拾七本
- 一 井尻川土手 木數百貳拾本
- 一 井尻川土手 木數六百九拾三本
- 一 吉田川土手 木數百拾五本
- 一 富田川土手

- 上吉田村 右同斷
- 鳥木村 右同斷
- 清瀬村 右同斷
- 清井村 右同斷
- 野外村 右同斷
- 安來村 右同斷
- 飯嶋村 右同斷
- 下坂田村 右同斷

意字郡土手楡左之通

- 一 富田川土手 木數三拾四本
- 一 田瀬川土手 木數八拾三本
- 一 田瀬川土手 木數百三拾五本
- 一 新川土手 木數四拾八本
- 一 川土手 木數六拾三本

- 右同斷 下今津村
- 右同斷 東赤江村
- 右同斷 荒嶋村
- 右同斷 松江分
- 右同斷 東津田村
- 右同斷 竹矢村

一 向川村
小森川土手

木數七拾九本

一 大草川土手

木數三拾貳本

一 前田川土手

木數九拾九本

一 下川原土手

木數三拾本

一 大田土手

木數八拾壹本

一 若次川土手

木數三拾六本

一 大草川土手

木數百六本

一 前川原土手

出雲鄉村

右同斷

春日村

右同斷

下意東村

右同斷

東岩坂村

右同斷

西岩坂村

右同斷

熊野村

右同斷

大草村

右同斷

日吉村

木數三拾本

一 川土手

木數拾壹本

一 西東川筋土手

木數四拾本

一 京田土手

木數七拾九本

〽七百五拾七本

大原郡土手楯左之通

一 大土手

木數貳拾五本

一 同土手

木數貳拾七本

一 同土手

木數七拾五本

木實方秘傳書

右同斷

宍道村

人別帳別ニ有

西來海村

右同斷

玉造村

右同斷

王寺村

右同斷

前原村

右同斷

大西村

右同斷

木實方秘傳書

一 同土手

木數貳拾七本

一 同土手

木數六拾貳本

一 同土手

木數百貳拾五本

一 同土手

木數百貳拾五本

一 おかや土手

木數九拾八本

一 三代土手

木數四拾八本

一 下り土手

木數百五本

一 松井原土手

加^{*}茂村

右同斷

延^{*}野村

右同斷

大^{*}竹村

人別帳別ニ有

神^{*}原村

右同斷

同 村

右同斷

同 村

右同斷

同 村

右同斷

同 村

木數貳拾四本

右同斷

一 久保宮土手

木數三拾六本

右同斷

一 樋下土手

木數六拾八本

右同斷

一 板見堂土手

木數貳拾三本

右同斷

一 舟渡土手

木數貳拾本

人別帳別ニ有

一 大土手

木數四拾本

右同斷

一 中土手

木數三拾八本

右同斷

一 町上下土手

木數三拾本

右同斷

一 大土手

木數百本

〆千九拾六本

楯縫郡土手楯左之通

一 大土手

木數七拾六本

一 同土手

木數六拾五本

一 同土手

木數六拾五本

一 同土手

木數六拾三本

一 同土手

木數七拾壹本

〆三百四拾本

里方村

右同斷

平田灘分村

右同斷

嶋村

右同斷

西代村

右同斷

美談村

人別帳別ニ有

東林木村

右同斷

土手木數惣合九千三百貳拾五本

外ニ

一 佐田川土手

木數難定メ

一 町後土手

木數右同斷

一 用水土手

木數右同斷

嶋根郡分

平田村上ヶ分

上、下伊野村

惣し而土手楯之儀、受合有之といへとも、砂地ニ而出来立悪布、實成木少々充有之場所も有之、多クは出来之程無心元

楯畑土手楯軒別并請合楯寄

四萬九千百三拾貳本

貳萬七千貳百三拾三本

貳千三百九拾六本

九千三百貳拾五本

木實方秘傳書

は七畑

軒別

請合

土手

四口合八萬八千八拾六本

右之通楹烟、軒別、土手楹、請合木共ニ人別之儀は、夫々帳面に有之ニ付略之

十七、蠟絞り方の次第并碎之事

附り、蠟絞り道具寸方繪圖に印事

一 漆實、琉球實共ニ壹人一日仕事、實貳拾五貫目充請切にノ碎ク也、漆實は五拾貫目ニ付、粉拾八貫目ヲ貳拾貫目位有之、琉球實は五拾貫目に、碎粉拾九貫目ヲ貳拾壹貫目も有之、何れも實善惡によるへし、是を一日絞りとす、此碎様前日に實を藏出し、拾目入五貫目入之俵數を改それ〳〵に斤目改以而横山、金津方之藏出し帳に留置、實を碎の者とも渡、其碎粉晩々の仕舞に掛以而日々帳面ニ印、百貫目之實高に碎粉何拾目と留置也、面木八挺之時は八百貫目を三日仕事に碎也、先鈞實(註)をなへくりニ而能落し、から曰ニ入碎キ、銅トウとうしニておろし、さねをさり、此核をは外ニかますに入置、右之碎粉をへむらなくかきませて、一日打實五拾貫目分八つの箱に掛分ル、随分不同無之様專一也、改横山、金津之内立合、斤梁取(景)は久治、小八之内掛之、粉能ませさる時は蠟の溜りニ不同有之、能々心を可附、扱八つの箱を打場の受取、打夫とも朝蘭ニ面木壹挺に壹箱充是を受取て打也、壹懸に粉壹貫三百匁充の積也、然共粉の高により掛目少々充違可有之、餘リ貫目餘分ニ掛以而打以得は蠟

の溜り惡布、時々吟味すへし、打上以時壹番木誰〳〵蠟何貫何百匁、貳番木誰〳〵蠟何貫何百匁と、八番木迄それ〳〵に帳面に記ス、掛目少々充高下有之、餘り打おとり以得は吟味いたす事也、少々充ニ而も毎日折おとる時は打人入替る也、實百貫目二日仕事也、百貫目之分核打迄濟以得は、生蠟壹番蠟高何程と帳面ニ記、元判取置ク、扱核打は百貫目三人掛り一日絞り也、核一掛に七舛充、此絞り以核を臼に入、糟を五合程充入するく也、是を核粉落しといふ、此手間百貫目に壹人宛成り、核絞りと申事他國ニは無之、蒸てするく斗也、御役所ニ而は核を絞りてするく事工傳也、漆核は絞りなしに其儘蒸てするく、是を絞りて核落し蠟といふ也、百貫目ニ三百六七拾匁有之、核蠟冬春迄の内は、百貫目之核に壹貫四五百匁有之、夏秋は貳貫貳三百匁有之、とつ蠟と申は壹番蠟の鍋につき残り、底にとり以は色惡布故とつに分致ス、又雜巾打是は一日仕事のつき鍋(註)をぬくる、鉢の内又は立棧敷棧などを拭て蠟氣を取、百貫目〳〵に貳番糟を以蒸て絞る也、又、壹番糟の耳を削り取、是は壹懸〳〵の糟〳〵如此成ものにて、耳の所は蠟少たまりて溜り切らさる故、耳を五歩程充取、雜巾と一所ニしほるなり、又鉢の内を煮湯を入洗ひ、流し口へ樋の口たかを以此湯を取、是を箆に古成敷布を敷、流し以得は蠟少々充残り有る也、雜巾打ケ様之類取集とつといふ也、百目目に四五百目有之、是皆大坂流の外にして御役所の秘傳也、扱又大坂流儀は蒸様(瓶)こしきむし也、御役所は平釜ニ而さなむしにする事、こしき蒸は場所をもとらずして能以得とも露上り以而蠟の色よろしからず、平釜ニ而むし以得

は場所も餘分入い得共蠟の色よろし、依之御役所の流儀は平釜ニ極るもの也、委細は繪圖にくハし、扱右之核打蠟、とづ蠟色悪布ニ付、是を打こしにする也、打こしと申は核蠟、とづともニわかして貳番打の糟に揉ませ、壹番粉の蒸に割合むして打以得は、皆壹番蠟と成色よろし、若、割合不同成時は色品替るなり心を附へし、貳番蠟は實百貫目に貳百七拾匁ノ三百目位有之、是も百貫目打夫三人掛りなり、唯今の蠟直段下直ニ而は、入料程無之ニ付御役所止ニ相成、蠟直段壹斤三匁四五分ノ以上之時は貳番蠟絞り可然なり、貳番絞りなき時は核絞り一日に五拾目充、貳人ニ而核粉落し迄濟也、然共新屋方ニ而は今以貳番蠟絞ル事也、是は入料惣名の掛り前々之通被下、其上後の見合のためには是を被仰付、扱また蒸釜ニ而朝々仕舞迄一日火を燒事夥敷、されとも薪は朝之内計ニ而其外は糟并に核ニ而事足ルなり、是皆大坂流儀也

一 漆、琉球實共春は能干て絞る事也、^(濕氣)しつけ有之時は色悪布、其上どづニ成ワろし、古實は干におよハす、どづは糟にもミ交日にほしてよく、其儘に絞り以へは元のどづニ成也、工傳

一 漆、琉球共、碎手間一人に貳拾五貫目充一日仕事也、手間賃百文充

一 白蠟實つる落し一人に貳拾五貫目充一日仕事也、手間賃八拾文充、百貫目ニ三斗三舁

一 仁蠟と申は漆、琉球實共、核を石臼ニ而挽粉にして蠟に仕立ル成、是はさねの粉貳舁に壹番絞りの糟を入、掛目壹貫三百匁宛一掛ニして絞ル、一日仕事は拾三掛充也、蠟ハ一日仕事に壹貫百匁位有

之、殊外やハらか也、蠟にして色悪布直段は至て下直なり、依之近年の蠟直段下リニ而は是を絞り以事御不益なり、尤他國ニ而は是を壹番に打交ル事也、其外綿核を粉にして交て絞り、または油木實を粉ニシテ交、或はごまの油杯さして絞り以國も有之由、御役所の流儀は一切左様之仕形無之故、會津蠟を除きて御國蠟は、日本第一のかた物蠟と申名目ニ而、直段茂外國の蠟よりよろし

一 白はセ實壹懸ニ七舁充、溜りは壹懸分に蠟百四五拾匁位有之、一日仕事は四拾貫目宛絞る也、貳

番は絞りて不益なり、是は漆、琉球蠟直段六匁位之時分、四匁位之相場なり、大坂へはむきなし爰元

ニ而蠟燭にかけてよし、唯今之蠟直段ニ而は絞りて至極不益なり、白烏白實つる共ニ壹目貳拾貳文

ニ御調也

一 一 此が蠟と申は實壹舁三拾文也、是も一懸七舁充、溜りは壹懸ニ三百四五拾匁充有之、蠟燭斗に用るなり、殊外に^(匂)ひ悪布ともしめて流れはやく、よろしからざるもの也、御役所ニ茂一日絞りてこ、ろミ有之といへとも、不宜故止ニ相成

一 生蠟包俵拵は、内は疊の表或は七嶋表ニ而包、其上を莖包ニノ口をこまやかにか、り、堅繩、横繩ニ而能べいワゆる也、印は琉球蠟壹ツ山形、漆はばんじやうかね、則繪圖にしるす、壹箇正味拾六貫貳百六拾匁充成、百斤は拾六貫目充成、然共欠立以故貳百六拾目は掛入なり

一 漆、琉球實共碎事、御國流儀はつるなからはたき以得共、つるに蠟の粉付てワろし、大坂流儀は

なへくりニ而つるを落し碎く故に、つるに蠟とれすしてよろし、から臼の仕掛皆々大坂流儀なり、踏車ハ大坂ハ新屋の下るといへとも秘して是をミせず、いか様にして核を挽やらんと存くらす斗也、有時石臼に車有りと申噂を聞て、景山工夫して是を拵る、右ニは石臼を廻し、左に小から臼貳挺、手杵貳本、とうしニ而粉を研ス事迄、壹人仕事ニ成るを工夫して拵る、後石臼之機機、車の仕形、大坂より下りゆに見くらへ何之替る事なし

一 榎面木壹組

但、兩立木貳本、底貫壹本、以上三本を壹組トス

代錢上々ハ貳拾三貫文、中貳拾貫文、下ハ拾八九貫文位也

一 榎鉢木 御國よし

代錢上々ハ三貫文、中ハ貳貫八百文、下ハ貳貫五百文位也

一 榎上ヲ貫 是は大坂よし

代銀百三拾八匁位

一 鐵輪壹組 右同斷

代銀九拾五匁位

一 敷棧壹組 是は御國よし

代錢壹貫五拾文位

一 立棧壹組 右同斷

代錢壹貫三百貳拾文

一 榎矢壹向 但貳本 大坂よし

代銀拾壹匁四分

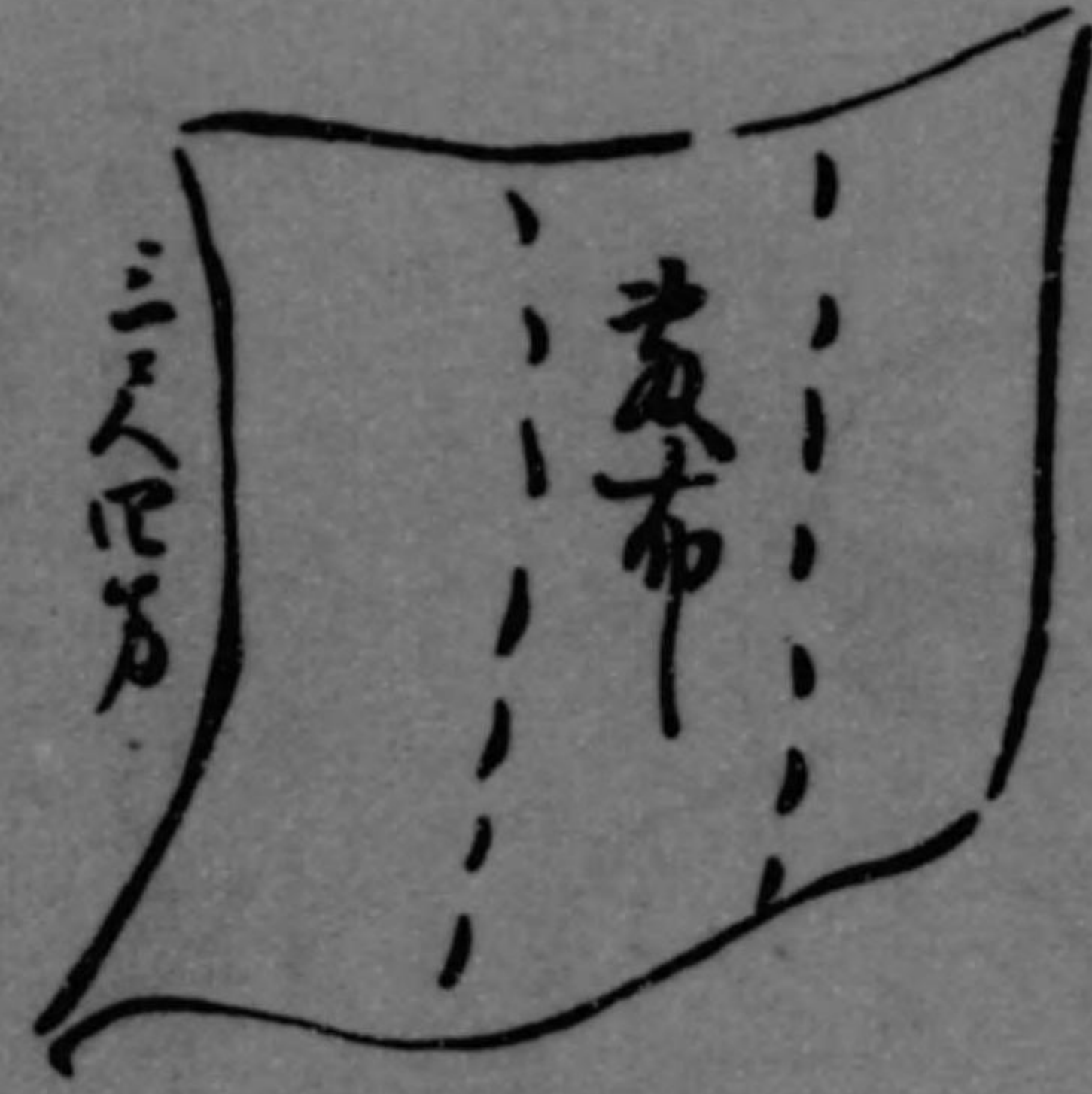
一 榎槌木壹本 右同斷

代銀拾貳匁五分

一 榎槌柄壹本 御國よし

代銀九分 大坂直段

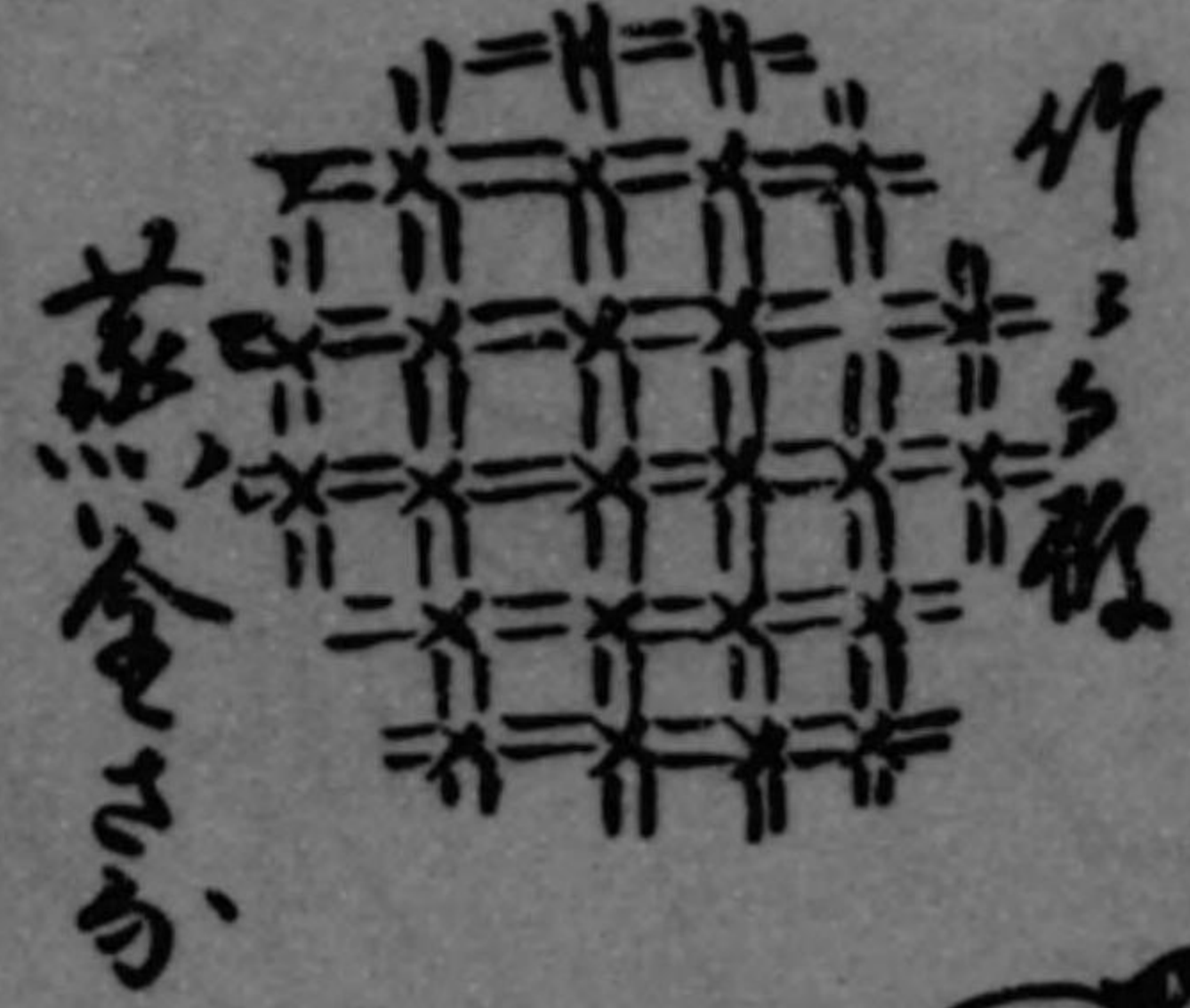
代錢五拾貳文 御國直段



つぼ
鍋

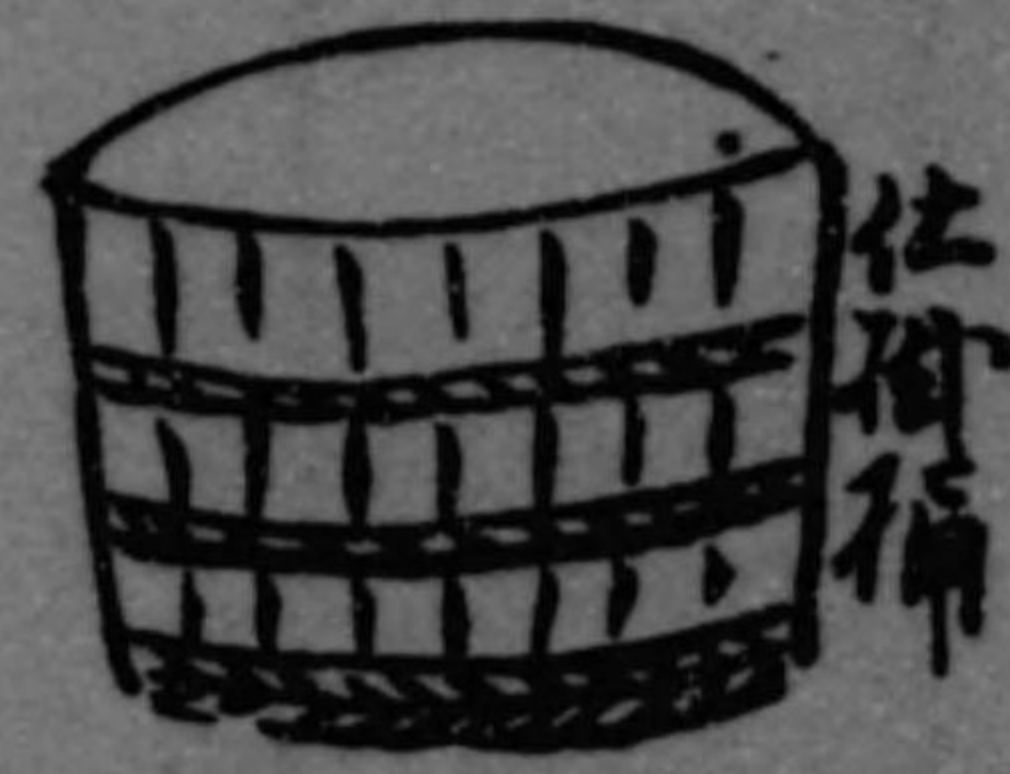


風袋桶



竹
ござ敷

草
ござ敷



仕
御桶



桶
蓋
の



竹細袋は袋敷の用
に極大の成物と成り
糸切しとるを
すてしとるを
てしとるを

樵夫一人一木百斤重
百斤重一木



おかしき物なら
ゆるやかに
おこし強き
よ、腕と
かき木の
海り切利

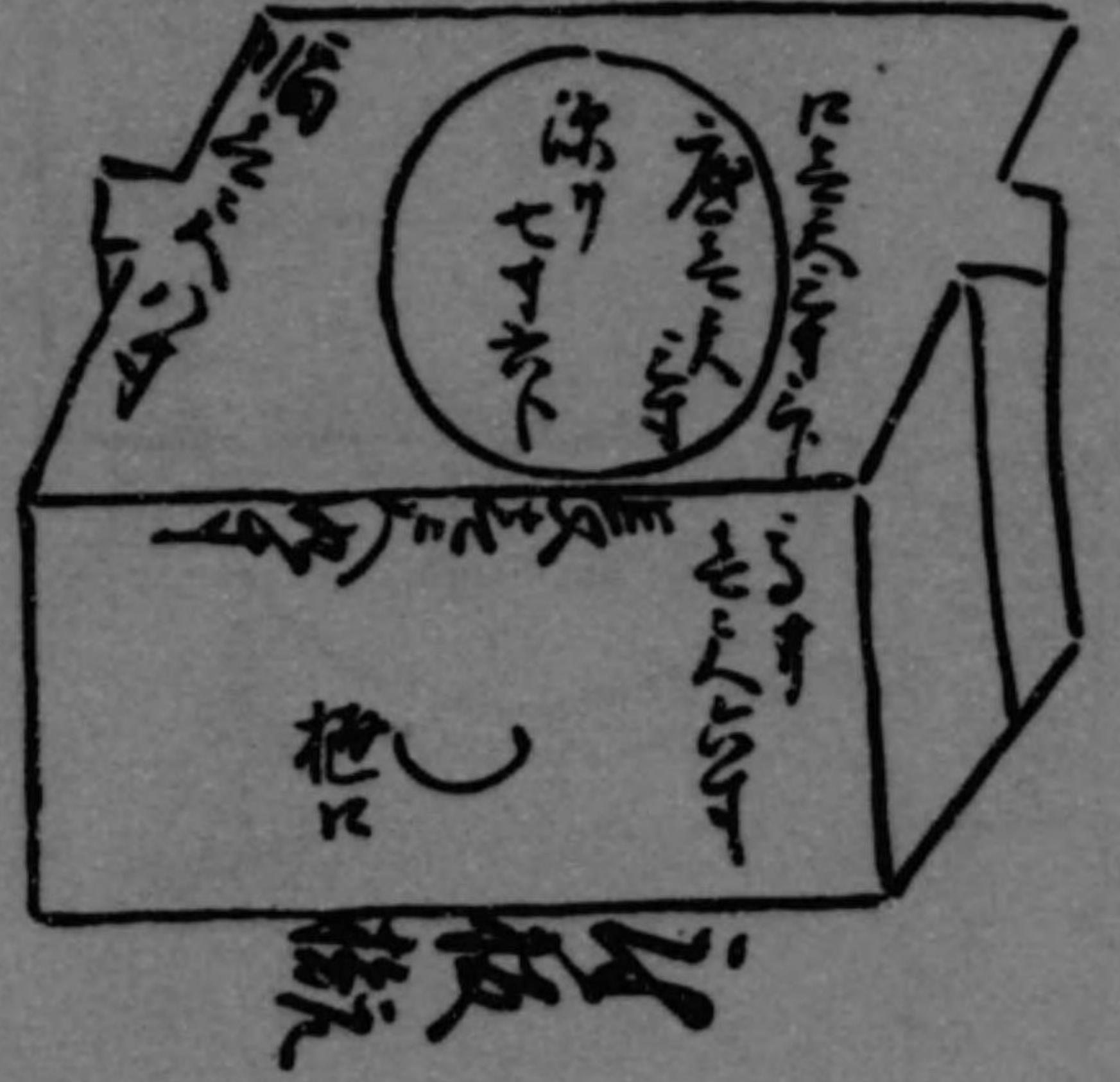
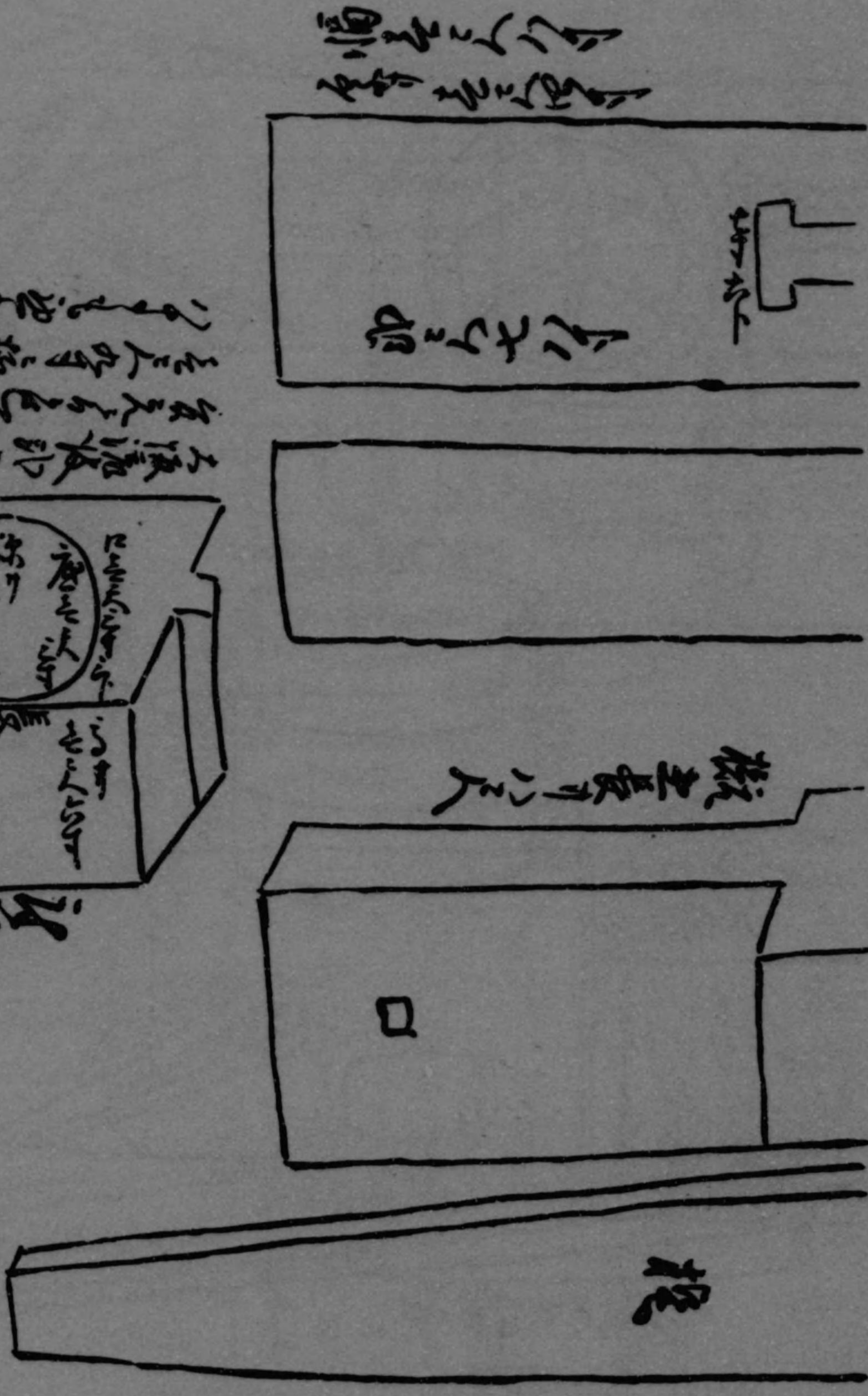
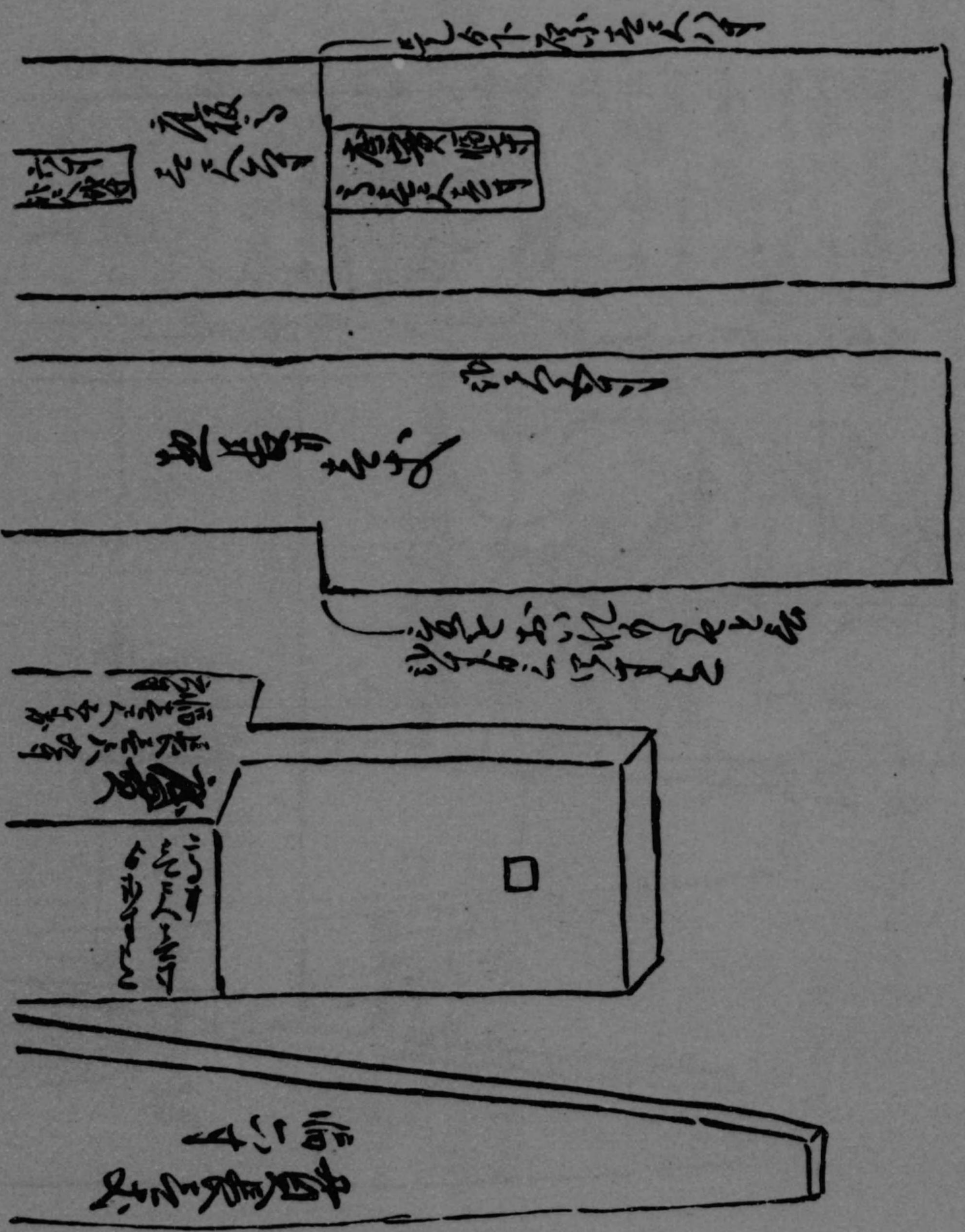
は、腰に
おかしき
物なら

おかしき
物なら

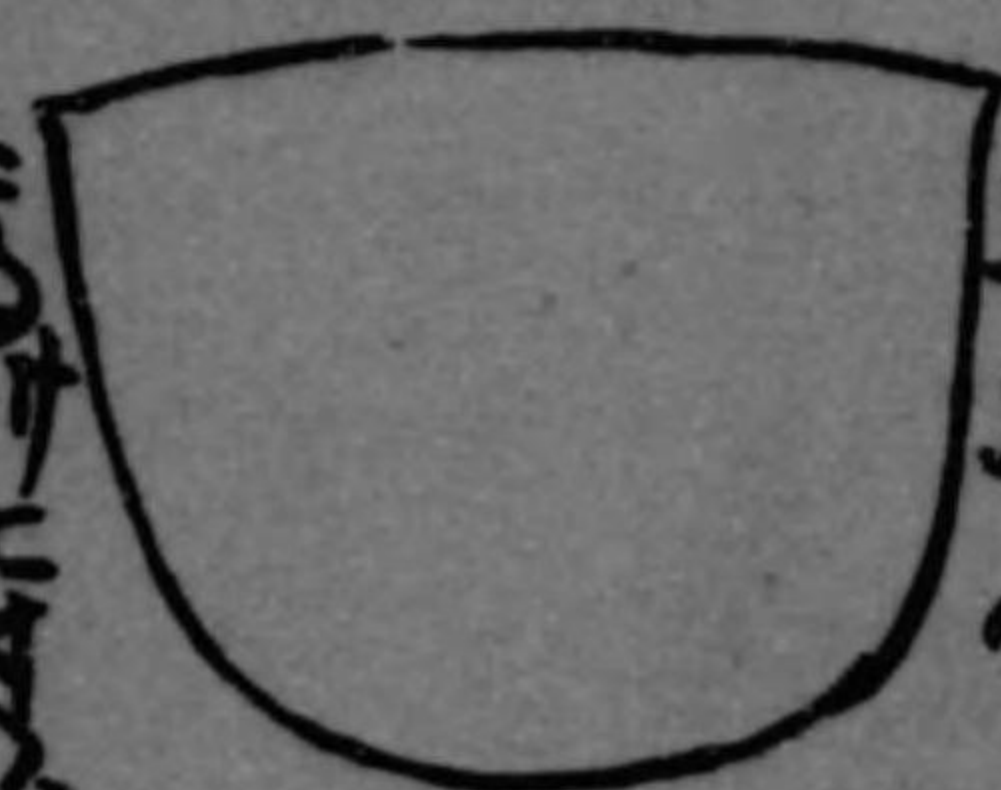
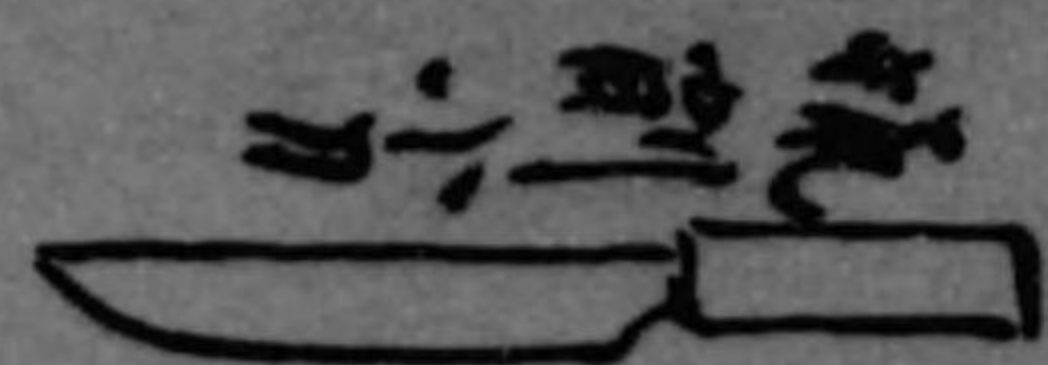
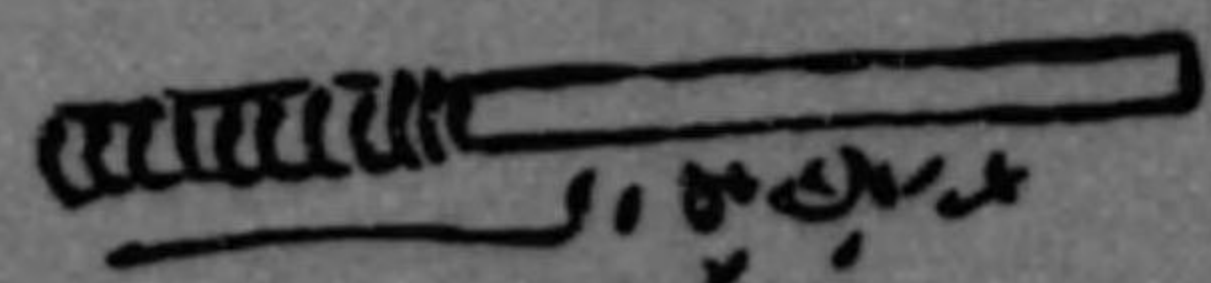
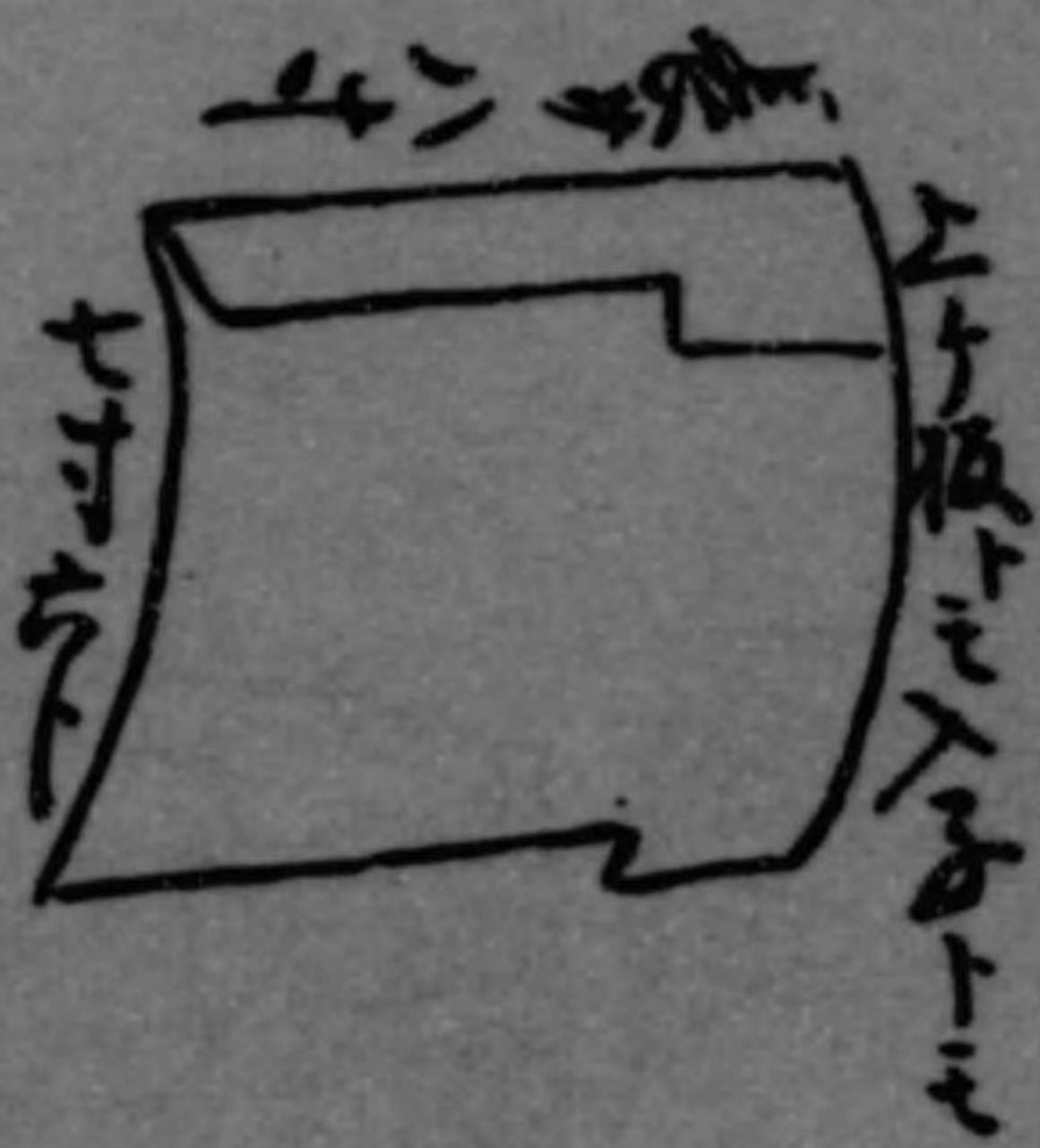
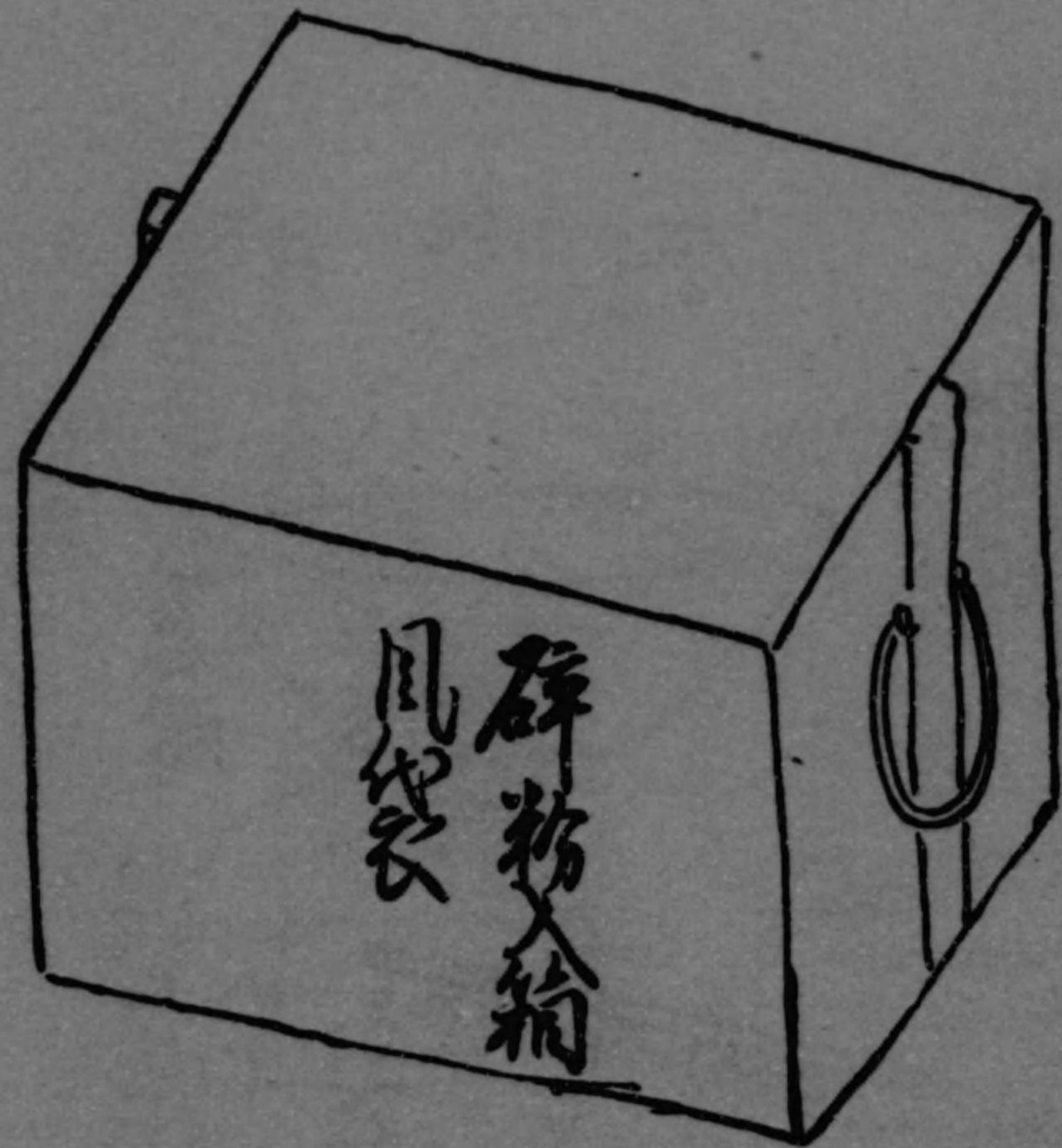
つぎは
おかしき
物なら
ゆるやかに
おこし強き
よ、腕と
かき木の
海り切利



おかしき
物なら



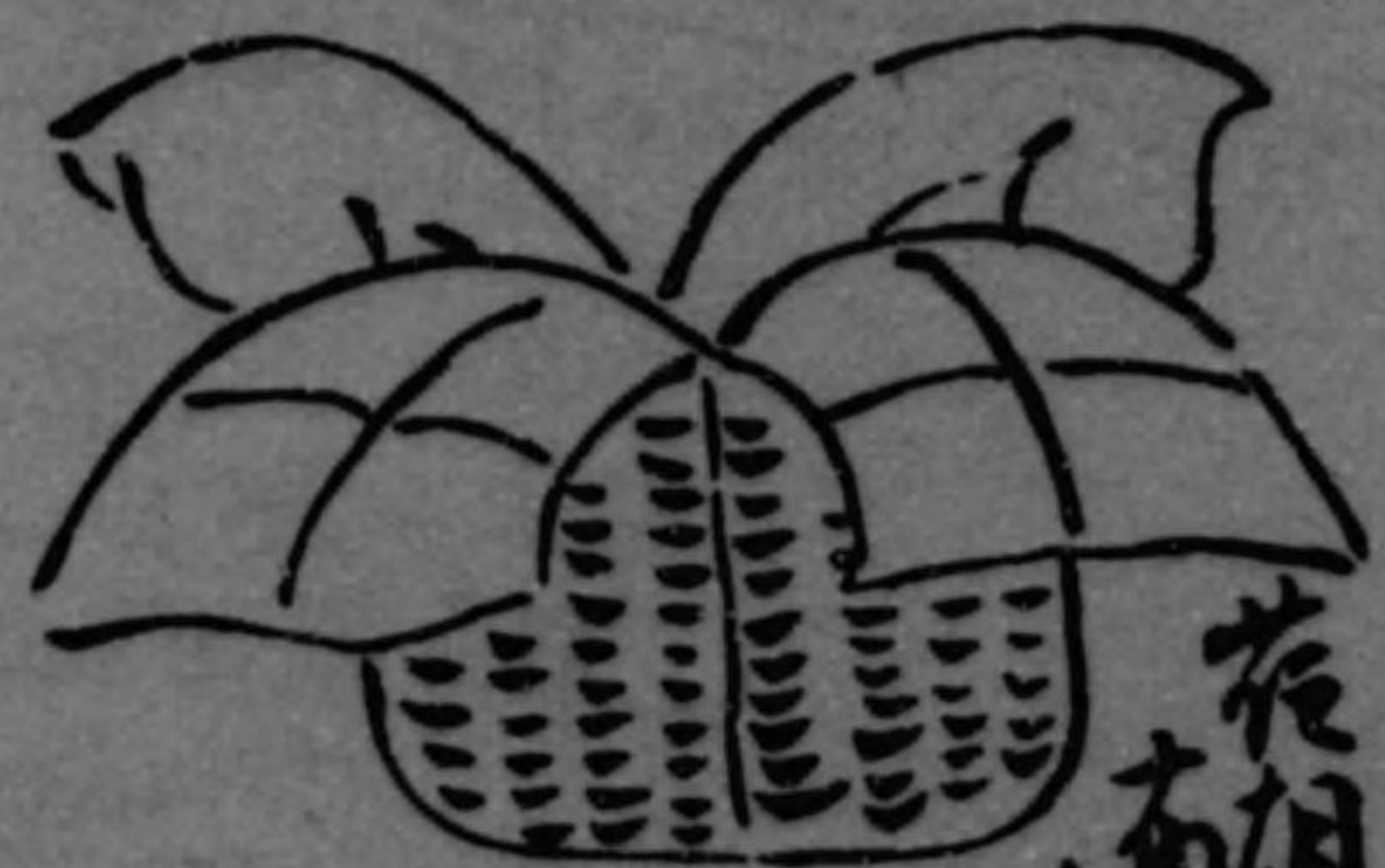
Handwritten notes in Japanese, possibly describing the dimensions or materials of the components shown in the drawings.



横切ハヤシ

正直石

他出... 校根... 隙... 変... 市

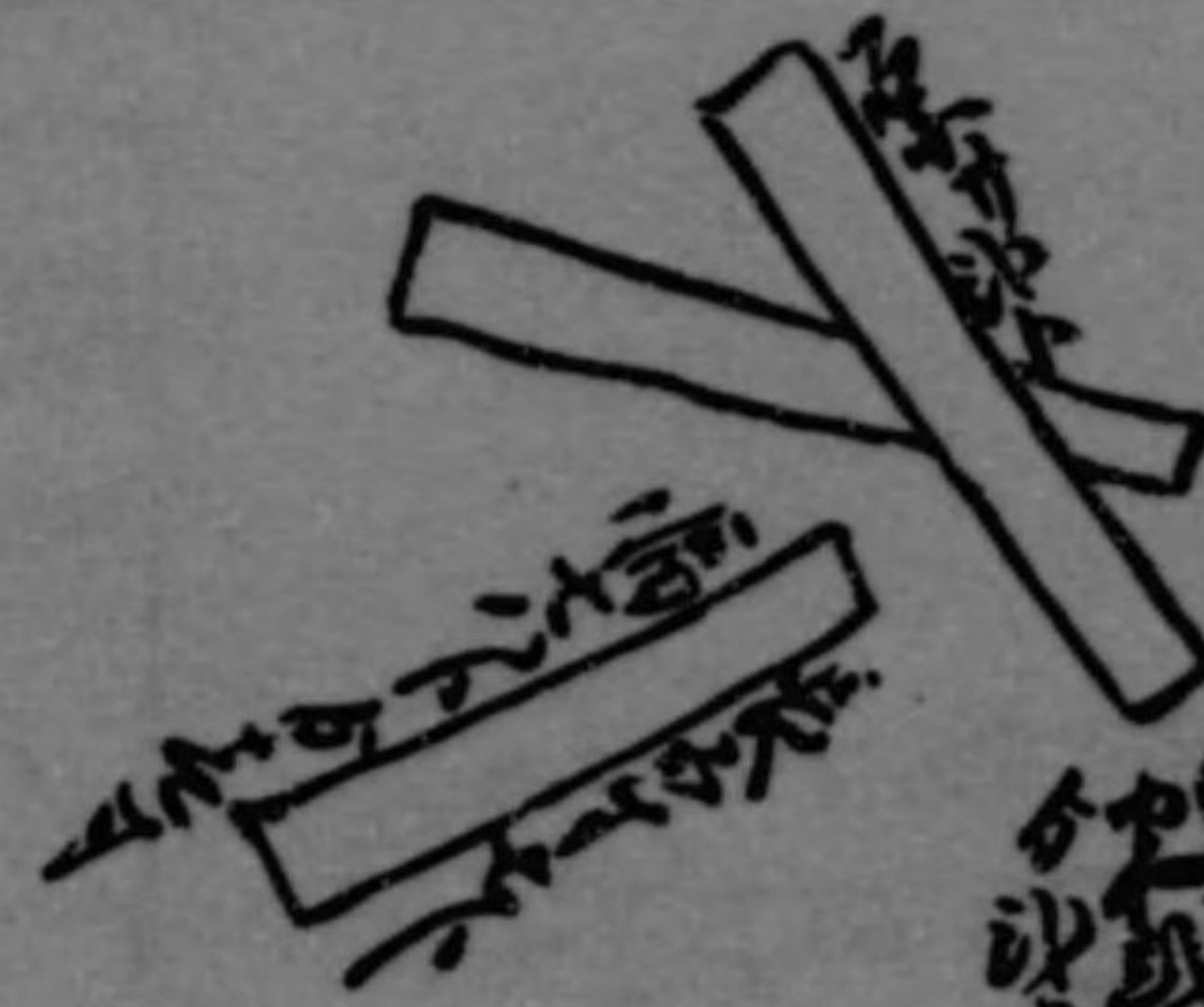


花胡袋

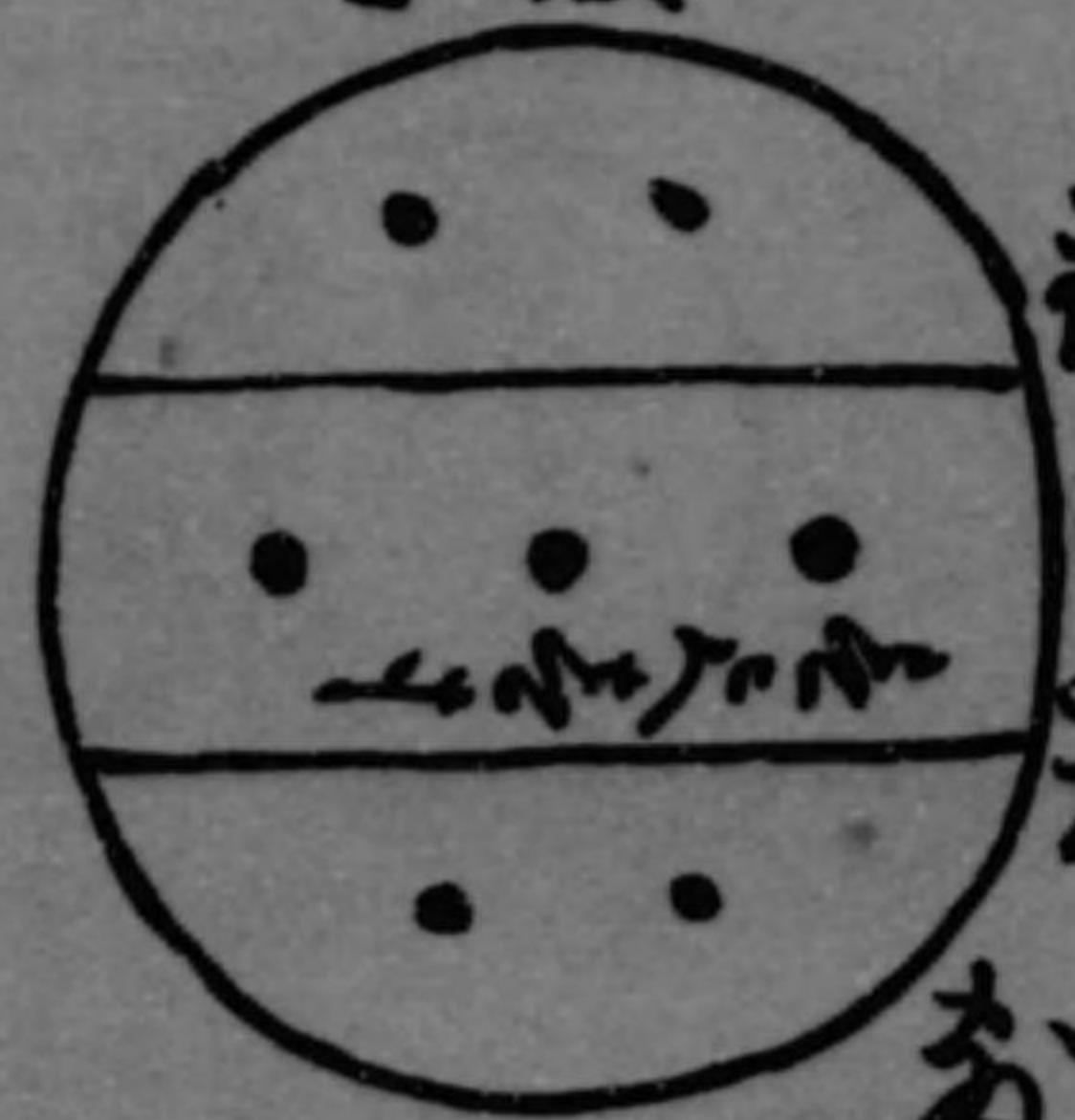
布... 七... 中...



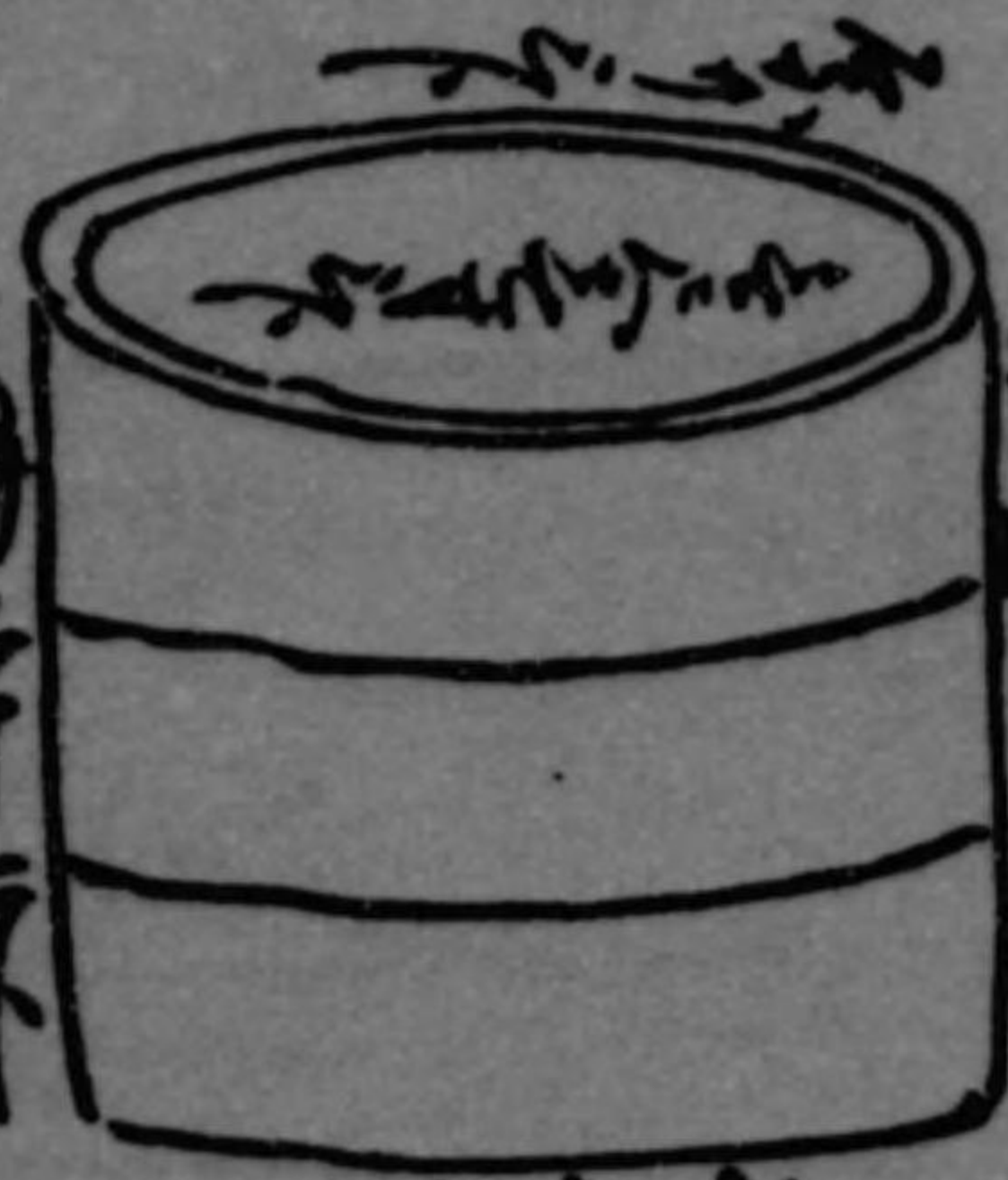
入... 根...



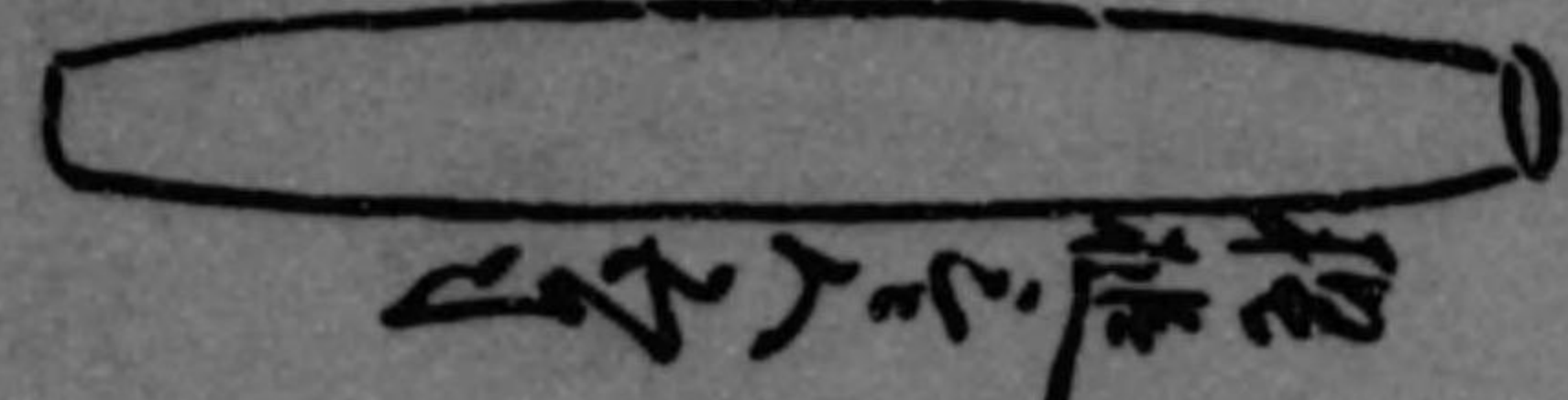
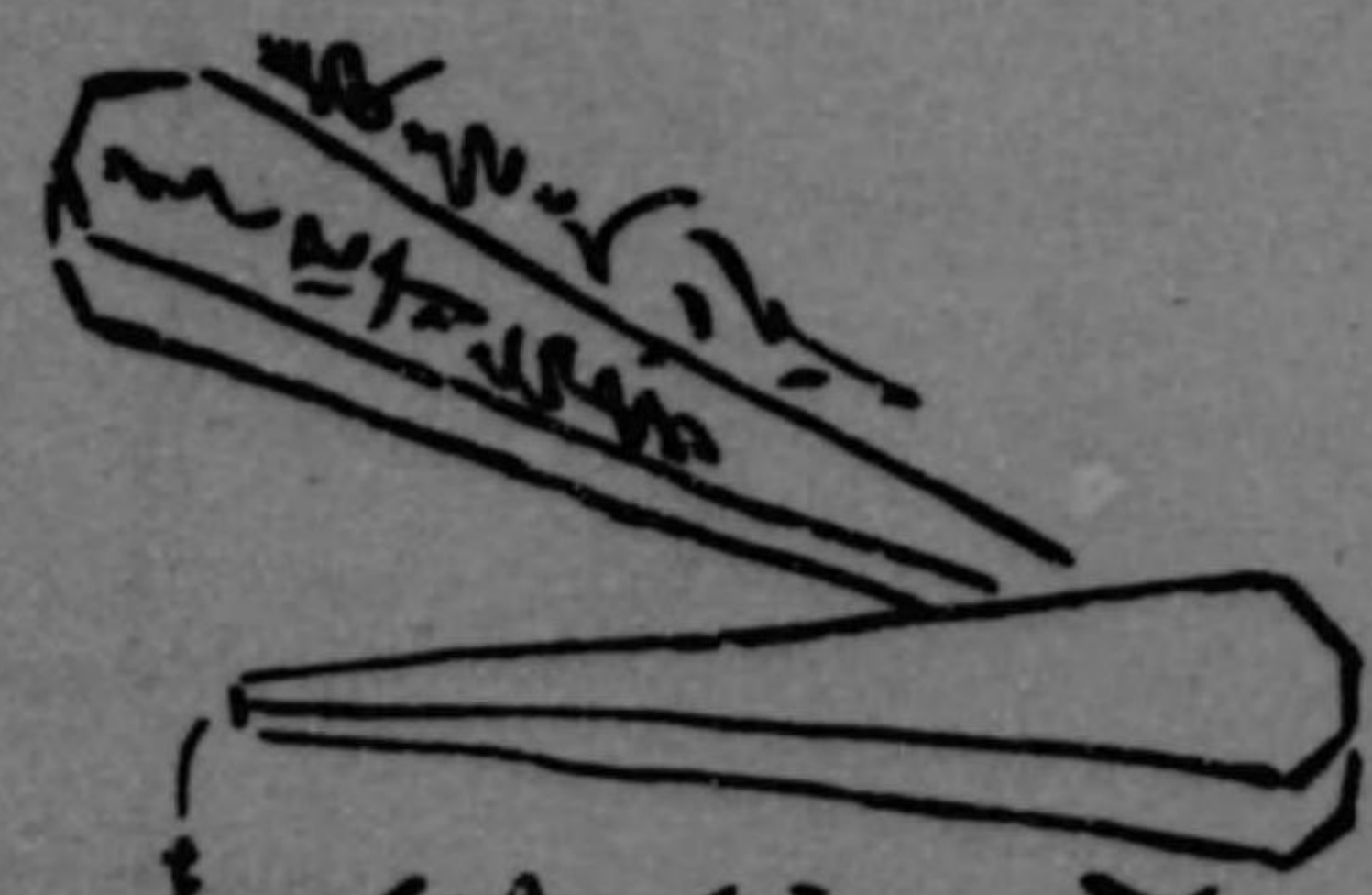
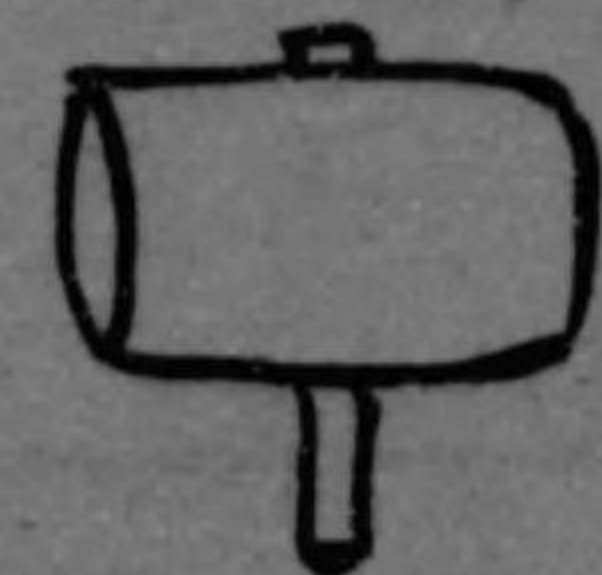
狭...



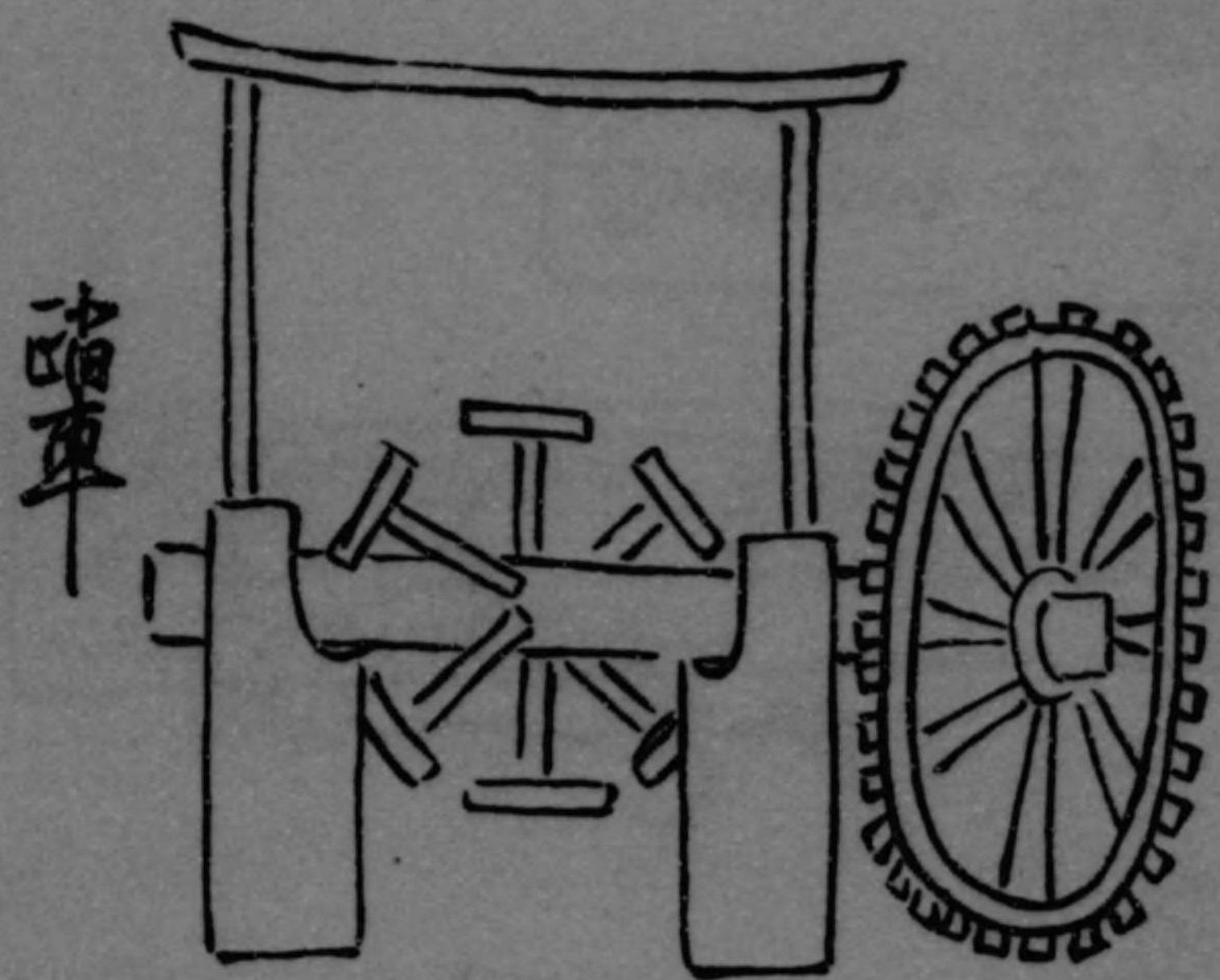
狭...



柄...



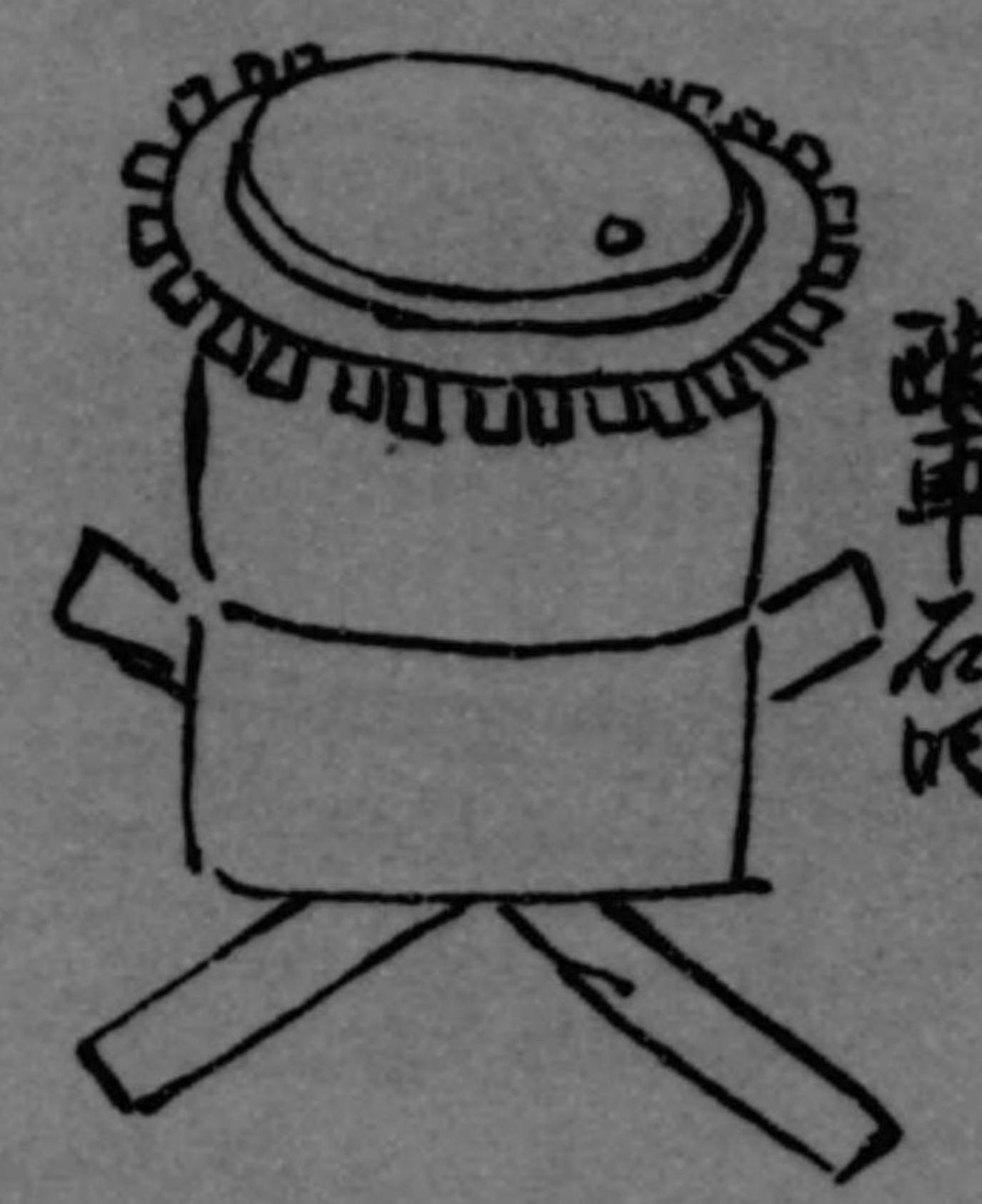
...



踏車

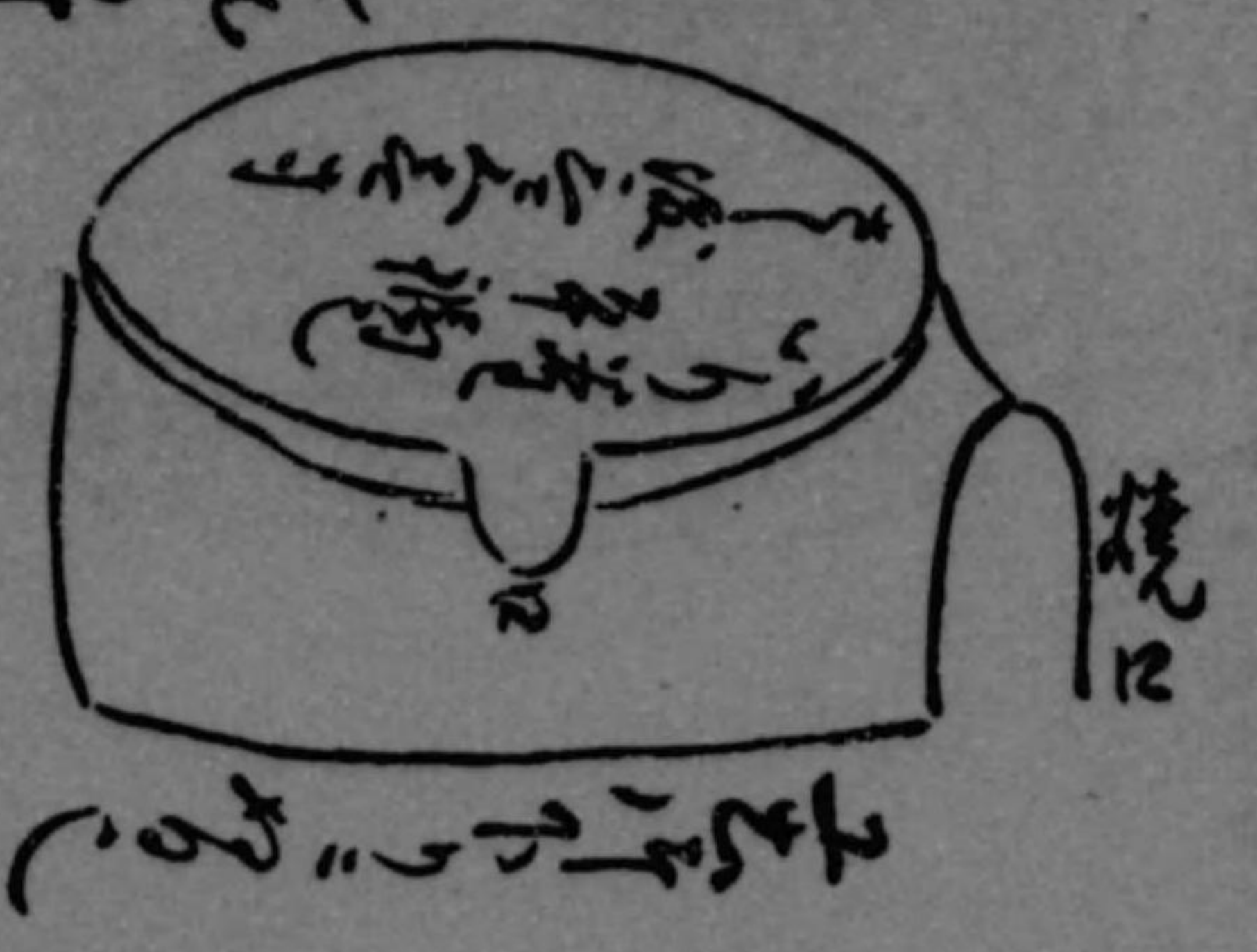


漆桶
ゆき

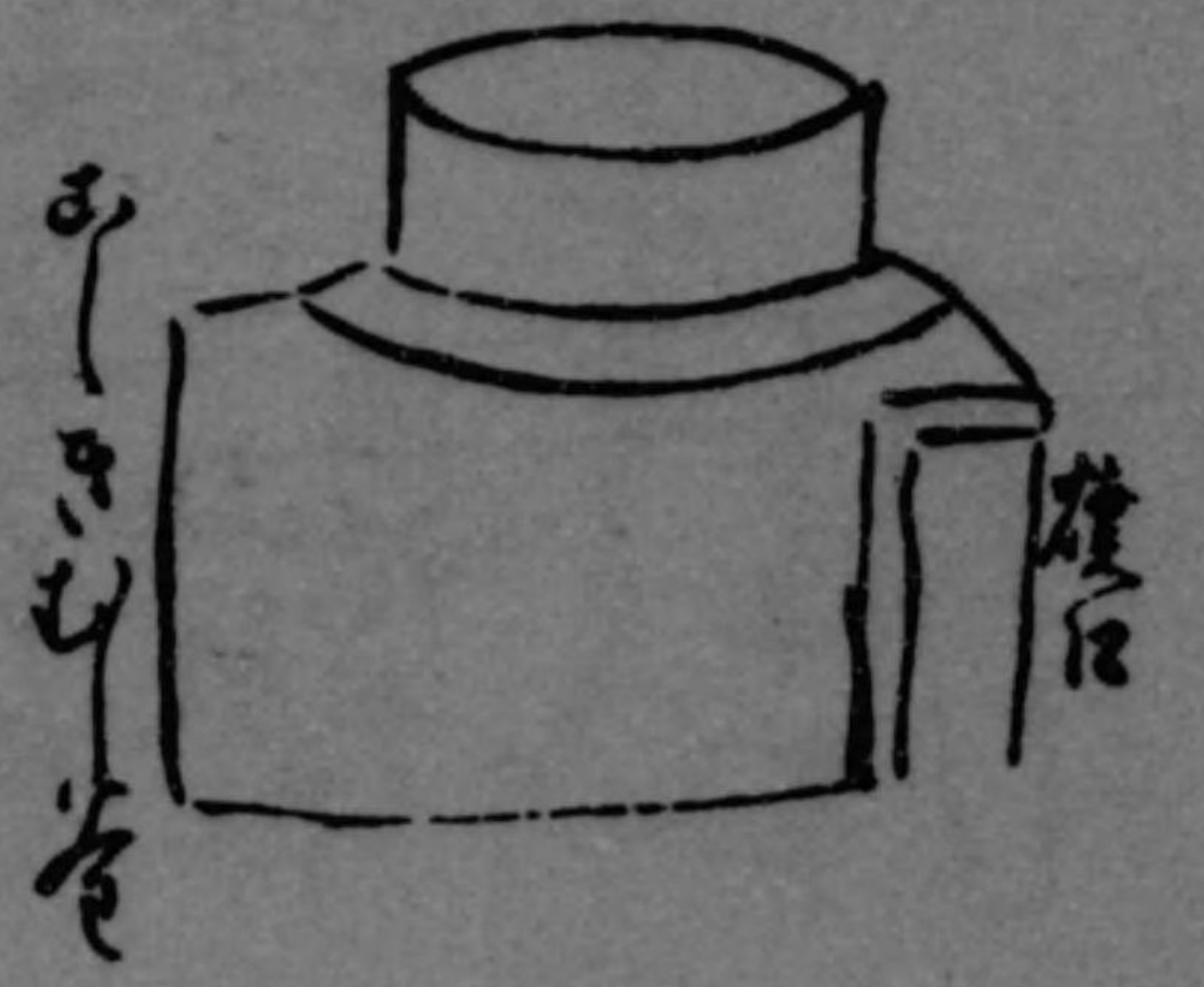


踏車石臼

手回しの踏車
は、水車に似て
水を回す。石臼
は、石を回して
穀物を砕く。

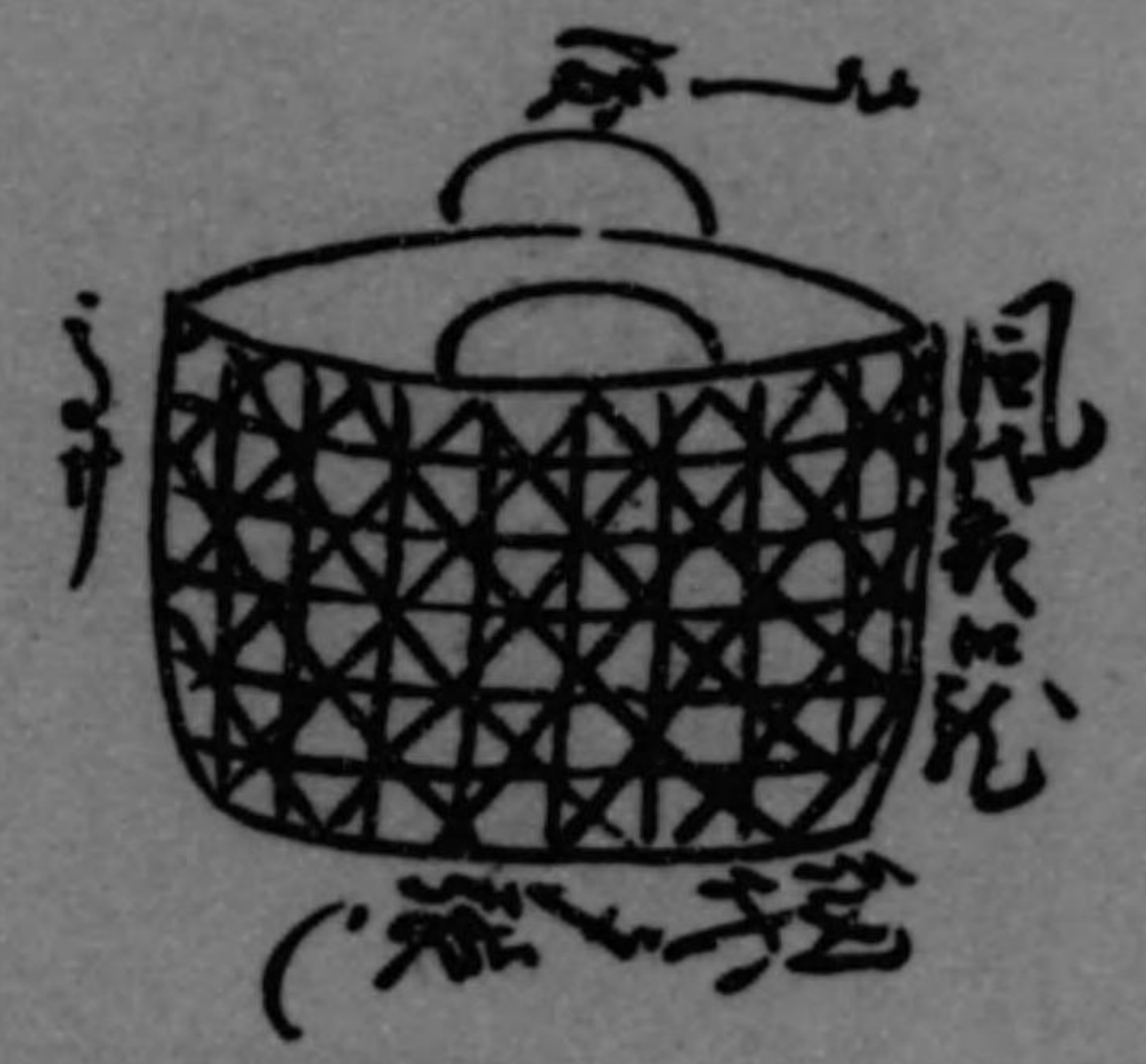


焼口

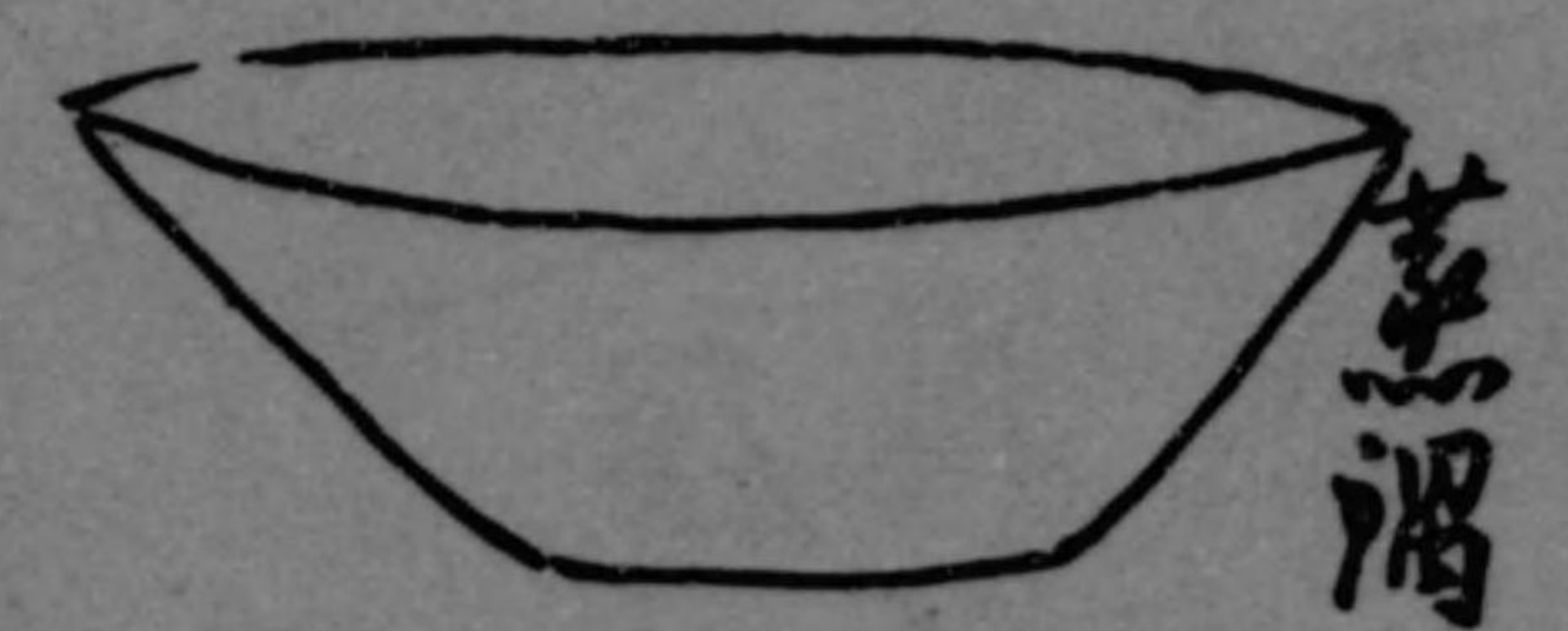


糠口

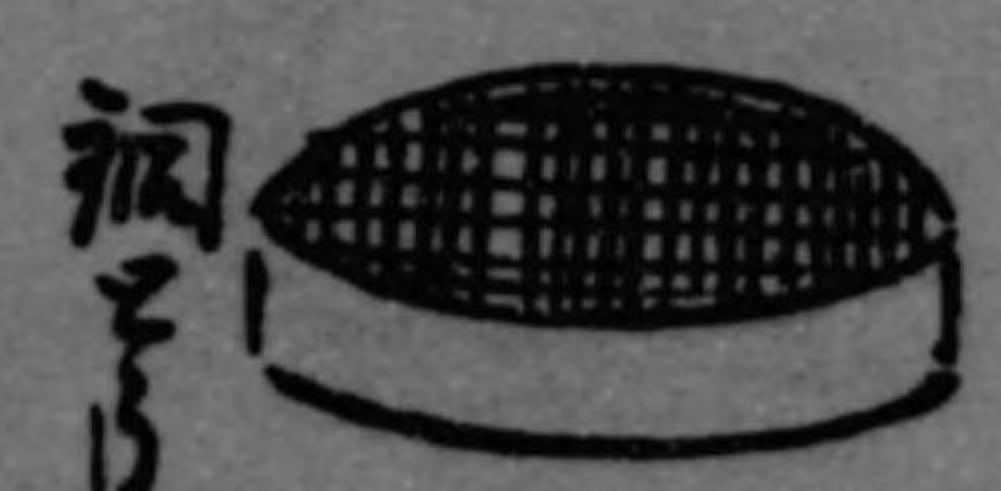
石臼



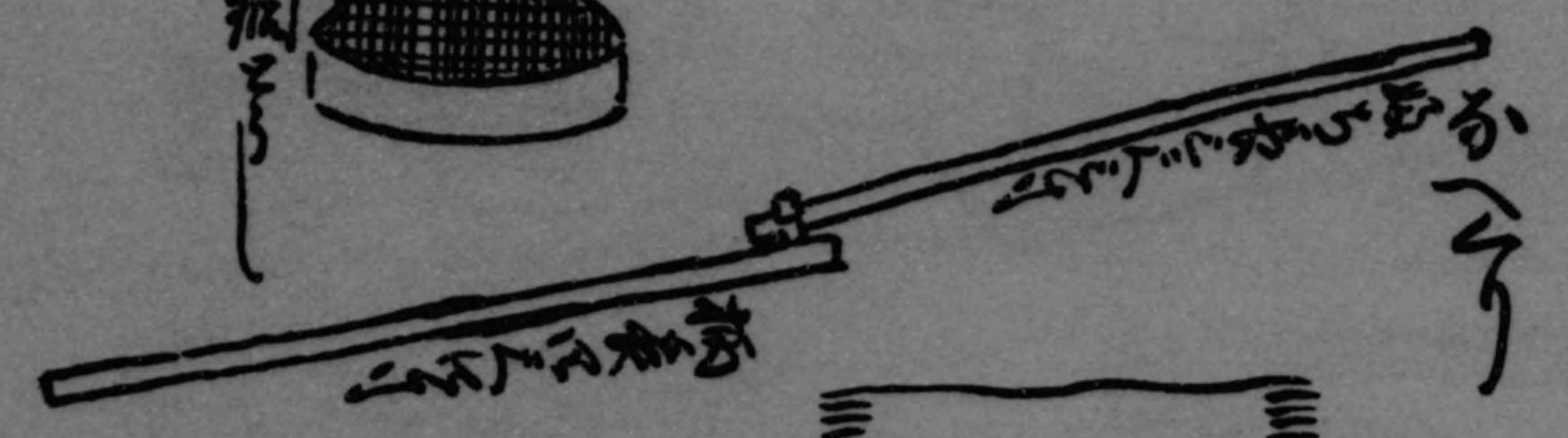
籠



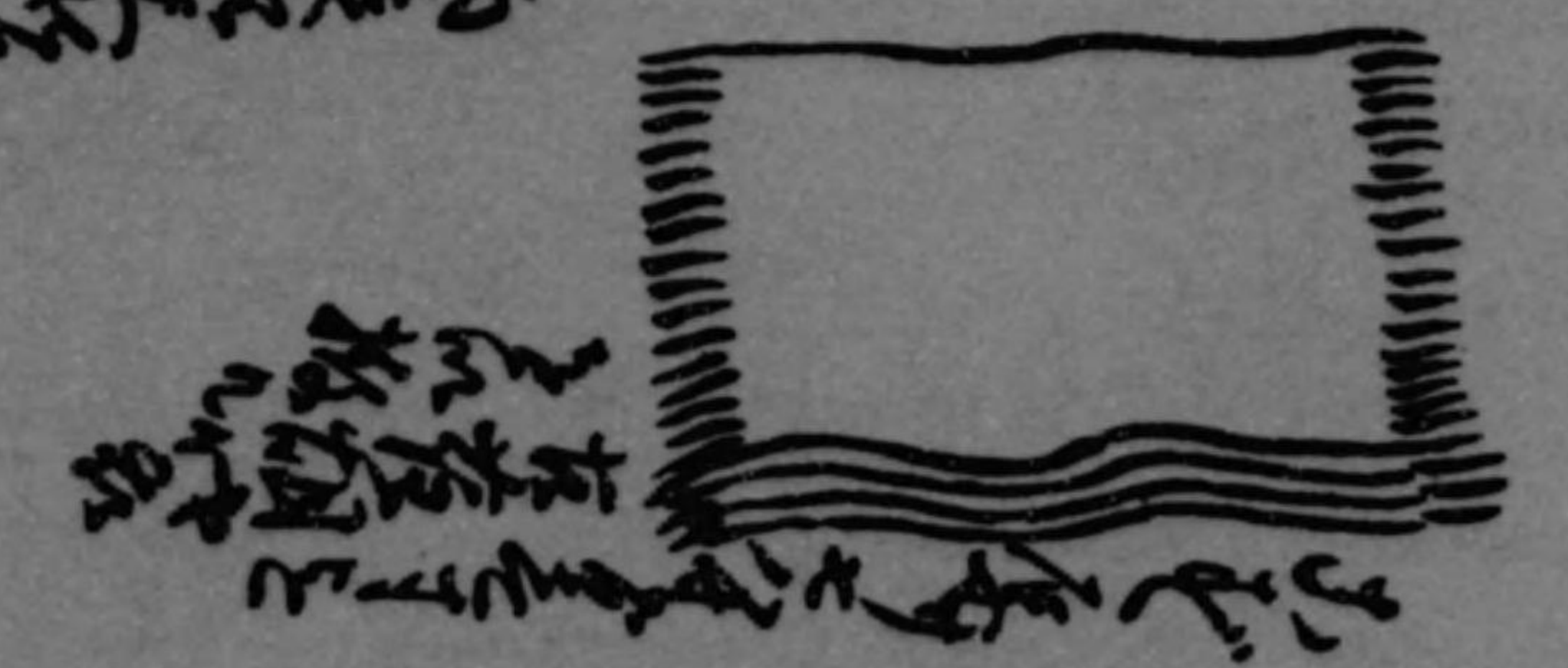
蒸溜



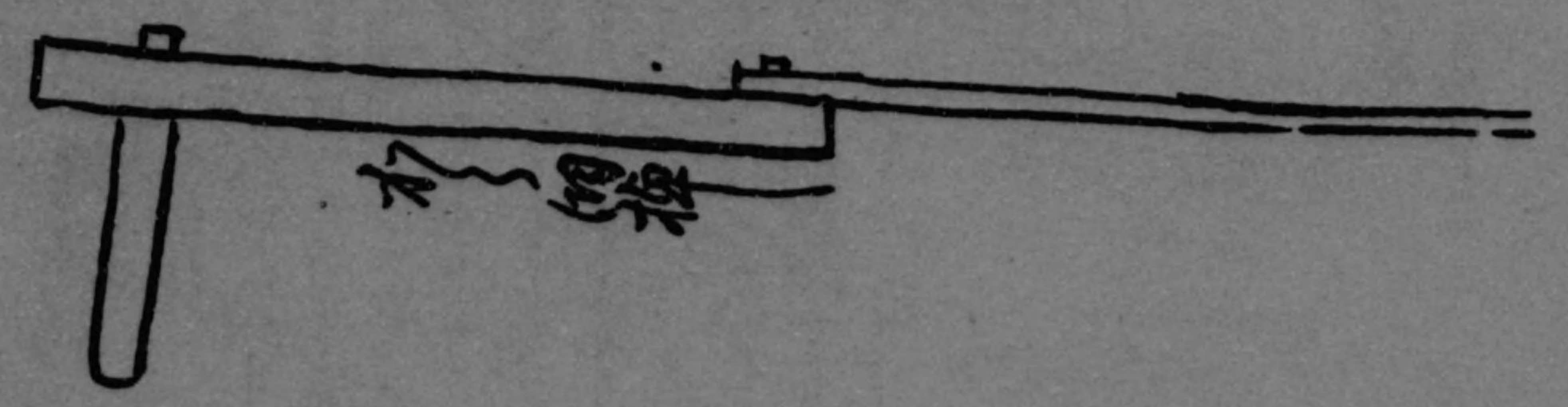
網



か

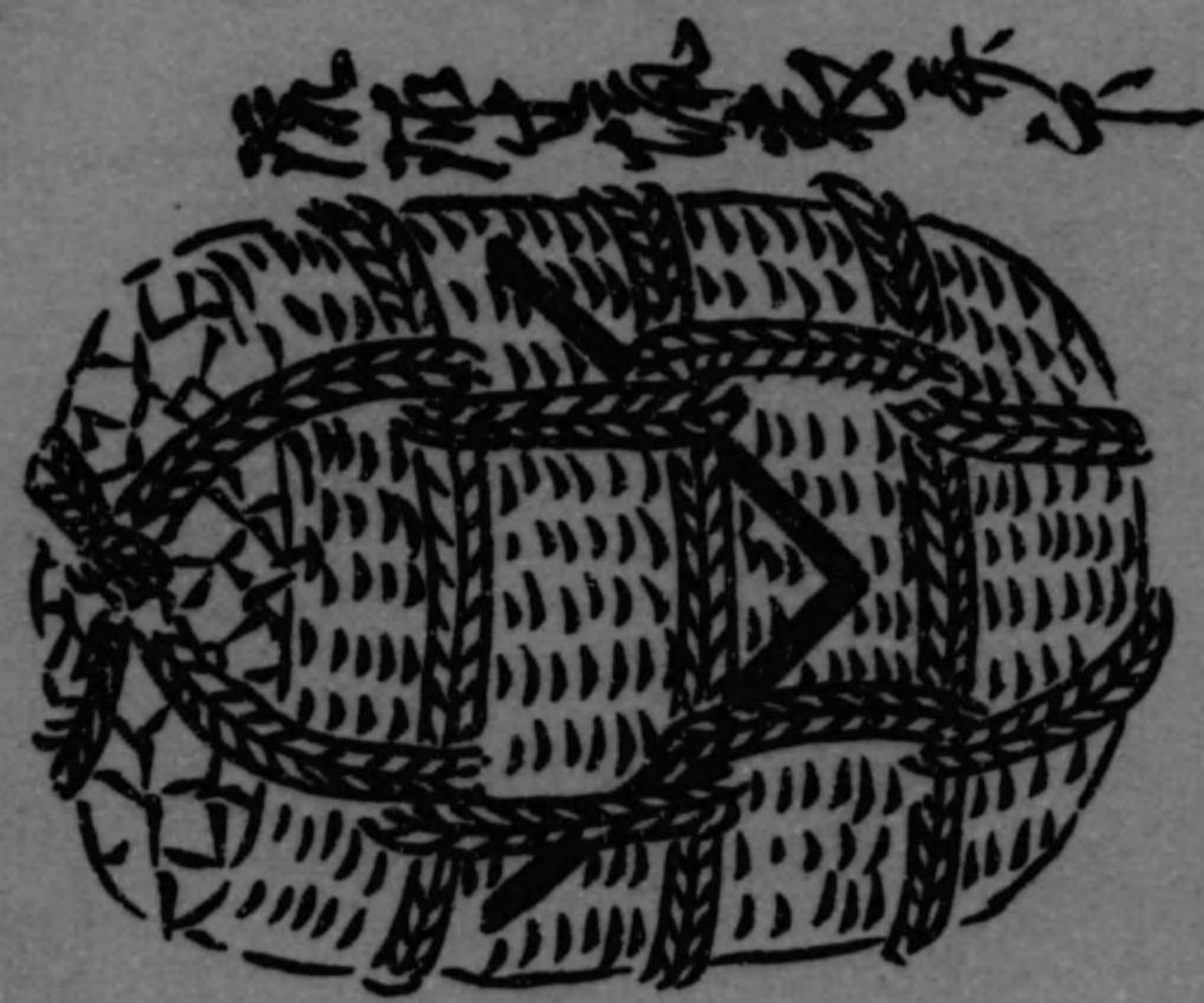
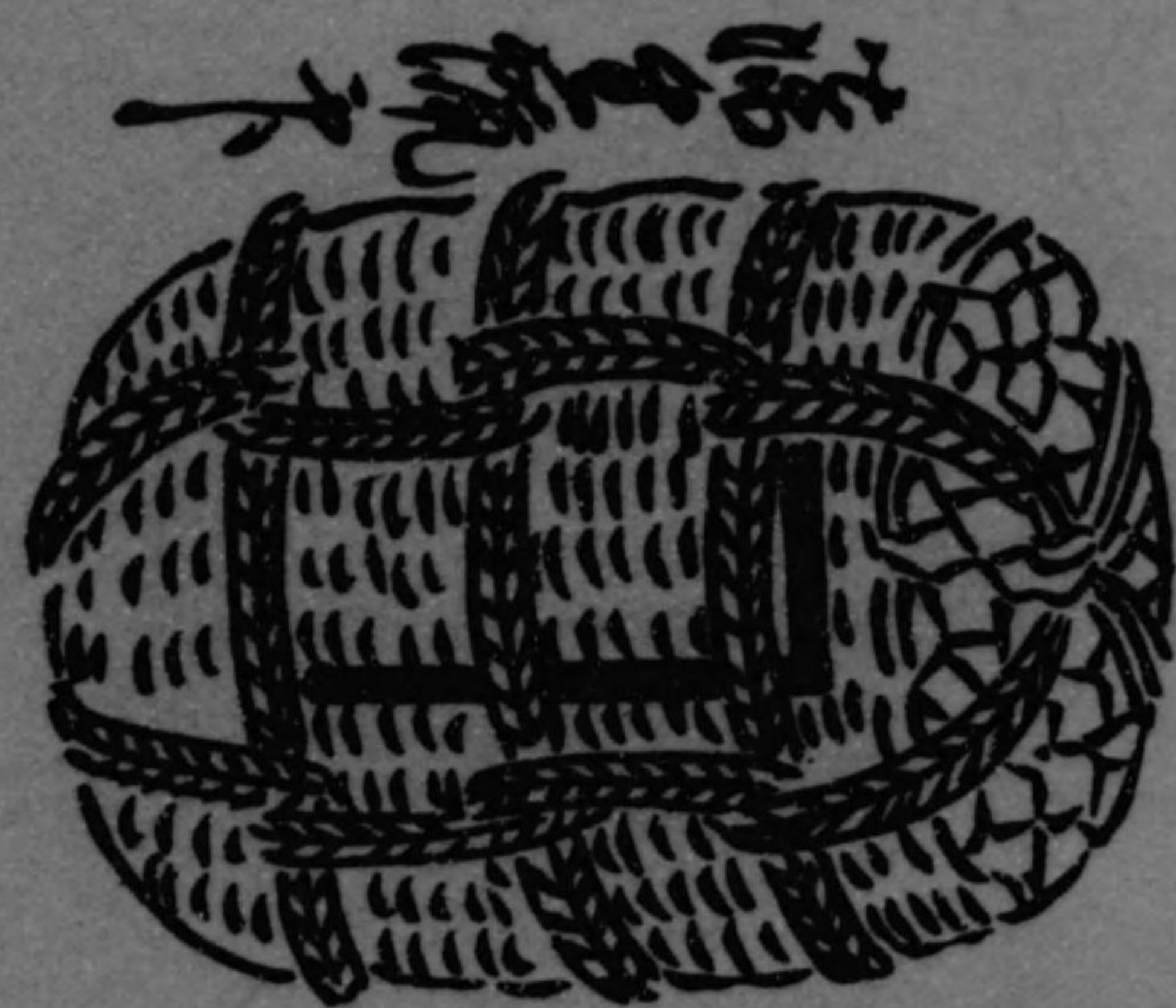
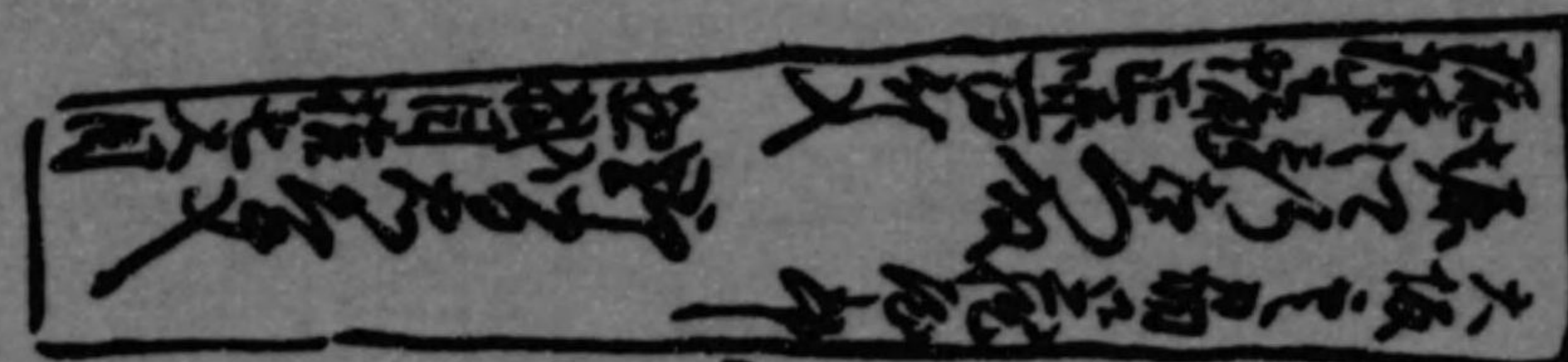
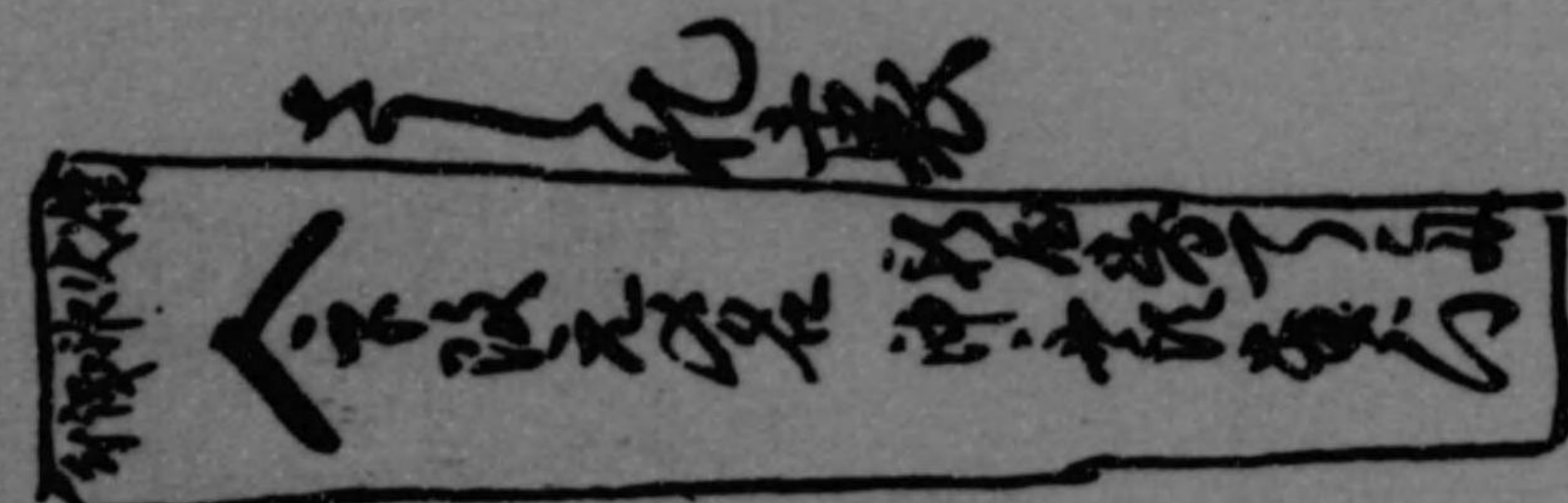


か



か

木實方秘傳書



表ハ向ハ身ハ表ハ
 色ハ向ハ身ハ
 市ハ向ハ身ハ
 後ハ向ハ身ハ
 向ハ向ハ身ハ
 後ハ向ハ身ハ

十八、定渡小吏、久治、小八、^(兼)斤梁取被仰付事

附り、兩人御役所筋日々見繕事

一 斤量掛廻しの事大切成物故、久治、小八に被仰付、毎日の打上蠟掛廻し仕、尤横山、金津兩人之内立合相改、帳面ニ印シ元判取置、此帳面を以、元方村岡、加納へ相渡時は横山、金津の内掛廻し仕、元判壹人充立合申事也、村岡、加納受取以而帳面印、是又元判取置、横山、金津方帳面は此時消判取事也、扱大坂御登又は町拂之時ニ至り、村岡、加納之内掛廻し仕、元判立合斤目相改、出高帳面印、元判取置御勘定仕ル、扱又秋ニ至り蠟實御買上之節は久治、小八^(隔カ)格目に掛廻し仕、在町共ニ大勢入込ニ而不審者多し、此斤目の節は至而大切成る故、兩人か心底を御見込給ひて、年來斤梁取被仰付、郷方御買上場所へも兩人之内壹人充被遣、蠟實請取場へは横山、金津、原、石原之内壹人、元判壹人相詰、實の上下を改直段仕ル事也、其日の實高御藏入帳面ニ印、元判を致シ、翌年碎キのものへ相渡時、又斤目相改申事也、斤梁取久治、小八之内壹人充是を掛廻し仕、横山、金津立合出高帳面ニ印、扱又蠟打場へ蠟打、碎キ夫共ニ毎日貳拾三四人充罷出、夫々の受取仕事有之、大勢の出入下のもの、儀ニ以得は、紛敷事も可有哉と久治、小八之内壹人充役所詰を仕、其日の仕廻に心をくはり取引仕、翌日は野間氏の御宅に相詰、昨日之役所之取引ありの儘に御物語申上ル年來如此也、久治、

小八様に心切に相勤いもの追々見習ひハ、又々能ものも出来可申歟、馬は乗人、ひとは遣イ人にも寄へきか

十九、植畑并苗拵様、繼木之次第

附り、見積りの事

一、はセ苗は能實の種を取、二三日も水にひたし、能々洗ひて一日二日目に干、扱畑を土拵こまかにしてうへを平し、其上右之種を蒔ひ而上に厩こへ厚く置也、蒔時分春々秋迄之内いつニ而もよし、能はへるもの也、秋蒔し得は冬ニ至リ雪覆いたす、覆なき時は雪にくさる事有、扱はへ上ると追々草を取、下モこやし度々いたすへし、苗の内にすくりての(伸)ひつよきはまぬき捨へし男木也、扱開キ畑を拵、先芋作なといたし、夏作に粟稗などの様成物一ト作もいたし、随分篠芽をさり、右之苗を間七間或は十間程充置三本充可植、是は男木澤山なる故、女木を殘し男木は伐取ため也、能木は苗植々三年振に實成、然共初實成はとりて捨へし、餘り早ク實成し得は木生立兼るなり、追々下を作る事專一なり、おこたる時は篠芽はへ出土地やせる故、植木はやく紅葉して木生立ハろし、はセ木はさし木、繼木能つくもの、由御聞およひ、村々ニ而さし木、繼木をおしへ、野間氏もミツカラ自手をつくし是をこゝろミ給ふとゞへとも、一ツとして役に立事なし、所により百本に壹本も繼木はつく事もあり、中くは

か、敷事なし、さし木は決スエテ而つかず、植替も大木を植ひニは、中分を伐りて植ひ得は早く生立なり、然共三四年も経されは實成事なし、能キ畑ニは苗植々仕立ルよし、夫も風當り強土手、或は鹿なと喰ひ荒しの場所は大木植付よし、山畑などの土地惡敷畑は、植木の葉大ふりにして黒ミ強キ苗を植へし、土地能畑へは葉小振にして赤ミ有を植へし、植實色々替る事百色も有之物也、唯土地に相應するとせざるを能々かんかへへし、漆木は繼木ニ成もの也、是も功者不功者有之、苗は漆木の能實成木の根をさらへ置し得は芽出しするなり、是を立置二三年振に植付申なり、ヶ様にいたし苗は男木壹本出来ず皆實成木也、種を蒔苗を拵し得は多く男木ニ成惡布、扱又見積は六月土用に入三日過か見積よし、植は土用過かよし、先植木壹貫目位といふは中條壹ツと見積也、夫々三貫目位は三ツと見る、然とも三メ目位迄は見よし、夫々上に至り五貫目七貫目或は拾貫目と見る時は、高キ上を見る事なれば小木の積りニ而はよハし、八貫目位之實度々落し目ためし可然、大概木のか(拾好)つかふを以見る也、然共能實成木と實落しとに心得有之、はセ畑見積に木數有之時は、大概木數何程、實平し何程と大辻を見て、夫々壹本(追放)に貫目を改、惣高何ほとと極ル也、若はセ畑持主上納を不得受し時は、つ(追放)いほ(追放)ういたしゆ也、此時又壹本宛貫目改、此木は五百匁、此木は壹貫目或は貳貫目、三貫目と夫々に付札をいたし置、何れ成とも壹本おとしゆ様はセ持主申付ル、尤三拾本位か餘分之場所は貳本も落しゆ成、はセ持主見廻り此木をと申出ル時はを落し、たとへば壹貫目付札に壹貫貳百匁も有

之時は、残り實高に割付申也、又見積壹貫之木に九百々も有之時は、惣高に割合免しを遣ス也、生實落し得は干而へリ故、四割引又は貳割三割と引事也、是は其木の實の模様ニよるへし、此詰合はいまた落さざる内に何割引と定る事也、漆實は琉球實より三割見おとしてよし、實かるきもの也、惣して見積は御成加故至而大切之事ニ得は、隨分心をつくし後の達人能々極メ給へ、御立山之内開キ又は野山を開キ煙は五つ上納、腰林を開キ煙は三つ上納なり、唯今生蠟直段下直なる故、はセ實漆實共ニ壹貫目七拾五六文ハ八拾文位ニ而、半分上納の場所は榎持主共迷惑成、實取手間、運送、彼是物入指引得は漸々壹貫目三拾文位之手取ニ而、自然にはセ煙惡布相成へし、尤榎煙は御年貢なし作取とは申なから、こやし等之物入、夏作之分は野うてニ成て出來兼、然共作付無之時は、はセ木やせて實ならず、仍而此節之見積は一入心遣成、強ク見積て一たん利益ありといふ共、はセ煙荒し様ニ成ては後實成惡布、御爲になるまじき也、實壹貫目七拾文ハ八拾文ニ至らざる時は、上ハ四歩、下ハ六歩之見積可然歟、壹貫目百文ハ外ニ相成時は、御定法之半分見積ハ而も下の難儀ニ不相成、榎煙も荒レましく哉、是ハ、兼而強ク見積の人の心得成、兼而目弱ク見積人は、隨分半分の上納と心得へし、腰林開キは三つ上納なる故、少々強ク見積てよし、毎年目ためしに、度々實を落しめてこゝろミ給ふへし、不斷見積と申なから見おとる事多し、我にしたしき者の見積は強ク見積、我に惡む人の見積は弱ク見積へし、是は心の見積の工傳也、強キは弱く、よハきはつよく成もの也、ゆめく油斷し

給ふへからず、扱又はセ木にも名木あり、意宇郡大庭村に八左衛門と申百姓之庭に、五拾年計の榎木有之、能實成ハ時は五拾貫目、實少キ時は三拾貫目充、毎年實成ハ而調法とす、外ニも毎年三拾貫位實成ハはセ木は所々ニ有之事也、漆木も又如此、東忌部村藤右衛門と申者之家の脇に、漆實三拾貫目充毎年實成ハ木有之、其外飯石郡などニも多ク有之事也、追々はセ煙にもケ様之木生立へし、常に是等の木見覺へ給ふへし

廿、御買上場所之事

附リ、藏敷、舟賃、丁持定りの次第

一 大原郡加茂町、泉屋甚三郎方ニ而御買上有之

入料

藏敷 實拾貫ニ付七文充

丁持 同拾貫ニ付三文充

舟賃 舟壹艘ニ實貳百五拾貫目積ニ下庄原村迄六百五拾文充

此舟積寶曆十一巳秋ハ相止ニ成、宍道村下ケに被仰付、依之加茂町に而駄賃錢詰合、壹駄三拾

ノ貫(積カ)ニ六拾文宛之議定に相成、道のりほか町々安道村迄貳里有之、仍而かも町之丁持賃も相止に相成、藏敷斗被下之議定

一 神門郡石塚村高瀬屋惣右衛門方御買上

入料

藏敷 實三拾貫目壹駄八文充

舟賃

舟壹艘ニ付實三百五拾貫積ニノ石塚村々下庄原村迄五百文充

一 同郡乙立村、年寄其右衛門方ニ而御買上

入料

藏敷 實三拾貫目壹駄八文充

丁持

同壹駄ニ付四文充

舟賃

乙立村々下塩冶迄拾ノ目ニ付拾八文充

丁持

古志川々下塩冶町迄拾ノ目ニ付八文宛
下塩冶町々渡橋村舟元迄八文充

舟賃

渡橋村菩提寺々石塚村迄、實三百五拾貫目積ニノ貳百文充

同斷

石塚村々下庄原村迄、實三百五拾ノ目積ニノ五百文宛
藏敷は壹駄八文宛

一 同郡久村ニ而柳屋利右衛門御買上

入料

藏敷 實拾貫目ニ付七文充

丁持

同拾ノ目ニ付貳文充

舟賃

實拾ノ目ニ付拾文充久村々荒木村川方迄

同斷

川方々石塚村迄舟賃
實三百五拾ノ目積ニノ四百五拾文

藏敷

石塚村ニ而三拾貫ノ壹駄ニ付八文充

舟賃

石塚村々下庄原村迄
實三百五拾貫ノ積ニノ五百文

一 飯石郡栗谷村、兵五郎方ニ而御買上

本實方秘傳書

入料

藏敷 實三拾貫匁壹駄八文充

丁持 實三拾貫匁壹駄四文充

舟賃 實百貫匁積壹艘ニノ粟谷村ノ
下庄原村迄四百文充

一 仁多郡北原村、庄屋久右衛門方御買上

入料

藏敷 實三拾貫目壹駄七文充

駄賃 北原村ノ大原郡西日登村迄
實拾貫目ニ付五拾文充

藏敷 西日登ニ而實三拾貫匁壹駄八文宛

丁持 西日登ニ而實三拾匁壹駄四文充

舟賃 西日登ノ下庄原村迄舟賃
實拾匁匁ニ付四拾文充

一 楯縫郡平田町、目代與八郎方御買上

入料

藏敷 實拾匁匁ニ付八文充

舟賃 平田村ノ松江新や灘藏迄
四拾匁目壹駄ニシテ四拾五文充

一 出雲郡下庄原村、松葉や徳右衛門方御買上

(入料脱カ)

藏敷 實三拾貫目壹駄ニ付拾貳文充

丁持 右同斷 水上、灘下ケ共ニ四文

舟賃 右同斷 下庄原ノ松江新屋傳右衛門迄四拾五文充

廿一、御手船初る事

一 生蠟大坂の御登セ有之ニは、廻船之積合にして被遣ハ處、拾六貫目壹箇ニ舟賃錢三百文充ニ而高直成リ、其上度々及難船御心遣不少ニ付、御手船に被成度思召ニ付、寶曆六子十月廿四日新屋壽一郎を御宅に招き、御船之趣向有之ハ間、其方世話致シ様被仰付、尤、大坂山本屋九右衛門へも此段申遣シ、御役所并山本屋、其方とも三軒之中(仲間)の分ニして、御舟方を別に仕立度由被仰付、依之翌年丑

ノ四月四日隱弱布施村彌五郎、隱岐屋彦兵衛世話焼ニ而貳百三拾石舟御調、代銀四貫貳百八拾五匁七分壹文、外ニ百匁爲御祝儀被下之、其外六百貳拾三匁五分貳厘御船繕御入用、御船の名住吉丸と御改、船方御役人ニは山田、横山被仰付、其後山田は大坂詰被仰付故勝田、横山勤之、新屋壽一郎舟、沖舟頭和七と申者相勤ル、追々海上無難に登り下りいたし處、和七儀は故有而御免、其後御船古ク相成ニ付而、寶曆十辰年御拂ニ相成、早束貳百五拾石積ニ新船於大坂出來、是又名を住吉丸と號ス、御船入料之儀は御舟方にくハシ、依之爰ニ略す、追々生蠟御登セ隨分無難、心の儘にして登り下り仕ル、沖舟頭幾右衛門、鱸取藤吉、水主三人勤之、生蠟運賃は壹箇ニ付錢三百文宛なり、御舟方に出ス、

廿二、三好屋喜兵衛木實方附ニ被仰付事

一 寛延元辰春迄御蠟燭之儀は、御用所留附中手掛リにて三好屋喜兵衛御蠟燭御用勤來ハ處、三月八日御用所より被仰渡ハハ、此度ハ御蠟燭之儀御細工所より元入を以、三好屋喜兵衛ハ御蠟燭可指出旨被仰付、依之御上ハ毎年現米四百表充御細工所ハ御渡、其餘ハ何程ニ而茂御細工所ハ償ハ様被仰付、仍而蠟實を被遣、三好屋方ニ而御蠟燭入用高程絞リ被仰付、御蠟燭ハ直段相極リ代錢御役所ハ相渡ル、年々右之通ニ而三吉屋儀御用相勤ル、依之寶曆二申十二月廿一日貳人扶持被下之、御用御蠟燭掛所木實方支配ニ被仰付、是も御役所ハ償ニ相成、同四戌六月九日三好屋ハ申出ハハ、生蠟直段追々下

直に相成ハ得ハ、當所務より御蠟燭直段引下ケ申度由願出ル、左之通直段書付指出ス

江戸廻し御直段

一 白蠟燭拾五匁掛 壹挺四拾五文

右同斷

一 生蠟燭貳拾匁掛 壹挺四拾三文

右同斷

一 次蠟燭貳拾匁掛 壹挺三拾壹文

右同斷

一 同蠟燭拾五匁掛 壹挺貳拾壹文

御國直段

一 生蠟燭貳拾匁掛 壹挺四拾貳文

右同斷

一 次蠟燭貳拾匁掛 壹挺貳拾八文

右同斷

一 同蠟燭拾五匁掛 壹挺拾九文

木實方秘傳書

但 五拾匁掛、三拾匁掛共江戸廻し
御國右之割合を以直段此如

右之通願ニ付其通りニ被仰付

覺

一 江戸廻し御蠟燭并此表御入用共、近年於木實方相勤ひ處、是迄之渡米高ニ而は年々價難相成ニ付、今百俵増しは此後いか様ニ茂可及手合由申出ひ、依之當所務高五百俵充可相渡ひ、元來御蠟燭餘慶之御入用高ニ處、纒之御渡米ニ而相濟一段之事ニ、猶無間違、令出情様木實方可有御申渡ひ

戊九月九日

右之通御書付を以、御用所被仰渡

如此ニ而三好屋儀、御用御蠟燭年々無間違相勤ひ處、喜兵衛老極いたしに付而内々を以、世忤入替り之儀御歎キ申得は、寶曆十辰四月廿一日喜兵衛并世忤伊助を御役所被召呼、野間氏より被仰渡ひは、其方儀及老衰に付、御蠟燭方御用聞指免し、尤年來實町シツナイに相勤ひニ付、爲御褒美現米三俵被下之、是迄被下來之貳人扶持上ル、則世忤伊助に御蠟燭御用被仰付、尤伊助勤方次第、追而御扶持方可被遣旨、演説を以申渡ひ様、御用所被仰渡由野間氏被仰付、親儀は早束隱居仕、伊助儀喜兵衛改號仕ル

廿三、鬢付油屋四人木實方支配被仰付事

附り、御觸之次第

一 油屋惣右衛門、同長右衛門、小谷屋徳右衛門右三人を、元文二丁巳九月御願申上ひ趣、近年私共儀六、備羅さやらの油ねり商賣仕ひニ付、漆植實他國を買調申ひ處、運送彼是高直ニ而難儀仕ひ、依之此度嶋根郡上講武村ニ而荒山を見立ひニ付、百姓方をも承合ひ處、御田地之障りニ茂不相成ひ間、被仰付被下ひハ、漆琉球は七植させ申度奉存ひ、此已後他郡も所々ニ而荒山を見分仕、追々御願可申上ひ、左いハ、余程物入等御座ひ得共、往々實成ひ時は蠟實下直ニ相成申、自然とさやらの油下直ニ相當り得は、他國者をも引受商賣余慶仕度奉存ひ、尤百姓方に茂荒山ニ蠟實仕付ひハ、御年貢不納之償イニも可相成と奉存ひ、依之此度御國中、さやらの油被仰付被下ひ様奉願上ひ、然上は爲冥加、壹人前を銀三枚充毎歳差上可申ひ、勿論御國中ニ而私共願之通、望申ものも御座ひハ、御觸流し被成下、此度何軒と御極被爲遊可被下ひ、左いハ、其ものと申合、隨分余慶蠟實仕付申度奉存ひ、蠟實仕付ひ儀、御國中ニ而荒山之土地宜所も御座ひハ、其村々を申出ひ様、乍恐御觸被爲遊可被下ひ、左いハ、村方と申合、仕入可仕ひ間、願之通被爲仰付被下ひ様ニ仰上可被下ひ、如此願ひ得は早束其通ニ被仰付、三好屋太次兵衛儀は後願出、以上四軒と極り年々蠟を絞り、さやらの油煉り來りひ處、延享四丁

卯歳木實方御趣向初りしニ付、蠟絞り儀御停止ニ被仰付、寛文元辰八月四人願出は、内々ニ而きやらの油煉して商ひ仕、猥ニ御座し得は御觸流し之儀奉願、依之御運上銀五枚充可差出旨申出ルニ付、願之通被仰付、郷町御觸有之

加羅の油座

油屋惣右衛門

同長右衛門

小谷屋徳右衛門

三吉屋太次兵衛

右之者とも先年依願、松江於多町、伽羅の油座申付し、其節不申觸しニ付而様子不存し故ニは哉、唯今迄勝手次第ニ油煉し旨相聞へし、自今は右四人之外、油ヲ煉し儀令停止し條、油座之者を買受可令商ひ、此旨町中相心得し様可被申渡し、扱又寶曆貳申十二月御厩御趣向ニ付、油屋金右衛門増座被仰付し處、四人もの共々別而難儀之趣、愁訴申出し得は御用所より御書付を以、右四人之者とも申出は趣尤事ニは、乍末御國中伽羅の油座、此度申付し者相加へ五人可限し、此以後如酒場賣買可相成し、然は却而宜布筋ニも相成し條可存此旨し、申十二月廿三日、如此之趣野間氏被仰渡きやらの油以上五軒に極ル、然所同四戌五月御厩屋御趣向相止ニしニ付而、油屋金右衛門伽羅の油座地賣御停止ニ被仰付、然共先達而拵置し御國向之油、賣残り少々御座し、當月中は地賣御免被仰付し様申出しニ付、當月中は地賣御免被仰付、六月朔日よりは堅無用之段、御用人高木丈左衛門殿野間氏御手紙ニ而申來ル、右之趣を以稻塚、景山、山田の油屋四人を御役所へ呼寄、書付を以申渡、同六月油屋共願出

は、御大切成蠟代引請之儀御座し得は、伽羅の油代不埒仕しものも有之はハ、其節御役所御掛聲を以御取立被下し様願し得は、同七月十二日御上り御願有之不埒之者も有之はハ、其節訴出し様被仰渡、同五亥年三好屋太次兵衛座、木實方蠟代不納仕しニ付而御取上ケニ相成、同九月十八日桑原屋平右衛門願ニ付、木實方より御拂に成、其後町方御次御趣向書を以、伽羅の油座増し願指出スニ付、野間氏御相談有之は處、元來木實方初りに油屋共手繰り御取上ケ被仰付、其上運上銀増し迄被仰付事ニは得は、野間氏御世話を以増座御免無之、同六月四月二日運上銀増し五枚以上拾枚充年々上納被仰付、依之諸色伽羅の油吟味しまり合之ために、右四人之者とも木實方支配に被仰付、同五月廿一日御觸之趣

他國伽羅の油御國中へ入込し儀、兼而停止之旨被仰出し處、近來追々令賣買し由相聞、不届之事ニは、向後先條之通、彌堅停止し、尤他國油賣買之儀、兼而御免之油座四人之者とも、遂吟味可申旨申付し條、可存此旨し

如此郷町の御觸有之、同七丑七月御觸之趣
他國油入込し儀、先達而停止之旨申付置し處、近來荷籠杯へ入、密々令商し者有之段相聞へ不届之事ニは、依之吟味役人并隠し目附をも差出し條、此以後他國蠟且蠟燭、伽羅の油等令商賣し者於有之は、急度申付其上過料可申付し

右之通郷町御觸有之、惣して油屋四人之ものは木實方御用聞ニ而、御銀等御指聞之節は、納達をも御申付有之出情仕ルものとも也

〔原本番號欠〕

廿四、乘馬、臥賃、木實方へ償に成事

附り、御役人小吏晝飯代之事

一 寛延元辰ノ年稻塚、景山より申出は、郷方楯畑見分或は見積之節、罷出はに乘馬請取は而茂少も乗る事なし、人足も貳人充被下は得共、唯今ニ而は壹人充にて事濟は得は、此節御檢役之砌御座は得は、兩品ともニ受取ましき由願出ル、依之其通ニ被仰付、年々人足壹人ニ而郷方相勤は處、寶曆貳申秋稻塚、景山出郷之砌、出雲郡學頭村へ松江表に引取は節、草臥申ニ付御用舟申付、乗りは而罷歸り手形を仕出しは處、人足壹人の出役人之分は、御用舟に乘は儀不相成由ニ而留ニ附不申、依之兩人を野間氏の内々御物語申はは、ケ様に舟等之手合不自由ニ御座は而は未々のため宜からずは、いか、可仕哉と申、野間氏御用所は御申達は得は、此後は御法之通乘馬、人足ともに受取は而可然由御申渡有之ニ付、其後は乘馬、臥賃、木實方より被下之、扱又寶曆貳四月廿日野間氏へ被仰渡はは、木實方は年分休日なしニ、毎日早朝より極晩迄相勤之事ニは得は、晝飯扶持代として御役人へは錢貳拾文充、小吏ともへは錢拾文充毎日被下之は間、月々手形仕出し受取は様御申付有之、稻塚、景山、田邊

も右同様ニ被仰付は得共、於御勘定所に、晝飯扶持と申事無御坐事ニ付御斷を申上ル、仍而年々其通ニ而有之は處、其後山田、勝田、村岡杯追々御役人も出來増し何れも勤苦敷ニ付、同十一巳九月朔日より萬役人格以上へは、御湯漬代として錢貳拾文充被下之

〔原本番號欠〕

廿五、諸方へ蠟趣向願出る事

附り、目安并奥屋善右衛門か事

一 木實方始り之儀は、延享四卯歳より之事なるに、三四年之内は諸方へ生蠟之趣向、蠟質之趣向、書付を以品々願出ル事あり、此書付を野間氏に御下しは而、趣向いか、可有哉と度々に御尋有之、右書付ニ一〇〇付紙を以ふしんを打、或は御不益の筋なと書あらはし御返答有之、先は御爲を申立にして、自分之徳有事を申出ル故に、本利に當る事なし、ケ様之事度々におよぶ、扱又午歳を少々充目見と申て、御買上之節實を取は事はしまるニ付而、郷中之御買上場ニ而少々宛目見取は得は、私欲ニ茂いたしは様に存るもの多クして、此事下より申出ルにや、有時熊野氏へ稻塚に御尋有之は、御買上場にあつて實を少々充取、其上直段等ニも下ニ而は下直に相調、上は高直に指出は様の噂有之、いか、哉と御尋ニ付、稻塚へ申は、目見之儀へ去秋より初り、御役所ニ而も有之事、是は目見帳別拵、日々の高留置罷歸り、其帳面直ニ指出し、又蠟質直段之儀は、庭帳ニ實高何ほと但壹ヶ匁ニ付何程、

何村之誰レと記、又元帳に庭帳之通書記、又切手にも其通を書いて押切判行をいたし、代錢と一所ニして夫レレノ相渡しハハは、紛敷事ニ思召ハハ、御役所ニ有之ハ庭帳、元帳可指出ハ、御買上場所ニ而夫レレノ相渡しハ切手を不殘御取上ケ、御引合御覽可被下ハ由申出ル、其砌は新役所儀故、上下之疑を受る事多し、又未レ春木實方御普請最中之砌、投文をいたす、其趣は生蠟外ニ而絞リハ者有之、御吟味可然よし誰となしに書付出ス、或時は御門ハ張紙をする事度々におよふニ付、内々にていろくいと吟味いたすといへとも、知れかたき故いたつらに日をおくりけるに、有時又御門ハ張紙を以度々蠟打ハ儀御しらせ申といへとも、御貪著無之、彌御捨置ハハ、御役人の内ニ無調法人可申出たと書て張置ニ付、御役所之者とも何れも心ならず、内々穿鑿に心をつくすといへともしれかたし、有時稻塚ハ蠟打平七を宅へ招キ、其方も知る通、御役所ハ投文又は張紙度々におよふ、是ハ油師共之内ニは能存る者有へし、其方事は油をも絞リハ得ハ、中々誰レレノと知りつらん、内々を以竊ニ聞合ハハ、訴人之者はたとへ人數たりとも其咎を申免し可遣、御爲第一之儀也、隨分油斷いたすへからすと申聞ス、ある時平七ハ申出ハハ、二三日前に嶋根郡大井村ハ、生蠟を三四箇舟ニ而積出し、米子ハ駄荷に仕組、御家中の差札ニ而通りハ由承ハ、又御役所へ蠟打に出る吉三郎ハ内々ニ而咄しハ得ハ、少々しりたる事ありと申由、平七ハ訴へ出るニ付、稻塚ハ吉三郎を呼寄相尋ハ得ハ、土手町の庄右衛門と申油師、蠟絞リ之手筋能存ハと申、依之野間氏ハ稻塚ハ右之段物語いたす、野間氏被仰ハハ、吉

三郎、庄右衛門兩人を其方宅ハ呼ハ而様子可承、聞人ニハ須山を可遣、(唐紙)からかミ一重を置、是を聞セ口書をして見セよとあり、則須山ハ被仰付、扱稻塚宅ハ蠟打兩人呼寄、稻塚ハこまく相尋る、庄右衛門ハ申ハハ、末治町木屋ハ三郎方之油木をかり、奥屋善右衛門ハ蠟絞リハ由申、此趣書付を以野間氏ハ申出ル、追而吉三郎、庄右衛門を野間氏ハ呼寄給ハ、稻塚ハ一く尋とふ、野間氏ハ奥の間ニ而御聞有之、兩人之口上書御上ハ出ルニ付、ハ三郎、庄右衛門ハ大家預ケ、奥屋ハあかり屋ハ被召捕、日々之口問有之といへとも、奥や少も落る氣色なし、依之吉三郎もあかりやハ被召捕、ダイケン對決におよハハ時、奥屋少も不存由を申、吉三郎ハ申ハハ、蠟絞リハに詐りなき證據ハ、既に自分儀も雇レ蠟を絞リ、其糟の捨所なき故、茶町權現の丁の灘を堀て埋メ置シ事、唯今ニ而も御覽ハ得と申、依之奥屋ハ牢者被仰付、跡御取上ケニ成、ハ三郎儀ハ追放、扱庄右衛門儀ハ何と思ひけん自害して死ス、奥屋御追放被仰付、吉三郎儀ハ上り屋御免ニ而又々御役所被召遣、(使)庄右衛門も存命ならば咎を御免可有に、ふハ成事とも也、奥屋ハ事此書に出スにおよふましけれ共、いろく手段を以、是を尋あらハシ、ヤハ双ニ而庄右衛門ハ命をうしのふ事、己か咎とは申なから、稻塚ハ惡意なるへしと、悔にかいなし、一ツはかれハ冥途の迷ハ遁んかと書あらハす也

一、一、一、

Main body of faint, illegible text on the right page, consisting of several columns of vertical writing.

木實方秘傳書

廿六、御用所并木實方御役所并諸郡の御觸次第

一 延享四卯九月御觸、近年於郷方、蠟實追々植立しニ付而 御上に御調法之筋に思召し、尤土地相應に無之哉、其儀なき村方も有之し、然とも銘々心掛しハ、自然と能出來立可申し、隨分念を入作立、唯今迄蠟實木苗植不申村々は、大村ニは五百本、小村ニは三百本充、當秋來秋迄に畑縁或は野うてニ而作付難成場所、野山等之土地を見立植付可申し、石畑に植し者には、蠟實指出し次第代銀直渡に可申付し、又野山、切畑に植し者ともへは、其畑の御年貢免し、實成し蠟實半分は上納、半分は作主へ可被下し、寒強ク植木立兼し場所には、漆木又は油木を植可申し、左ハ、末々上ノ御調法ニ相成、下之助力ニも可成し間、村々ニ而木苗取合植可申し、其上不足之分は、御細工所へ願次第木苗有たけ可遣し、就中只今迄植付置し村々茂、猶又出情追々植付可申候以上

卯九月

御細工所

一 寛延元戊辰六月隱州の書付、隱州兩嶋、漆木、琉球植木植付之儀如何し哉、此表浦方之山ニ立し様子ニ而は、塩風も構ひ無之候、土地茂宜布被存し、琉球植木別而早ク成立能物し、植し而より五年目方實成申物、殊外調法ニ而下ノ助ニ相成物し、琉球は七植付申度しハ、種可遣し、壹畝に木苗拾本程宛植付申物し、其間ノに相應之畑物作り申事ニし、尤實成木、實ならず木有之し、實成木壹畝に

五六本充の心持ニハ、屋敷之内又は畑之縁ノ植付、尤野山切畑は猶以之儀ハ、指而野うてニ成物ニ而も無之、假令少々野うてニ成ル而茂、作物とは違莫太之益有之物ニハ、一年ノ大分實成、十ヶ年ニもよひハ得ハ、壹本ニ拾貫目程宛も實成申物ハ、嶋前は牧畑多ク有之ハ得共、牛馬入込ハ年は木細キ内生立如何可有之哉、然共牧畑斗にも無之ハ土地、殊外廣キ事ニ被存ハ、漆之木は只今茂余程有之様ニ被存ハ、嶋後五ヶ村筋ニは琉球植木少々充有之ハ様ニ茂相聞ヘハ、漆木苗は能實成ハ、漆木之根をかき廻し置ハ得ハ小根ハ芽出しハもの也、是を苗に仕立植ハ得ハ不殘實成木ニハ、尤親木の病ミにも不相成ハ、右調法ニ茂存植付度ハ、左之通益之筋書付

漆實琉球實共ニ

實壹貫目ニ付百七拾文位

但、上中下平シ直段

白鳥白實

實壹貫目ニ付三拾文位

此白鳥白實は野山に有之、土用ニ入取申物ニハ、隨分能實入少々充白ク成、實われめ相見ヘハ時分ニ取申物也、

右之通兩嶋唯今有り來り之分、且追々植付實成次第、不殘此表ハ運送いたしハ、代銀直ニ相渡可申

ハ、莫太ニ相成ハ、御上納銀指繼ニ茂可相成ハ、尙又此表年ノ直段相場も有之事ニハ、小百姓共迄能々吞込ハ、年々出來増シ、後々迄爲ニも可相成ハ以上

御細工所

一 同年辰六月十三日御觸、漆實、琉球實、白鳥白之儀去年ハ御買上に相成、他國出并下ニ而賣買急度可爲停止旨去秋郡中申觸ハ、然處密々致賣買、他國ハ指出シ、其上所により蠟打ハ者も有之ハ様ニ粗相聞ヘハ、不届之事ニハ、此以後猥之儀も有之ハ、急度曲事可申付ハ、尤目附をも指出しハ條、堅可相守事ニハ以上

御細工所

一 同貳巳六月九日郷中御觸、漆、琉球實之儀去年茂相觸ハ、他國出し等、猥之儀無之ハ様相ハ得可申ハ、當年も彌御買上之事ニハ、尤直段は外并合之格を以、代銀可相渡ハ條、此旨可相心得ハ

一 蠟之儀ニ付、隠シノ絞リハ様是又相聞ヘハ、此以後右様之仕形有之有間布事ニハ、彌絞リ申者もハ、後日後日に相知レハ共急度吟味ヲとけ、本人は不及申、近所之者迄も品ニハ越度可申付ハ

一 於村々、訴人申出ハ者有之ハ、急度褒美可申付ハ

一 漆實、琉球實、白鳥白實ともに、郡々ニ而御買上之場所は、楯縫郡平田町、神門郡は大津町、八幡村貳ヶ所ニ而御買上、飯石郡は粟谷村、仁多郡は北原村、大原郡は加茂村、出雲郡は庄原町、右之

村々の役人指出可申し、其節代銀直ニ相渡、實受取可申し。
右之通、上御調法ニ思召之儀、御爲を存しハ、猥之儀ハ有之間敷事ニハ、相觸し通堅可相守し、追々吟味之役人指出、於村々無案内、藏等迄相改吟味可有之ハ、兼而此段可相心得し以上

巳六月

御細工所

一 同巳七月御觸、郷中ハ漆實、琉球實御買上之儀、去年迄は壹ヶ村切、平シ直段を以御調し處、下ニ而實之善惡有之ニ付、不同之儀も有之様ニ相聞へハ、依之當年ハ壹ヶ村切に人別に御調之ニハ、尤御調場所ハ遠方ハ人別に持參成間布し間、唯今之通庄屋所ハ取集し而可指出し、百目貳百多たりとも夫々に搦ヶ分し而、持主誰〜と名を付札にして、大概拾貫目位之表^(俵)ニシテ可指出し、其外拾貫目ハ外之持主は不及申、拾貫目入と相改可指出し、實之善惡を以、上中下を人別に相立、壹ヶ村切ニ目錄相添代銀拂可申し

一 漆實、琉球實、村々にて取集し儀、只今迄はまた請取ニ役人不出内に、庄屋所ハ指出置申ニ付、寢實等も出來申事も有之ハ、當年は郡々の罷出、先達而御觸之場所ハ罷出、受取し日限一日に五ヶ村七ヶ村程宛、日々割合を以一兩日前日より可申觸し間、夫迄は銘々手前ニ而隨分干立置可申事ニハ以上

巳七月

御細工所

一 同巳六月御觸、漆實、琉球、白鳥白實、他國出し其外猥之儀無之様去年も相觸し通、彌堅ク可相守し

一 生蠟絞りの儀停止之旨、先達而雖相觸、今以密々絞りの由相聞へハ、不屈キ之事ハ、向後急度可相慎し、嚴敷遂吟味し間於相知しハ、本人は不及申、品により近所之者迄越度ニ可被仰付し條、相互に令吟味、相知りしハ、可令訴人ハ、左ハ、褒美可申付し、若隠し置後日に顯れしハ、本人同然曲事可被仰付し

一 漆、琉球、白植實於郡々御買上之場所左之通ニ付、楯縫郡は平田町、神門郡は石塚村、乙立村、久村、飯石郡は粟谷村、仁多郡は北原村、大原郡は加茂町、出雲郡は庄原町

右之所々ハ可指出、其節役人指出代銀直ニ可相渡し

右之通し條其旨可存候、申渡趣追々御趣向茂有之、御國中上下之爲に宜敷筋ニハ間、此段とくと令承知しハ、猥之儀は有之間布事ニハ、此上ニ茂猥之族於有之ハ、急度被仰付外は無之ハ、爲吟味内々役人差出し間、若疑敷存し處茂有之ハ、無案内藏等も令吟味し儀茂可有之ハ條、銘々隨分相慎、村々末々之者迄ハ申聞し様、可被相觸し以上

巳六月

御用所

連名

郡奉行 當
木實方奉行

寶曆七丑五月廿三日、十郡の御觸、郡中御用地植畑之儀、年數茂余程ニ相成以得共出來立惡布、唯今
におゐても、何之御用ニ不相立村々茂多ク有之由ニ由、左以而は木實方趣向茂成立不申以、依之軒
別ニ壹本或は大録のものは貳本充も御用木として、實成植木石畑縁敷屋敷廻りに植置可申以、實成以
節は半分上納之儀ニ以得は、下之難儀にも無之事ニ以、右之通隨分生立、令出情以様可申附以、委細
之儀は木實方可承合以以上

五月廿三日

御用所

廿七、木實方御勘定之次第

一、御勘定之儀は、三年振りに毎年御勘定有之事也、是はたとへば卯歳之蠟實御買上ニ成、翌辰ノ
歳生蠟に絞リ立、大坂御運送、地拂等ニ被仰付、少々絞リ残りの實有之以得は、巳春迄も持越し絞リ
申事故、蠟實絞リ切御勘定に仕組申也、小買物方、御作事方も同様成、蠟實御買上ケ之節は、庭帳に
植、漆實共に何貫何百何村誰、實壹目ニ付何拾何文、何月何日と印以而、元受御役人ハ遣し以得
は、元方ニ而其通を本帳ニ留、小切手ニ又其通を書て本帳ニ押切判をいたし、其小切手に代銀を添、

蠟實拂主ハ相渡ス、若算用違又は紛敷事も有之以得は、右三口を以引合申事也、毎日仕舞以節は、元
々より一日之御買上實并代錢、一ツに算用改、夫に判いたし置事也、是則拂帳ニなる也、上
納實は人別拂方次第に、小切手ニ而受取遣し置、十郡不殘上納相濟以得は、一村切ニ本手形遣ス、文
言左之通

請取申植實之事

一、植實何拾何貫目也 但、人別上納之儀ハ先而
小切手受取遣し置

右は何の納、上納植實儘ニ受取申所實正也、重而拂方可遂御勘定以、爲後日仍如件

年號月日

元受 御役人判

元々連名判

内改判

改 御奉行判

何郡何村 庄や誰當

右之通相認、御役所殘ニ留、御奉行殘判取、一村に遣ス、扱又小買物方、御蠟燭方、御作事方、
惣し而元受之分ハ、小通イを以米銀錢共ニ元方を受取、日々元々并内改判取置也、小買物方、御作事
方月々に本手形仕出し、殘方留ニ付殘判取置、是を以御勘定仕ル事也、且元方ハ絞リ夫、碎夫の日

用誰レ〜と日々帳面ニ留、元メ判取置五日〜に賃錢相渡ス、其時本帳ニ出し、日々拂帳ニは消し判取、本帳に元メ判取、則拂帳ニ成、其外何等ニよらず日拂之事ニ得は、當分〜に拂帳に元メ内改之判取置、御勘定に仕立ルなり、御勘定改ニは御勘定所々本人壹人、手傳壹人、木實方御役所へ參、元方、小買物方、御蠟燭方、御作事方夫〜に元受帳、拂帳、殘物帳、目錄帳を以被改之、こまこま事は御勘定帳面くハし、是を略ス、御道具方は多ク残り物故元メ立合改濟

廿八、木實方に蠟絞リ面木八挺立と定る事

附り、諸郡の琉球種被遣事

一 御役所に蠟絞リ面木八挺に定る事は享保四卯の歲初リより御定メ有之事なり、是は此御趣向追々繁榮致シ、はセ畑も出來立、實高も餘分ニ相成、御趣向程に殊足る時は、蠟絞リ面木、五拾挺無之而は手合不相成、然ル時は御役所斗ニ而難絞リ、他所へ茂御申付無之而は不相成其節に至りての見合のため也、絞リ方ニハいろ〜仕形模様茂有之事ニ故如此なり、依之新屋方ニ而絞リハ蠟、木實方の上納の時は役人立合、悉く斤目相改、人別之絞リ高夫〜に書付、物平しを見給ふ事也、御役所絞リをも如此なり、是を以兩方引合高下有事を知り給ふ也、右ニ付而、最初御普請等をも八挺立の心得を以建給ふ也、漸々十六年の春秋をへて、一ト御役所の筋は大抵^(事)殊足る、然とも御藏は今一ヶ所不足なる

へし、扱又諸郡にはセ種を被下し事は、木實方初りの節は漆、琉球實纒壹萬貫目計有之、追々はセ畑出來之時は苗無之而不叶とて、寛延元辰ノ春々於御細工所、種を貳拾石拵へ、諸郡に配分して被遣之はセ畑并石畑の縁り〜に植ハ様御申觸有之、然共はセ畑は思召様ニ出來兼、石畑植は追々出來増し有之、夫々種は年〜拵置被下之、尤御役所々茂所々のはセ苗畑ニ而苗を御仕立有之、苗なき村々には被下之

廿九、野間氏自分山屋鋪に植畑を開試ミ給ふ事

附り、見積稽古之事

一 野間氏は年〜十郡を打廻り、開畑之品、はセ苗植様、さし木、繼木の事迄、いろ〜こゝろをつくし給へとも思召様に無之ニ付、西尾村新御立山はセ畑續キに廻田山といふ自分之山屋敷有之、是を開キ畑にして植木植付、手間入、物入等こゝろミ、扱又繼木は四季に御心を寄せ、四土用に繼木、さし木、植替等様々有之といへとも、繼木、さし木共ニ出來立不申御心つくし計也、植付植之分追々實成ハ得は、秋に至り御役人を召連られ入札にして見積之高下を見給ひ、取時分ニ至て悉く念を入れてとらしめて、取手間或は運送之物入等をさし引、能惡布をか^(考)かへ給ふ也、山は不殘追々開キ畑にし給ひ、石畑共ニ取集三四町も可有之、此場所に植植付、唯今ニては實成木も余程出來立、能見積稽古

場也、扱又新山はセ畑見積之節は、御役人二三日逗留いたすにより、毎秋御茶屋をかり請てこゝろよく見積申なり

卅、野間氏記劔伊祇曾大神の御社參之事

附り、所々之寺社の御初尾被指上事

一 木實方鎮守之事は、寶曆元未ノ歲、初而記劔伊祇曾神社をクワンシヤク灌定有之、御役所の繁榮を御祈願有之、右に付而追々賑々布大抵ダイライに事濟シ故、御禮として御社參被成度由
御上の御願有之ニ付、願之通被仰付、依之大坂の茂御立寄御用之趣茂有之ニ付、御役所より御役人壹人被召連旨に付、加納又藏、林文野右衛門、小吏ニ而久治被召連、寶曆十卯三月十一日御國を御發足、記劔名草の郡伊祇曾大神の御社參、夫々伊勢參宮し給ひ、御歸りに大坂の御立寄、山本屋九右衛門方ニ御逗留有之、此山本屋と申は、木實方始りより生蠟大坂の御登セ之節、問屋ニ被仰付、貳歩充口錢被下之、年々取扱仕シ處、寶曆七丑とし御國の下り、生蠟取引之儀永代に被仰付シ趣、御證文被下置シ様願出ニ付、同十一月五日左之通之御書付被下之

覺

於大坂、生蠟御拂万端肝煎取扱之儀、依願山本屋九右衛門の永代被仰付シ、御爲第一之儀ニシ條

彌以出情有之、入料等御不益無之様、少分たる儀まで心遣可有之シ、且又仕形惡布不埒之事共有之シ得は御取揚之事ニシ、後々迄堅申贈可有之シ事ニシ以上

寶曆七

丑十一月

木實方役所

御役所判

山本屋

九右衛門殿

前書之通承届シ以上

脇坂十郎兵衛判

前田彌五右衛門判

早川太兵衛判

高橋九郎左衛門判

右之通御證文被遣、ケ様之事ニ付而山本やニ御逗留ニ而、大坂生蠟問屋之取引、御役人之勤方彼是しシまり合を定メ給ふ、兼而山本屋生蠟取引出情相動シニ付、生蠟入札人數より、生蠟壹箇ニ銀貳匁宛賄入料として指出ス、是を壹匁ハ山本屋の被下、残り壹匁は則元方の元請ニ致、賄入料は大坂詰御役人

より手形仕出、爰元元方拂方仕ル、また龜屋夫兵衛儀入札之節取引出情ニ付、生蠟壹箇ニ銀六分充被下之、生蠟御拂代銀は天王寺屋五兵衛御預、追而爲替手形を以追々御受取

卅一、木實方御奉行並御役人立身御加増有事

一 野間氏、御細工所木實方御奉行兼勤ハ處、寛延二巳九月廿一日郡奉行格木實方山方御奉行被仰付、同十月廿三日手前抱御足輕登人御給扶拾三表貳人扶持被仰付、寶曆二申二月十一日御役料貳拾石被仰付、同九月廿九日郡奉行上座御役料高に結ひ御山方木實方御次掛り被仰付、同十二月十九日御意を以御側役次座被仰付、同十一巳九月十六日 御姫様御婚禮請口御札座兼勤被仰付、右に付而御札座奉行奥田伴右衛門殿へ御書付を以被仰付ハ趣左之通

覺

此度野間忠大夫儀

御婚禮御用請口御札座をも兼勤、同意ニ可相勤旨被仰付ハ、右御用は郷中御用聞共可相勤事ニハ得共、大勢之御子様方之儀左様ニは行届間敷哉、押而相働ハ而は、畢竟御國民之困窮ニ相成ハ儀も如何ニ被 思召ハ、依之御婚禮は先々木實方過半御手合被仰付度思召ハ、然上は忠大夫度々御札座ハ可相詰ハ間、奥田伴右衛門儀茂、同役同前ニ覆藏申合ハ様との儀ニハ、御札座之儀、御

次札ニも可被 仰付ハ得共、却而相障ハ儀も可有之哉と先其儀無之ハ、委細忠大夫へ被仰渡之趣も有之ハ間、目立ハ借賃ニおゐては、忠大夫同心不致儀は御役人共も不可取扱候、勿論猶又難相働儀は、品ニ可相同趣ニハ、且又木實方御役所之儀、御札座御役人共も兼勤同前之心得を以、御趣向成就ハ様可心附旨ニハ間、此段可被申聞ハ以上

別紙ニ伴右衛門殿へ左之通

右此度野間忠大夫義、御札座受口被 仰付ニ付、度々可相詰ハ間、諸事無覆藏可申聞ハ、尤木實方御役所ニ些御趣向茂有之候間、御自分儀茂兼勤同意ニ心得を以、右御役所成立ハ様可取扱ハ以上

- 一 山崎氏、寶曆十一巳九月廿九日郡奉行格貳拾石之御役料、木實方御奉行被仰付
- 一 熊野氏、寛延二巳十二月廿三日御取立、七拾三石被仰付、手前抱は持來ニ而木實方御山方押合被仰付、寶曆八寅九月十三日御役料銀五枚被仰付、同十一巳四月廿九日願ニ付而御役儀御免
- 一 稻塚儀、寛延元辰八月十八日小算用格被仰付御目見仕來、同二巳三月十六日御細工所元御免、木實方元計被仰付、手前抱御小人是揚ル、然共當年壹ケ年は御給扶持可被下由被仰渡、寶曆三酉五月五日手前抱御小入壹人被仰^(付脱)、同四戌四月養子不縁仕ルニ付跡談絶可致所、寶曆七丑五月廿一日木實方最初より出情相勤ニ付而、嫡孫を嫡子に御上被仰付

- 一 景山儀、寛延元辰八月十八日壹人扶持御加増并萬役人格被仰付御目見へは仕來也、寶曆三酉五月五日手前抱御小人壹人被仰付小算用格ニ被仰付
- 一 山田儀、寶曆八寅五月廿九日手前抱御小人壹人被仰付、同十一巳十月二日小算用格被仰付
- 一 勝田儀、寶曆五亥五月二日木實方見習被仰付、三表御合力米被下之_レ處、親相果_レニ付三表は上り、親_レ被下來之御給扶持無相違被下、御普代格ニ被仰付、寶曆八寅九月廿一日萬役人格被仰付
- 一 田邊儀、寶曆元未三月廿六日萬役人格被仰付、同八寅三月廿六日隱_カ方元方役被仰付_レ故、木實方勤御免
- 一 村岡儀、寶曆八寅四月六日御普代格被仰付、同十一巳十月十六日萬役人格被仰付
- 一 須山儀、寶曆四戌五月二日御普代格被仰付
- 一 横山儀、寶曆八寅四月六日御普代格被仰付
- 一 加納儀、寶曆四戌十二月十二日米三表之加米ニ而御取立、同八寅四月六日加米を高結_レ御切米拾表ニ貳人扶持御普代格ニ被仰付
- 一 林儀、寶曆十辰二月十七日兩役所出情相勤_レニ付、貳表加米被下、同五月廿九日唯今迄手前抱ニ而有之_レ處、今日_カ山方御役人被仰付、加米は被下來之通
- 一 石富儀、寶曆十一巳十二月廿三日貳表之御加増、御取立_カ新組入ニ被仰付

一 小吏小八、寛延三年五月廿六日定渡ニ被仰付、寶曆八寅五月十九日江戸切米被仰付、御給扶持木實方_カ債ニ成

- 一 御門番市平、寶曆八寅十二月廿四日現米壹表宛加米として被仰付、是又木實方より債ニ成
- 一 小吏左右衛門、寶曆九卯七月五日定渡被仰付、御給扶持右同斷
- 一 同定吉、寶曆九卯七月五日定渡、右同斷
- 一 小吏小四郎、寶曆九卯七月五日御山方定渡被仰付、御給扶持御山方より債ニ成
- 一 同惠七、寶曆十辰十二月十六日御山方定渡被仰付、御給扶持右同斷
- 一 同金藏、寶曆十一巳十一月八日壹人扶持被下之、木實方債ニ成
- 一 同磯治、寶曆十二午三月二日木實方定渡被仰付、御給扶持木實方_カ債ニ成
- 一 大工棟梁新右衛門、寶曆七丑七月廿三日銀壹枚充被下之棟梁役被仰付
- 一 御先手組_カ御役所出勤之御役人_レは、江戸勤番相當ニ付、毎年最合米を木實方より債被下之
- 一 木實方より元_カ壹人充大坂詰被仰付、御渡物左之通
- 一 銀三百五拾匁 拜借銀
- 一 同貳百匁 支度銀
- 一 同七匁 路銀

但、御國方大坂迄道中
日數七日分一日壹匁遣

一 銀三匁五分

手前抱御小人
壹人分路銀

但、御國より大坂迄道中
日數七日分一日五分遣

一 米五表三斗五升

手前抱御小人給扶持
是ハ日割ヲ以残り米受取

一 同三表三斗

御 添 米

一 同壹斗四合五才

道中七日分御扶持
米七日分一日三人扶持

一 銀五枚

御 役 料

一 同三枚

右 同 斷

但、是は御役料五枚分余分御引方有之ニ付
外ニ三枚充被下之

我御役所之荒増を書あらはし度といへとも、文筆癡アロカにして心指(志)をとげず打捨置侍るに、思へば後世に
至りて尋度事もありぬへし、なきは口おしと恥を捨て野間氏の願ぬれば、此儀可然、御役所初りの筋
は自分、其方、景山ならてくハしく知人なし、景山は大坂詰なり心を添へ可遣由被仰しに力を得て、
存出し事ともあら〜に記ス

上の御沙汰不知故、しらざるはしらざるとせよとの古語にすかりて、公邊の事は野間氏ゆずりて、
流れの末の塵芥チヤアツクダを拾ひ集メ秘傳書となす也、此門にいらざる人を見給ハ、却而嘲アサケ事多かるへし、
他の人に見せ給ふべからず、御役所は寶(盛)ラさかつて出、またさかつて入事日々有之故、時移り世か
はりては御役人に奢出來て、邪成事ヨコシマも有ましきものにあらす、其時は此書の貧マツシキを見て意見をくハへ
給へ、壹人の奢は御役所惣名の奢なるへし、亦御役所ニ茂盛キイスイ減有へし、盛成時は思ふ事なす事皆利有
へし、随分油断なくして金銀の山を築給へ、また劣ツトロク時は思はざるに損不益出來て、すいびのもと、
なる事有へし、其節に至らば是をひらきて植畑、軒別植の上納計を以、時をかにかへ小車より大車に
趣キ給へ、さある時は万代富益の御役所なるへし、秘傳書終り

寶曆十二壬午

嘉月上旬

稻塚 七拾一歳

述之

語

彙

（Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is arranged in vertical columns and is too light to transcribe accurately.)

ア

○上り屋敷

あがりやしき 上屋敷 官に没收せられたる屋敷

〔徳川時代の語〕

(言泉)

○油木 (アブラキ)

桐油を絞るに用ふる道具。 (藤木)

○油木

△嬰子桐 あぶらきり ちぎり 大和本草 あぶらのき江

州 どくゑのき 駿州 どくバ 勢州

樹葉共にどくゑに似て大に一尺許、其葉少し赤みあり、之を折バ白き汁出づ、初夏枝間に房をなして白花を開き實を結ぶ、一顆の内に三四粒あり、状大風子の如く大毒あり、里民此實を採り灯油に雜へ又桐油紙を造るに用ふ。(本草圖譜卷之八十) △あぶらぎ、油木、あぶらきり(油桐)、嬰子桐、大戟(ウダイ)科に屬する落葉喬木。桐に似て高さ二丈に達す。葉は廣卵形にして淺く數個に裂けたるも

あり。花は五瓣淡紅色。種子は桐油を搾るに用ひられ、材は器具を製するに用ひらる。暖地の山中に自生し又栽培せらる。
いぬぎり。ころび。どくえ。 (言泉)

イ

○伊弉曾大神

紀州 伊弉曾大神(伊太祁曾大神ナルベシ)

△伊太祁曾神社

祭神 大屋毘古命

和歌山縣紀伊國西山東村伊太祁鎮座、大屋毘古命を祀り、相殿に大屋津姫命、抓津姫命を配祀す。當社は始めその社地、神の宮にありしが、和銅六年現地に遷座せらる。今の日前神宮(官幣大社)鎮座の地は即ち其の舊地なりといふ。延喜式内の名神大社にして四度の官幣並に月、相、新の三祭に預る。神封には大同元年六十六戸を定む。嘉祥三年從五位下を授け奉り、爾來累進して元慶七年從四位上に至り、延喜六年正四位上に進む。當國神名帳には正一位勳

一等伊太祁曾大神と見えたり。明治十八年縣社より國幣中社に昇格し、大正七年九月更に官幣中社に進む。祭祀は例祭（十月十五日）の外、卯杖祭、管占行事（共に正月十五日）夏越祭、茅輪行事（共に舊六月晦日）あり。祭神大屋毘古命は又の御名を五十猛命と申し奉り、素盞鳴尊の御子に座ますなり。この神天降ります時、天上より數多の木種を持來り、父大神に従ひて、一旦韓國に渡り曾戸茂梨の地（今の江原道春川府牛頭山は其地ならんとの事なり）に居られしが、やがて此の國に歸り遊ばして、西は筑紫より攀て大八洲國至る處に、木種を栽を廣められたる御神なり。（大日本神社志）

△伊祁曾大神
今の仁多郡横田村大字横田に鎮座の伊賀多氣神社なり。
（朝山時氏談）
○稻塚和右衛門（イナツカカヅエモン）
〔資料〕
〔稻塚和右衛門 百石 格式組外 御臺所奉行〕

實平賀縫殿家來飯野與五右衛門弟
元 祖 稻塚勤十郎 本國不知 生國出雲
養高會祖父 稻塚權七 生國出雲
一為御細工人被 召出御給米拾石三人扶持被下之其後御目見格御細工所筆頭役并直段改被 仰付 年號不知
一元祿十二己卯年 月日 御加増貳石被下之
一正徳元辛卯年十二月廿一日及老年付而如奉願悴と入代被 仰付號閑入
一享保四乙亥年七月廿八日於出雲死
養會祖父 稻塚權七 生國出雲
一正徳元辛卯年十二月廿一日父と入替被 仰付御給米無相違拾貳石三人扶持被下之御細工人被 仰付
一享保二丁酉年七月十八日於出雲死
實瓦師平井惣助兄
養祖父 稻塚和右衛門 生國出雲
一享保二丁酉年九月十五日養父嗣子無之付而被 召出御給米貳拾表二人半扶持被下之御細工人被 仰付權七跡家内之者可令養育旨被仰渡之

一同十三戊申年八月十六日
御目見格御細工所筆頭役被 仰付
一寛保二壬戌年十二月廿三日出精相勤付而爲御褒美御目錄百疋被下之
一同癸亥年八月廿八日月照寺御普請之節出精相勤段蒙御褒美
一同九月十二日格式萬役人御細工所元被 仰付御加扶持被下三人扶持被成下手前抱小人一人被下之
一同年 月日 不知 悴勤八令病死ニ付而桶縫郡平田町百性吉助與申者如奉願聲養子被 仰付
一延享四丁卯年四月廿六日出精相勤之段御稱美被成下
一同七月六日出精相勤付而爲御褒美銀拾匁被下之
一同十二月廿三日木實方御趣向始出精相勤付御褒美百疋被下之
一寛延元戊辰年二月十九日木實方元被兼勤被 仰付
一同八月十八日格式小算用被 仰付
一同十二月廿三日木實方元被出精相勤段御稱美被成下

一同二己巳年三月十六日木實方御役所者日勤其上郷方勤ニ付何れそ一方勤被 仰付被下度旨内存申出之處御細工所元被 御免木實方元被一通り被 仰付
一寶曆元辛未年十一月十八日木實方御普請之節出精相勤ニ付爲御褒美百疋被下之
一寶曆三癸酉年五月五日手前抱小人被下之
一同四甲戌年四月日不知養子吉助所存ニ不相叶ニ付實方之差返之
一同七丁丑年五月廿一日木實方最初之格別勤功有之ニ付雖難被爲成儀と以御憐愍嫡孫勤十郎嫡子被 仰付
一同十三癸未年正月十一日格式御徒並被 仰付
一明和七庚寅年 月日 不知 木實方年來出精相勤付爲御褒美銀三拾匁被下之
一同九壬辰年 月日 不知 木實方元被 御免年來出精相勤付米三俵充生涯被下之
一安永三甲午年八月五日及老極ニ付奉願聲與入代被 仰付
一同四乙未年二月廿二日於出雲死 （烈士錄）

安永四年二月廿二日

釋種雲水義翁清信士

稻塚三代目主人和右衛門玄

行年八十四 (西宗寺過去帳)

以上の資料に依つて稻塚和右衛門は元禄五年に瓦師平井惣助の兄として生れたが、享保二年九月(二十六歳)稻塚家へ養子となつて御細工人となつた。享保十三年八月(三十七歳)御目見格御細工所筆頭役と成り寛保三年九月(五十二歳)萬役人格御細工所元々仰付られ寛延元年二月(木實方祕傳書ニハ三月十八日)(五十七歳)木實方役所創設に付御細工所并木實方元々兼勤を命ぜられる。翌寛延二年三月何れか一方勤を願上げ御細工所元々は御免となつて木實方元々のみ勤める事となつた。明和九年(八十一歳)に木實方元々御免となり安永四年二月廿二日八十四歳にて没し寺町専念寺に葬る、法號は釋種雲水義翁清信士といつた事が知られる。

明治年間、稻塚家菩提寺八束郡川津村東川津西宗寺(眞宗)に改葬された。士分で無かつた爲め今は其住

宅の位置を知る事は出来ない。

(藤木)

ウ

○烏白 (ウキウ)

△烏白木 たうはぜ、なんきんはぜ、なんばんしひ、はじ

諸國ともあり、葉の形紫荊ハナスに似て小さく嫩苗の時ハ紅色にして美し、長すれハ綠色となる。夏月枝の梢ことに穂をなす長さ三四寸花開くときハ黄白色にして栗の花の如し、穂の本に實を結ぶ形圓く微し扁ミあり、形續隨子ウナアゼタに似て三の道あり初綠色熟すれハ黒褐色となる、これを破れハ三子あり外に白き粉ありて核を包む此實より蠟を採り蠟燭を造る。(本草圖譜卷之八十三)

△なんきんはぜ 南京櫛、烏白、大戟(タカト)科に屬する落葉喬木。原産地は亞細亞洲の熱帯地方。現今暖國に栽培す。幹は高さ三丈に達するもあり。葉は廣き卵形にして秋紅葉す。夏單性黄色の小花

開き、實は大いさ三分ほどにて形圓く、秋の末に熟して黒褐色となる。内に三子ありて豆の如く、その外被に白粉ありて核を包む。白粉は製して蠟となすべく、核の仁よりは燈油を搾取るを得。たうはぜ。さつまはぜ。りうきうはぜ。(言泉)

○請口 (ウケケチ)

請口とは本役の外に兼役といふ意なり。

(正井儀之丞氏報)

○漆

△漆 うるし、漆澤本草知名 引難要訣 マロン東醫ラツ實鑑 ツク變名 ラツカ同上 ラ

山中に自生し又培養するもの多し、高木となる。大葉は一莖に七八葉對生し、黄白色の小花攢簇す。子ハ圓くして扁し、この實より蠟を採り是をうるし蠟といふ。此樹皮に切レ目を附置バ白き脂液流れ出るを器に取り、かきませ日に曝し貯へ器物を塗るに用ふ。本邦のものを上品とし漢土のものを下品とす。奥州羽州野州より出すは色白くして性强し、俗にせ

しめうるしと呼び器物を接ぐに用ふるが故つぎうるしとも云。日州より出るハ小細工に用ふ、和州吉野、紀州熊野の諸山より出るハ力弱くつやうるしと稱へて上ハぬりの用とす。下略(本草圖譜卷之七十九) △うるし 漆、漆樹科に屬する落葉喬木。高さ一二丈に達す。葉の形ぬるでに似、鋸齒なく、一柄に四對もしくは六對つつの小葉を著けたる羽狀複葉をなして互生し、夏梢に穂出でて雌雄異株なる黄綠色の小花開く。雌樹には實あり、大さ一分ほどにして黄褐色、乾して漆蠟を取る。樹皮は初灰色にして光澤あれども後割目を生じて粗くなり、傷けて漆液を取る。材は黄色を帯び堅からざれど水濕に堪ふ、漁網の浮子、器具などに作る。うるしのき。「漆樹」和名「漆、宇流之」(言泉)

○運上 (ウンジャウ)

徳川時代に於ける雑税の一種にして、商業、工業、狩獵、漁業又は運送業等に從事する人民より徴收する租税なり、而して一定の率を定めて納付せしむる

を運上といひ、定率なく、免許を得て營業するが爲に上納するものを冥加と云ふ、故に最も判り易く云へば、運上は課税に屬するも冥加は一種の獻金なり、而して運上も冥加も年により増減ある故に、又之を浮役と稱する事あり。
(日本農民史語彙)

エ

○荏胡袋 (エコブクロ)
蠟を絞る節蒸したる櫃の實の粉末を入れる袋。

(野間安之助氏報)

オ

○大坂御藏屋敷 (オホサカオクラヤシキ)

諸侯は參勤交代の爲めに要する、莫大の旅行費並に江戸に於ける入用を支辨せんが爲めに、大阪又は江戸へ其年買米の剩餘若しくは國産を廻送して金銀に替ふる必要上、中國、四國、九州、北國の諸侯は大阪に、關東、奥州の諸侯は江戸に藏屋敷を設け、之

に米其他の國産を廻送して賣拂ひ、若しくは之を抵當に金を借りて江戸の費用を支辨せり。
(正井儀之丞氏報)

延享四年の調査による大阪藏屋敷

藩地	國主	石高	藏屋敷所在地	登七高(米)
雲松江	松平氏	十八萬六千石	土佐堀一丁目白子裏町	三萬五千石
			(今ノ土木監督署ノ裏)	一四萬石

(雲藩職制)

○大辻 (オホツジ)

總計の意。

(參考)

一 石高之事

右石高ト云ハ、村高ノ事ニテ、田畑ヲ檢地シテ土地ニ合セ、上中下ノ位ヲ分ケ、石盛ヲキハメ、田畠屋敷夫々ノ高ヲ寄合セタルヲ石ダカト云、則村ダカ也、高辻ト云モ同ジ事也、然ドモ高ツチト云ハ、一村中ノ高何ホドリト云時ナドニ

ハ、高ツチト云、田畑ノタカラ集メタル儀也、辻ト云字義、會也、物ノ集リタル形、高ニカギラズ、米ツチ金ツチチナドト書、總テ道路ノ四ツチナドノ道ノ出會集ル意也。下略(地方凡例錄)

御徒横目 (オカチヨコメ)

御徒(足輕級)の格にて横目役を勤むるものを云ふ

(正井儀之丞氏報)

御小人方 (オコビトカタ)

杖突、道中吟味、小使等の小役をなすものを小人と云ふ、今の、知事官舎の邊より東の方に設けられたり。

役組外御小人奉行道橋屋敷方兼勤 (百二十五勤)

一人

萬役人小頭

二人

同杖突

二人

杖突

七人

小杖突

四人

道中吟味役

六人

取立者 (一代卒にして帶刀せり) 二十三人

百人者 八十四人

御小人 九百三十八人

普請役御小人 二百七十一人

新川方水主 二十七人

手役者普代部屋頭 一人

同役割合 二人

同 三十七人

同食焚 二人

(雲藩職制)

○御小人小屋 (オコビトゴヤ)

御小人の詰所か。御小人方(オコビトカタ)参照。

○御細工所 (オサイクドコロ)

繪師、鍛冶、筆耕、鞍打、矢師、鐵砲、具足、紙漉、製蠟等を司る。松江市南殿町東側の北角に在り。

組士細工奉行 一人 小人 一人

徒繪軍用方用掛り 一人

同鍛冶 一人

- 目見筆頭 三人
- 同鞆打 一人
- 同矢師 四人
- 小算用繪師 一人
- 萬役人細工大方諸請拂 一人
- 同繪師 一人
- 鐵砲師 一人
- 鐵砲臺師 一人
- 具足師 一人
- 鞍打 一人
- 繪師 三人
- 紙漉 一人

(雲藩職制)

○御先手組 (オサキテグミ)

戦時には先手となるものにして、平時は所々の番詰等を勤む。(正井儀之丞氏報)

○御作事方 (オサクジカタ)

作事を司る。(正井儀之丞氏報)

○御作事所 (オサクジドコロ) 營造修繕等作事を司る役所。殿町市役所の向ひ角に位して東は勘定所、南は京橋川に面したる大なる構をなせり。(雲藩職制)

○押合 (オシアヒ) 木實方山方押合、押合は検査を司る。依て木實方山方押合とは木實方并に山方の検査役なり。(正井儀之丞氏報)

○御仕置所 (オシオキドコロ) 藩の政治軍事を司る最高の役所にして、今の政府の内閣ともいふべき所なり。殿内書院の側に在り、家老仕置、中老格仕置添役のもの茲に出仕す。中老仕置添役は今の參與官の如きものにして、政治上重要な地位を占めたり。

家老仕置、並軍用方 五人

同城代 城代組足輕附 一人

家老並仕置、並軍用方 一人

中老仕置添役、近習頭、地方勝手方請口 一人

中老仕置添役、地方勝手方請口 四人

家老嫡子仕置添役

一人

(雲藩職制)

○押切判

おしきりばん 押切判、わりいん(割印に同じ)二枚以上互に互れる文書又は證書などの、互に連続せるものなることを證するため、兩方に跨がらせて一つの印章を捺すこと、又その印影。(言泉)

○御檢役方 (オシラベヤクカタ)

各役所には夫々元々、押合、内改メ、吟味等の分擔ありて放漫を戒む。(正井儀之丞氏報)

御添米 (オソヘマイ)

役料の外に給せらるゝ米ならん。

例へば甲 祿五〇石 役料五〇俵 外ニ飼料

(乙) 切米一三俵 二人扶持 外ニ生涯米五俵

(丙) 同米一三俵 二人扶持 外ニ墨筆代米三俵

の外ニの分これに相當するか。

(正井儀之丞氏報)

○御添役所 (オソヘヤクドコロ)

副役は中老中より數人を選びて、政に參せしむ、今の政府の參與官の如きものか。(雲藩職制)

三谷家所藏舊記添役起原

貞享四卯四月廿日乙部主税え柳多主計より以書付申渡候覺

一家老共諸事可任差圖事、付無遠慮不可殘心底事

一番頭目附方より之訴、並願之書付受入可申事

一役所皆濟證判、其外用人共仕出候手形等之奥ニ證判可仕事

一御書部屋只今迄之役義御免之事、然共御用之義付

而御家老共申渡候ハ、相動可申事

右之通被仰出候より相始候

役名裏判役與中、其以後表御取次と稱し宣雜様御代

より御仕置添役と號候様被仰出

一御仕置添役と有之御役名は御當職方御政事之御思

慮之助と相成候故、仕置添役と云

依之、仕置之添役と云ふものを大切に相守り、相

勤事肝要之心得と可存事

一添役所は役所とは不唱詰所と云(正井儀之丞氏報)
御仕置所(オシオキドコロ)参照。

○御立藪 (オタテヤブ)

御立山と同じく藩有の藪地をいふ。

(藤木)

○御立山 (オタテヤマ)

御立山とは藩有造林地をいふ。(日本農民史語彙)

○御手船 (オテセン)

藩有の廻船。

(参考) 登米方廻米方は共に米の輸送を司る役にし

て、各郡より納付せる残米は、一旦松江大橋下の米

蔵に納め置き、更に之を御手船(オテセン)に積込

んで海路尾道を経て大阪に送られたり。(雲藩職制)

○御道具方 (オダウダカタ)

道具を司る役を云ふ。

(正井儀之丞氏報)

○御成加 (オナリカ)

なりか 成箇。箇は數の義。取箇参照。租税に同じ。

とりか 取箇「か(箇)は數の義、即ち取箇は取高の

義」田島より納めし米穀金銀などの租税。(言泉)

○御年貢畑

おねんぐばたけ 年貢畑(島)、年貢を課せらるゝ畑

(言泉)

○御登蠟 (オノボセロウ)

大阪表へ廻送する蠟をいふ。

(藤木)

○御武器方 (オブダカタ)

兵器(甲冑、弓矢、刀槍、銃砲等)を司る、今の兵

器廠にして二の丸に在り。組士格のもの之に當る。

(雲藩職制)

○御札座 (オファダザ)

札座は紙幣を發行する所にして、御懸屋は民業にし

て金銀の兩替、貸貸等金錢の運轉をなす所なり。此

二者を合すれば今日の日本銀行の仕事に當る。共に

末次本町(元瀬川氏にて今の織原氏邸の邊)に在り。

(雲藩職制)

○御目見 (オメミエ)

目見とは藩侯に謁見することなり。資格によつて目

見の出来るものと、出来ぬものとあり。

(正井儀之丞氏報)

○隠州方 (オンシユウカタ)

隠州元方

其役所は御勘定所に在りて、隠岐國の事を總轄す。

(雲藩職制)

○隠し目附

かくしめつけ 隠目附、江戸時代の刑事探偵。しの

びめつけ。隠密。

(言泉)

カ

○加米 (カマイ)

加米とは其役の勤功により、役料の内より本俸即ち

祿の外に給せらるゝをいふ。役料は隠居すれば無く

なれど加米は残る。

(正井儀之丞氏報)

○加役 (カヤク)

かやく 加役、本職以外に勤むる役。

(言泉)

キ

○木賃 (キチン) 木賃宿

薪代のこと。

(参考) 木賃宿にて、宿泊料として拂ふたき木の代

價。

(言泉)

○義田目附 (ギデンメツケ)

出雲藩に於ける義田制度の目附役。

(参考) 義田の概念

松江藩に於ける義田は(1)寛延年間の義田、(2)寶

曆年間の義田及び(3)明和年間の義田の三種あつて

各意義内容を異にしてゐる寶延年間の義田制度は中

老小田切半四郎の發案であつて義田所有者を「義田

之民」と稱し高持百姓は義田の民たることを願出で

御禮米を納付して義田の民となつたので、納付せし

御禮米に相當するだけ願人の所有田を免租とし且つ

その田に附屬せる諸役目をも減すべき特點を與へた

田を云ふのであるが實在せる田に付き免租せるや或は高持百姓の持高の中或る石高を免租となせるかは疑問である。而してこの御禮米を以て軍旅飢饉に備へ且つ難澁せる百姓に低利に貸付けるを目的とせるものであつた。

この義田制度の機關として藩に義田方を置き、各郡に義田目附を置いた。義田方の職務は義田御禮米の收納と各郡の貸付を行ひしものであつて、義田目附は各郡に一名づゝ(神門郡は二名)高百石内外を所有する百姓から任命したものであつて、郡役人として郡行政に従事したのであるが、其主たる職務は義田方貸付の不正不公平なき様監督し且つ各村の耕作状況を視察するにあつた。寶曆年間ものは島義田と呼ばれ、寶曆十三年に大根島に設けられたもので本書の義田とは關係の無いものである。

(松江藩經濟史の研究)

○木苗畑 (キナエバタ)
木苗方所屬の畑か。

(参考) 木苗方 苗木の栽培を司る、松江舊城内に在り。人參方、木實方、木苗方、釜瓶方の四役所は仕構役所と稱して、今の專賣局に當り、藩の財政に資する所大なりき。
(雲藩職制)

○木實方 (キノミカタ)
木實方 櫛の木を植えしめ其實を買入れて、生蠟、蠟燭を製造せしむ。今の松平家松江事務所内に役所職場及大なる櫛倉數多ありき。
(雲藩職制)

上三枚橋詰ヨリ南へ

向 南	向 東
木實方 表口四拾間 後口四拾一間二尺 東入拾九間五尺 西入同斷	木實方内 表口貳拾間 後口同斷 南入廿三間五尺 北入廿間五尺
高木小左工門	高木甫兵衛 吉城十右工門 溝江太兵衛 祝彌五左工門 大森平右工門 吉村喜兵衛

(御城下屋敷割)

御城下屋敷割中木實方とあるは最初の役所敷地にし、木實方内とあるは寶曆四年十一月役所擴張の際吉村喜兵衛屋敷跡を取り入れし敷地なり。

今の米子町なる松平家松江事務所所在地の一郭が其の舊趾なり。
(藤木)

○きやらの油 (伽羅油)

きやらのあぶら 伽羅油、髪附油の一種。正保慶安の頃、京都室町なる髭の久吉といふ者の賣初めしものとす。
(言泉)

○伽羅の油座

出雲藩に於ける商座の一。
(参考) 商座といへるものあり、第一は酒座なり。何百石造と云ふ株ありて賣買す、株無ければ造酒することを得ず。
(雲藩職制)

伽羅の油座も右の商座の一なり。
(藤木)

○切畑 (キリバタ)

山間の樹木を切倒し、之を焼て灰と爲し、其灰を肥料として穀物を植る畑地をいふ、大抵三四年にして、

(参考) 木苗方 苗木の栽培を司る、松江舊城内に在り。人參方、木實方、木苗方、釜瓶方の四役所は仕構役所と稱して、今の專賣局に當り、藩の財政に資する所大なりき。
(雲藩職制)

○木實方 (キノミカタ)
木實方 櫛の木を植えしめ其實を買入れて、生蠟、蠟燭を製造せしむ。今の松平家松江事務所内に役所職場及大なる櫛倉數多ありき。
(雲藩職制)

上三枚橋詰ヨリ南へ

向 南	向 東
木實方 表口四拾間 後口四拾一間二尺 東入拾九間五尺 西入同斷	木實方内 表口貳拾間 後口同斷 南入廿三間五尺 北入廿間五尺
高木小左工門	高木甫兵衛 吉城十右工門 溝江太兵衛 祝彌五左工門 大森平右工門 吉村喜兵衛

(御城下屋敷割)

其養分薄くなり、作物繁茂せざれば更に他の古畑跡に立歸り之を切返すを例とす、乃ち雑畑に同じ。
(日本農民史語彙)

○切米 (キリマイ)

士分の受くる米を祿と稱し、徒以下の受くる米を切米と云ふ。
(正井儀之丞氏報)

○銀札 (ギンサツ)

藩紙幣、銀札壹匁(鼠色にして百四十四文に通用す)銀札參分(赤色にして四十五文に通用す)同札貳分(白色にして三十文に通用す)以上の三種あり。
(雲藩職制)

ク

○口書 (クチガキ)

くちがき 口書、罪人の口供(コウキ)を筆記すること、又その筆記したるもの。寺社、士人には口上書(コウジヤ)といへり。
(言泉)

○工土 (クド)

くど 曲突、かまど(竈)に同じ。(言泉)

○藏敷
くらしき 倉敷、倉敷料の略。倉庫業者が、他人より荷物を寄托せられて、受取る保管料。従價率によるものと、従量率によるものとありて、倉出の際受取る。(言泉)

ケ

○現米 (ゲンマイ)
げんまい 現米、ふちまい(扶持米)に同じ。(言泉)

コ

○郷中勤野扶持 (ゴウチウツトメ、ノブチ)
郷中勤(郡部勤)をする爲め給せらるゝ扶持なり。一人扶持は四俵半なり。(正井儀之丞氏報)

○郡奉行 (コホリブキヤウ)
郡奉行は三人ありて、神門、出雲二郡に一人、南四

郡(飯石、仁多、大原、能義)に一人、北四郡(島根、意宇、楯縫)に一人なり。御用所の下に屬して、郡内の政治を司る。(雲藩職制)

○小買物方 (コガイモノカタ)
御隠居様、御前様又は諸役所(木實方は其の一なり)に於ける少量の買物を司る。(正井儀之丞氏報)

○御勝手方 (ゴカツテカタ)
御用所に屬し、財政に關する事務を司る。御勘定所の構内にあり。

中老受け口。(雲藩職制)

○御勘定所 (ゴカンヂヤウドコロ)
會計に關する事務を司る。内に左の區分ありて組外格のもの之に當る。

貸方残方。
收納方。
銀方。

此の役所は殿町市役所の向より東方にして、今尙御勘定所の名を存す。(雲藩職制)

○小算用格 (コサンニョウカク)

會計掛り。(正井儀之丞氏報) 元々参照

○こしき

こしき 瓶、米、豆などを蒸し炊ぐ具。古のは瓦製にして形圓く、底に蒸氣を通ぜしむる細き穴あり。今は木にて造り底に竹の簧を敷き、蒸籠(ロウ)ともしよ。(言泉)

○御内用方 (ゴナイヨウカタ)

木實方に所屬し、役所内の不用物其他を納めて、之を金に替へ、臨時費用に當てる役なり。詳細は本文「十三」を見よ。(藤木)

○御普請方 (ゴフシンカタ)

土工を司る所。小入方の構内に在り。(雲藩職制)

○古物方 (コブツカタ)

諸役所の古物(例へば寺社修理方にては材木、御納戸にては装束類)を司る。(正井儀之丞氏報)

○御免地 (ゴメンチ)

年貢を免ぜられた土地。除地。(藤木)

○小目代 (コモクダイ)

町役所に屬し大目代の物書き役。(雲藩職制)

大目代参照。

○御用所 (ゴヨウドコロ)

現今の内務省に當る、仕置所の下に屬して他の各役所を監督す。番頭、奥列格のもの茲に出動す、之を御用人といふ。其數五、六人ありて機務を分擔して實權を握りしといふ。(雲藩職制)

○御用人 (ゴヨウニン)

御用所へ勤務する役人。御用所参照。

サ

○竿請 (サラウケ)

竿入を請けることか。

(考) さをいれ 掉入、間竿(ケン)にて、地積をはかること。檢地。(言泉)

○廻田山 (サコダヤマ)

八東郡萩酌村々役場について尋ねたが今同村に廻田